

# 社会学とともに

—水曜読書会 100 回記念誌&2007 年度徳島大学榎田ゼミ論集—

『社会学とともに』編集委員会 編

(2008 年 9 月)

# 目次

執筆者一覧	1
まえがき	榎田 美雄・3
『社会学とともに』（写真篇）	7
<b>第 I 部 水曜読書会 100 回記念誌</b>	
第一章 社会学水曜読書会 100 回記念座談会	
橋本 文子・榎田 美雄・阿部 智恵子・中恵 真理子・新名 由佳	9
資料 1 『社会学水曜読書会』テキスト一覧（第 1 回～第 109 回）	
※ 阿部 智恵子作成	47
資料 2 社会学水曜読書会座談会準備用シート	
阿部 智恵子・新名 由佳・中恵 真理子・橋本 文子	59
資料 3 国際医療福祉大学特別講義・地域看護方法論：地域看護と会話分析 （2005 年 4 月 25 日）配付レジュメ	榎田 美雄・63
第二章 社会学水曜読書会（第 51 回目）2002 年 12 月 25 日開催記録	
－大澤真幸『虚構の時代の果て』（前半）を読む－	
榎田 美雄・阿部 智恵子・渡辺 真紀子・村瀬 博志 中恵 真理子・大日 義晴・橋本 文子・多田 和代	65
資料 4 水曜読書会第 51 回レジュメ（大澤真幸『虚構の時代の果て』前半）	
阿部 智恵子	103
資料 5 黒板図（2002 年 12 月 25 日）	榎田 美雄・119
資料 6 水曜読書会第 52 回レジュメ（大澤真幸『虚構の時代の果て』後半）	
榎田 美雄	121
<b>第 II 部 2007 年度徳島大学榎田ゼミ論集</b>	
第三章 家事をめぐる夫婦の互酬性の達成	
－「専業主婦家庭で夫が家事をする論理」のエスノメソドロジー解釈－	
中恵 真理子	127
第四章 グループディスカッションにおける参加の組織化	
－ことば・うなずき・視線が参加の道具となること－	
村中 淑子	133
資料 7 添付DVD収録データ一覧	143
編集後記	153
研究室発行物一覧	155

## 執筆者一覧 (50音順)

(\*は編集委員、所属は全て2008年9月現在)

石川県立看護大学看護学部准教授

阿部 智恵子 (あべ ちえこ) \*

徳島大学総合科学部准教授

檜田 美雄 (かしだ よしお) \*

四国大学短期大学部生活科学科生活福祉専攻助手

河野 和代 (こうの かずよ) (旧姓 多田)

徳島県板野町立板野中学校

新名 由佳 (しんみょう ゆか)

首都大学東京大学院社会科学部研究科社会福祉学専攻

大日 義晴 (だいにち よしはる)

徳島大学非常勤職員

中恵 真理子 (なかえ まりこ)

徳島文理大学保健福祉学部教授

橋本 文子 (はしもと ふみこ) \*

一橋大学大学院社会学研究科総合社会科学専攻

村瀬 博志 (むらせ ひろし)

姫路獨協大学外国語学部

村中 淑子 (むらなか としこ)

宮内クリニック

渡辺 真紀子 (わたなべ まきこ)



## まえがき

徳島大学総合科学部人間社会学科・社会学研究室

准教授 榎田美雄 (kashida.yoshio@nifty.ne.jp)

WWW サイト (本冊子の PDF ファイル公開予定)

<http://www.ias.tokushima-u.ac.jp/social/>

### 1. 解題

榎田研究室の十三冊目の刊行物として、『社会学とともに—水曜読書会 100 回記念誌& 2007 年度徳島大学榎田ゼミ論集—』を発売します。目次を見ていただければわかりますように、本記念刊行物は、2 つの部分と付録 DVD から成っています。以下簡単にそれぞれの部分の意義および概要について説明し、読書案内とさせていただきます。

まず、第 1 部は、「水曜読書会 100 回記念誌」部分です。9 頁から 126 頁になります。この内部はさらに 2 つの章に分かれています。前半の第 1 章は水曜読書会を振り返るための 100 回記念座談会 (全 100 回のテキスト一覧は資料 1 をご参照ください) の記録になっています。定常的な参加者五名による水曜読書会への感想が語られています (資料 2 に基づいて座談会を進めました。資料 3 は 27 頁の阿部発言で言及されているものです)。後半の第 2 章は『水曜読書会』の実際のようなすを記録に残すために、ちょうど真ん中にあたる第 51 回目 (テキストは大澤真幸氏の『虚構の時代の果て—オウムと世界最終戦争—』) をテープ起こしした逐語録 (当時の発表レジュメおよび板書内容については資料 4、5、6 をご覧ください) になっています。

この第 1 部でテーマとされている『水曜読書会』は、正式名称が『社会学水曜読書会』であるところの、徳島大学において榎田が主宰する非公式の (授業ではない) 自主ゼミです。とくに会員名簿は定めていません。誰が来て何を言って帰ってもよいオープンな読後放談会です。毎月だいたい一冊のテキストを一時間半程度かけて一人が報告し、その報告をもとに集まった人間で議論するというシンプルな形式で続けて来ました。少人数でやっています。最大で十人ぐらい、最小で二人の開催規模です。1997 年 4 月に第 1 回を実施し、その後、8 月と 3 月を休んだ 1997 年度以外は年間 11 回ずつ行ってきました (8 月が夏休みなので、前期 5 回、後期 6 回)。途中、2001 年度は榎田の神戸大学への内地研修にともなって、9 月の 1 回のみ開催でしたが、あとの年は休まず同一ペースで開き続け、11 年目の 2007 年 5 月に第 100 回目を迎えました。本記念刊行物は一義的には、この水曜読書会の 100 回記念の発行物です。なお、『水曜読書会』は、社会学研究室の OB・OG に対して開かれているだけでなく、地域の社会学に関心を持つすべての方に対して開かれている読書会であり、この地域に開かれた読書会としての『水曜読書会』の可能性に対して、徳島大学総合科学部から、平成 20 年度創生研究プロジェクトとして宣伝活動支援がなされることとなりました。本記念刊行物の刊行費は、このため、学部長裁量経費から支出されています。

学生の関心の世俗化等を原因として、大学での自主ゼミ活動は全国的に衰退してきているように思われますが、そのなかで、曲がりなりにも 100 回を継続できた自主ゼミとして、『水曜読書会』には、記録が刊行される価値がある、と考えています。読書会の現況を多面的に確認できるよう資料を多めにつけた形で編集しました。記録からいろいろな教訓・特徴を読み取って頂ければ幸いです。

なお、『水曜読書会』は、これからも 200 回を目指して継続していくつもりです。事前連絡なしの飛び込み参加で構いませんので、本記念刊行物の第 I 部を読んで『水曜読書会』にご関心をお持ちになった方は、どうぞ気軽に会をおたずねください。最新の予定は、HP (<http://www.ias.tokushima-u.ac.jp/social/gyouji/suidoku/suidokutop.html>) で公開しています。

第 II 部でテーマとされているのは、「エスノメソドロジー・会話分析」です。第 II 部も、2 つの章からなっており、これらの論文は、総合科学部人間社会学科の 2007 年度の榎田ゼミのゼミ論として提出されたものです。中恵真理子氏の論文（「家事をめぐる夫婦の互酬性の達成－「専業主婦家庭で夫が家事をする論理」のエスノメソドロジー解釈－」）も、村中淑子氏の論文（「グループディスカッションにおける参加の組織化－ことば・うなずき・視線が参加の道具となること－」）もともに、素材は 2007 年 6 月 9 日の「家族社会学研究」でのワークショップから取られています。いずれも、ワークショップのビデオ撮影データを分析したのですが、分析の向かっている方向は若干異なります。中恵論文は、「カテゴリーに結びついた活動」や「カテゴリーに結びついた形容詞」というエスノメソドロジー・会話分析の観点からの、「専業主婦/非専業主婦」カテゴリー対の分析になっています。村中論文は、串田秀也氏の『相互行為秩序と会話分析』（世界思想社）での主張を受けて、その検証と発展を試みる議論になっています。

中恵氏の論文は、「専業主婦」でありながら、家事を夫にしてもらいたいと願うような「規範外れ」の欲望の表明に注目します。そして、そのような欲望であっても、様々な正当化・合理化が場面場面の具体的な状況のなかではかられていて、それゆえ十分にあり得る欲望の形として場面の中で受け入れられているということを明らかにしていきます。論証が的確で、なかなか読ませる論文だと思われました。村中氏の論文は、基本的には串田の主張する「先取り完了」という現象が、ワークショップの場面内でも見て取れるという追試・確認論文になっています。ただし、その追試のなかで、一事例だけ、従来の「先取り完了」概念では包括しえない事例が発見され、その分析に注力しています。分析の結果、他者の発言に文法的にはつながらないため、典型的な「先取り完了」にはなっていないけれども、会話のシークエンス上で十分予期可能な他者の（未発の）発言を間に挟むことによって、「先取り完了」と同等であると見なせる発話が発見されます。村中氏は、この事例を“超「先取り完了」”と（仮に）名付けています。榎田のみるところ、村中氏の推論はよく練られており、十分に論争的な論文になっているように思われました。

## 2. 謝辞等

さいごに慣例にしたがって謝辞を述べて、締めくくりとします。

まず、歴代の研究室員・アルバイターの方々に感謝します。校正稿の原稿への反映などの本記念誌における編集補助業務の実際については、2008年2月までは、志村裕子氏が、2008年3月以降は、宮本有美氏が完璧にやって下さいました。つねに的確な業務遂行で仕事をサポートしてくださった両氏に感謝します。

ついで、『社会学とともに』編集委員会の同僚メンバーである阿部智恵子氏と橋本文子氏に、感謝します。阿部氏は、ほぼすべてのテープ起こしと109回分の発表テキストの一覧表を単独で作成してくれました。また、橋本氏は、編集長として細かく気配りをしてくださいました。二人の積極性と地道さがこの記念刊行物の骨格を形成しました。

また、第Ⅱ部のゼミ論部分に関しては、中恵・村中両氏の論文の素材となったワークショップ（「パートナーシップに関するワークショップ」＝2007年6月9日開催＝）が、文部科学省科学研究費補助金基盤研究（B）「高等教育改革のコミュニケーション分析」（平成18年度～20年度、研究代表：樫田美雄）からの資金的援助を受けていたことにまず言及しなければなりません。記して感謝します。また、ワークショップの共同企画および運営者として杉浦郁子氏（武蔵大学）が、相互行為分析に関わる共同調査研究スタッフとして島田明仁氏（東京大学）が来徳してくださいました。両氏の助力と的確な業務遂行に感謝します。

前頁にも書いたとおり、本記念刊行物の発行費用は、徳島大学総合科学部創生研究プロジェクト「大学関係者と地域在住の医療福祉専門職従事者との連携を促進するためのキックオフ・プログラム」（代表：樫田美雄）からのサポートを受けています。記して感謝します。なお、本事業では、継続的な地域貢献として、2008年の10月18日に公開講演会「特別支援教育と広汎性発達障害のこれから」を、下記要領で開催します。

（[http://www.ias.tokushima-u.ac.jp/social/kasida/houga\\_kaken/081018/1018\\_kouenkai.html](http://www.ias.tokushima-u.ac.jp/social/kasida/houga_kaken/081018/1018_kouenkai.html) にチラシファイルあり）。こちらも奮ってご参加下さい。以下が概要です。

**演 題：**特別支援教育と広汎性発達障害のこれから

**日 時：**2008年10月18日（土） 13：30～15：30（無料）

**場 所：**徳島大学常三島キャンパス総合科学部1号館北棟3階301教室

**講 演 者：**井出 草平 氏（大阪大学）

**コメント：**島 治伸 氏（徳島文理大学）

では、本文の方を存分にお楽しみください。





## 『社会学とともに』（写真篇）

水曜読書会（第25回）（1997年7月14日）  
 歴史社会学入門『教育勅語の社会史』（副田義也 有信堂）を読む  
 社会調査室にて（左から田井、橋本、樫田、阿部）



水曜読書会（第40回）（2000年12月）  
 『「聴く」ことの力』（鷺田清一 TBSブリタニカ）を読む  
 12月の読書会は終了後にクリスマス会をして  
 1年の振り返りと次年の夢を語りあいました。  
 （左から渡辺、島田、橋本、樫田、木野、高橋）

水曜読書会（第87回）  
 （2006.3.15）  
 『子どもが減って何が悪いか』  
 （赤川学 ちくま新書）を読む  
 （ゼミ1室にて）



左から樫田、大林、中恵



左から阿部、大林、中恵、樫田

社会学水曜読書会 100 回記念座談会（2007.3.14）は徳島大学総合科学部第一会議室で開催された。



左から橋本・新名・榎田・阿部・中恵  
座談会で取り上げた本とともに



水曜読書会 100 回の歴史を語る榎田先生



参加者は、自分の関心テーマと  
水曜読書会で取り扱った書籍と  
の関連について語り合う。



第 I 部

# 水曜読書会 100 回記念誌

## 第1章 社会学水曜読書会100回記念座談会

橋本 文子・樫田 美雄・阿部 智恵子・中恵 真理子・新名 由佳

平成19年3月14日午後at徳島大学総合科学部内

■まえがき 以下に掲載する「座談会記録」は、平成19年3月14日の第98回水曜読書会の前に行われたものである。本座談会は、平成19年5月の第100回水曜読書会の際に、その内容の書き起こしが配布された。本記念誌にはその書き起こし版原稿をもとに、1年間かけて校正されたものが掲載されている。編集時に補注が〔〕で書き加えられている（補注の文責は編集委員会。委員会代表は、橋本文子）。座談会参加者は、最近の定常的参加者から選ばれたが、話題は、草創期から10年間の話題が語られている。

### ■参加者プロフィール（発言順）

※所属はいずれも座談会開催日（2007年3月14日）現在。

橋本 文子（はしもと ふみこ）：徳島大学医学部保健学科講師。『水曜読書会』は1997年4月（第1回）から参加し現在に至る。平成8年から2年間、徳島大学大学院人間・自然環境研究科人間環境専攻において樫田の修士論文指導を受けた。本座談会では司会を務めている。

樫田 美雄（かしだ よしお）：徳島大学総合科学部人間社会学科助教授。「社会学水曜読書会」（1997年4月～現在）を主宰。研究領域は社会学、エスノメソドロジー。

阿部 智恵子（あべ ちえこ）：石川県立看護大学助教授。『水曜読書会』には1997年9月から参加し現在に至る。平成11年から2年間、徳島大学大学院人間・自然環境研究科人間環境専攻において樫田の修士論文指導を受けた。

中恵 真理子（なかえ まりこ）：「文化の森スクール」講師。『水曜読書会』は1997年4月（第1回）から参加している。平成9年から2年間、徳島大学大学院人間・自然環境研究科人間環境専攻において樫田の指導を受けた。

新名 由佳（しんみょう ゆか）：徳島大学総合科学部人間社会学科アジア研究コース4年生。学部共通の授業で樫田の講義を受けて、社会学というものに興味をもち参加。『水曜読書会』は2005年72回目から参加している。

## ■はじめに

### ○司会者挨拶（橋本）

司会：総合科学部人間社会学科、助教授檜田先生が主宰されておられます『水曜読者会』は、本日 98 回目を迎え、5 月には 100 回目となります。『水曜読者会』100 回という大きな節目を記念し、檜田先生と語り合う会を開催することになりました。これまでの『水曜読者会』をふりかえりつつ、さらなる発展を願うべく、本日の座談会のテーマを『自分の関心テーマと読書会で取り上げた本との関連について』ということで企画いたしました。年度末のご多忙の中、皆様にはお集まりいただきまして本当にありがとうございます。本日の進行役を務めます徳島大学医学部保健学科の橋本文子です。どうぞよろしく願いいたします。オリエンテーションは先ほど終わりましたので、まず参加者の皆様に、お名前とご所属について簡単に自己紹介をお願いしたいと思います。その後に、檜田先生にインタビューしていこうと思います。それではまず檜田先生から順番にお願いいたします。

### ○参加者の自己紹介

檜田：徳島大学総合科学部で社会学の教員をしております檜田美雄と申します。『水曜読者会』は私、1996 年 10 月に着任しまして半年後 1997 年 4 月から始めまして、阿部さんが数えてくれたおかげで丁度 100 回ということで、今回こういう企画をすることができました。阿部さんが数えてくれるにあたっては、当然殆どに出席しているという大変な偉業がありまして敬意を表したいと思います。他のメンバーの方々も、今回資料を読ませて頂きましたがそれぞれ読んだものについて記憶にとどめたり、自分の研究に活かしたりなさっているようで、大変嬉しく思っております。どうぞ今日はお手柔らかによろしくお願いいたします。

阿部：石川県立看護大学から来ました阿部智恵子と申します。平成 11 年から 2 年間、徳島大学大学院、人間・自然環境研究科、人間環境専攻に在籍しておりました。大学院の指導教官として、檜田美雄先生にお世話になる以前の科目等履修生の時から出席させていただいております。この表で見ますと、1997 年 9 月 24 日の第 5 回目の橋本文子先生の発表の時から参加させていただいているようです。この『水曜読者会』は、私の人生の中でとても、大きな位置を占めております。大学院で学んでいた時は、もちろんのこと大学教員になってからも、『水曜読者会』は、ずっと心の支えでしたし学ぶことの原点がありました。これも、『水曜読者会』を主催してくださった檜田先生はじめ、共に歩んできた『水曜読者会』メンバーの皆様には色々感謝しております。ここに、いらっしゃる方たち以外にも、100 回目までの間には、本当に多くの方が参加していただき、たくさんの議論をすることができました。今

日は 100 回記念の座談会ということで、2 年前から楽しみにしておりましたので今日は有意義な会となるように祈っております。どうぞよろしく申し上げます。

中恵：私は文化の森スクールという塾の講師をしております中恵真理子と申します。私は『水曜読書会』には第 1 回目から参加させていただいております。途中、病気で出席できなかったこともあったのですが、病気のために研究から遠ざかっている間も含めて、ずっとこの『水曜読書会』だけには来させて頂きまして、なんとか勉強と少しでも縁がつながることができたということで、皆様には感謝しております。これからも未熟というかできない私なのですが、研究を続けてまいりたいと思っておりますので、この 100 回を機になお一層努力したいという決意も込めて感謝の思いで「自分の関心テーマと読書会でとりあげた本との関連」について話させて頂きたいと思っております。どうぞよろしくお願ひいたします。

新名：総合科学部人間社会学科アジア研究コース 4 年の新名由佳です。読書会には 72 回目の「不自由論」から参加させていただいております。きっかけといたしましては学部共通の授業で榎田先生の授業を受けて、社会学というものに興味をもち、少しでも知識を広げられたらということで参加させていただきました。よく欠席しておりますが、自分のためにもなるべく知識を増やしていき、また今後の進路にも関わらせ、有意義にしていきたいと思っておりますので、これからもよろしくお願ひします。

橋本：最後に私は徳島大学医学部保健学科の橋本と申します。今日の司会をつとめております。私は丁度榎田先生が 96 年の 10 月に着任されたときに指導教官になっていただきました。院生だったんです。最初の 1 回目から参加させていただいております。大変印象深い 1 回目でしたけれども、特に漫画を取り上げるということでユニークな会だったなど今でも思い出します。途中、仕事で来られなかったりホントに不真面目なメンバーだったと思いますが、今日を迎えるにあたって色々振り返ってみますと、私の関心テーマに近いものを本として選んでいただいたということを感じております。今日はこの後座談会も嬉しく思いますし、今日のために色々ご準備して下さった阿部さんに特にお礼申し上げたいと思っております。

## ■第一部 榎田へのインタビュー：100回の歴史を振り返って

### ○研究者人生と『水曜読書会』

司会：それでは参加者の自己紹介が終わりましたので、さっそくですが第一部として榎田先生に、100 回の歴史を語っていただきます。先生は 96 年の秋にご着任されまして翌年 4 月から『水曜読書会』を始められ、途中内地留学で休憩というか、お休みの時もあったんですけども、継続して続けられております。これは、大変すばらしいことだと思っております。先生の『水曜読書会』に対する色々な思いや経緯をな

るべく自由にお話いただきたいと考えております。先生、どうぞよろしく申し上げます。

榎田：ほうっておくとたくさん喋ってしまいますので、適宜重要そうなことに誘導していただいて時間が有効活用できるようにお願いします。

実は、今日ここに 20 分前に来なければいけないのが、登場がぎりぎりになってしまって申し訳ありませんでした。その理由をいうところから始めようと思います。実は現在科研費の報告書と調査実習の報告書を制作しております、それぞれに DVD がついております。そしてその DVD には、これまでの調査実習報告書の全てを PDF ファイルにしたものが入っているんです。なんでそんなことをしているのかと言うと、心の中では 10 周年という感覚が芽ばえているからなのです。先ほど、冒頭にも申し上げましたように、たしかに 1996 年 10 月に徳島大学に着任するにはしたのですが、ところが着任が後期からですのでゼミがない、従って自分の卒論生もない、半年お休みのような状態でした。実際自分がゼミを持ったり、調査実習を持ったりしたのが、1997 年 4 月からということになります。そうしますと、今、2007 年 3 月が丁度 10 周年という感じになっております。それで、『水曜読書会』は 8 月をお休みにしておりますので年間 11 回なんです、先ほど橋本先生からご説明がありましたように、内地留学で神戸大学にいつている間、丸 1 年間ほど休んでおりました。じつは夏休みに 1 回だけやりましたけれども、そこでかなりの回数お休みにしておりましたので、今年が 10 周年と 100 回記念ということで時期的に丁度重なったという訳です。それでまあ言い訳に過ぎないわけですが、あちらの 10 周年を終わらせてからこちらの 100 回記念に来ようという感じで、そんな感じで遅れたというような感覚をもっております。

それで『水曜読書会』の意義というものを先週から考えていました。その結果、結局のところ、これは自分でも驚いたことなのですが、自分の大学教師生活の中心は徳島大学なのだろうと、そしてその中心に調査実習と『水曜読書会』があるのだ、ということに思い至った訳です。今まだ 45 歳なのですけれども、きっと 65 歳になって振り返ったり 75 歳になって振り返ったりしたとしても、そう思うことになるだろうという確信を強めております。これが驚きだったというのは、着任した当初は、そんなことは思っていなかったんですね。着任した時は、自分はペーペーで今からやることは、スタートラインの本当に始まりの一部にすぎなくて、どんどん研究者としても教育者としてもやることが変わって行って、世界が広がっていくのだろうと思っていたのです。そう思っていたのですが、10 年経ってみて、やっていることは基本的には 1 年目と変わりがありません。自分の生活のかなりの部分を調査実習と『水曜読書会』にかけている。時間的には『水曜読書会』は月 1 回ですけれども、大学の業務は、橋本さんは同じ大学ですからよくご存知だろうし、阿部

さんももちろん知っていらっしゃるだろうと思いますが、雑務の海です。それで、そんなものに自分の人生をかける気にはならないわけですね。とすると、今度こんなことやってみよう、と考えたり、実行したりすることに使える時間は、本当に本当に、大学で働いている時間のごく一部だけだということになります。でもそこが貴重なのです。その貴重な時間が調査実習の時間であり『水曜読書会』の時間である、そう考えますと、大変この『水曜読書会』の意義は大きかったんだなあ、という風にいま思っております。先ほどから申し上げましたように、1年目から言っていることがあまり変わっていないということを考えると、自分にとっての仕込み期間、研究者としての仕込み期間が、大学院生時代だとすれば、その仕込み期間で仕込んだすべてがここにつぎ込まれているわけです。その後神戸大学に内地留学等しておりますが、ほとんど仕込み足しをしていません。そういうなかで、なんとかかんとか自分の知的な水準を維持するのに『水曜読書会』を活用させていただいてきました。と考えると、これがもう10年続くかどうか、は大事な話です。まあずいぶんと気がはやい話ですけれども、あと10年続けることができれば、自分の研究者人生としてなにがしかのことをやったという感じになるだろう。けれども、これが、あと1～2年で終わってしまうとすれば、そこまでのやつだったという感じになるように思われます。そういう私の知的水準の持続を計るバロメーターとしての価値も、『水曜読書会』にはあると思っております。

### ○『水曜読書会』前史

さて、冒頭から、思いつき話をしてしまいました。すみません。先月阿部先生から、この座談会で話す企画を考えるようにと言われたときに、考えたことがあり、そちらを2点に分けてお話するのが、より、今日の集まりの主旨にかなっていると思います。そちらに移りたく思います。一つめは前史です。すなわち、『水曜読書会』を始めるにあたって何を考えていたか、その前史として自分はどんなことをモデルとして考えていたかということをお話したいと思います。二つめは『水曜読書会』の目標として冒頭掲げたものは何か、これはさらに細かく分けてその内容を3点に分けてお話していこうと思います。

前史としてはですね、実は後半の目標ともかかわるのですが、自主的な読書会をいくつかやってきた経歴があります。自主的な読者会経験として自分の前史をたどりますと、大学生の時に、私、大学に入りましたのは中央大学という大学なんですけれども、そこで今となっては驚くような話ですけれども、『共産党宣言を読む会』とか、そんな読書会をやっているような学生さんがいました。今はないですよ、でも当時は、マルクスのもを読む、エンゲルスのもを読む、というサークルは、当時は大学にはいっぱいあったわけです。そういう研究会で読書会経験を



していました。もっとフォーマルなものとしては『社会心理学研究会』という中央大学のサークルがありまして、入学してそこに入りましてサークル活動のなかでいろんなテキストを読みました。たとえば栗原彬のものを読んだりしました。当時はスターだったんですね。今じゃ知っている人も少なくなりましたけれども立教大学の栗原先生のものを読むような読書会を中央大でしておりました。その後私は中央大学を1年で中退しまして都立大学〔現在の首都大学・東京〕に移りました。東京都立大学ではサークルとして『都市問題研究会』というサークルを部長として一応率いておりました、部室でお昼に、読書会活動をしていました。まだ当時はバブルがはじけてなくて夕方になるとみんな忙しいんですね。バイトに行かないといけない、遊びに行かないといけない、そういう感じがありましたので、夕方読書会ができないので、お昼休みにお弁当をもちよってやる読書会というのをしておりました。今でもときどきやりたいという気持ちになるんですけども、たとえば市販雑誌を網羅的にチェックする会というものを作ってですね、みんなが日頃読んでいる雑誌をお昼休みに持ち寄って、みんなが簡単に説明するというような、お昼休み50分で5人集まって5つ雑誌を紹介し合うというような会をしていました。一人の人間が日常的に読んでいる雑誌というのは、あまり範囲が広くないのですが、5人がそれぞれ読んでいる雑誌を持ち寄ると、社会のことがちょっとは分かる、というような、今思えば社会学的な行動をしておりました。そういう活動の中で『都市研紀要』という雑誌を発行しまして年1回、1号2号3号4号5号6号7号8号と、たしか8号ぐらいまでは出ているのですけれども、そういう活動を都立大学にしている間にはしておりました。

『都市問題研究会』で部長をしていた頃はまだ学部の2年生、3年生ということで研究的なテーマではなかったのですが、大学院に進学して、東京都立大学社会学専攻に進んだ後では、いわゆる研究レベルの読書会をいくつかやっておりました、田崎英明さんを講師にフーコーの読書会を行ったりしておりました。でもここはまだ言いたいことではありません。言いたいことの前振りです。『水曜読書会』の前史として本当に言いたいのは、もう少しあとの時期のものになります。つまり、ここまで述べてきたような読書会の諸活動のなかで今回の『水曜読書会』に近いものは何かと申しますと、都立大を修士で終えたあと博士課程に筑波大学で入学した後の読書会、筑波大学で副田義也先生門下に入って参加した「てのひら会」という会だと思います。これへの参加経験が『水曜読書会』の直接の前史になるかと思っています。ここにお集まりの皆様は、今月のテキストを知っていると思います。今月のテキストは、副田義也著『あしなが運動と玉井義臣』ですけども、今申しあげた「てのひら会」は副田義也先生が主宰している会で、筑波大学の大学院で、副田先生を指導教官と仰ぐあるいは副田先生を指導教官としないまでも、副田ゼミには出

ている、というような学生が自主的にやっていた読書会です。名が体を表す、ということで、てのひらを返したようにありとあらゆるものを読むという活動をしていました。たとえば、副田先生御自身はこの本の著者紹介にもあるようにある種福祉社会学的で文化社会学的な諸分野、社会史研究、社会運動研究、老人研究、子どもの福祉研究等々の領域を専門の領域にしていらっしゃるんですが、「てのひら会」では、もっと幅広く、都市社会学のものも読みましたし、理論のものも読みました。ありとあらゆるものを1か月読み切りで、ここが大変なところなのですが、1か月1冊のペースで読んでいくということがモットーでした。それで1、2年経ちまして自分が幹事になって本を選ぶという立場になったときに「これはおもしろい」という風に思いまして、自分が大学教員になっても同じように学生さんと読書会をしたい、授業ではなくて、授業だと概要やシラバスがあつてしまわれてしまうわけですが、そのようなことではなくて、社会学的な関心で何でも読んでやるという研究会をやりたいなあと思うようになりました。これが直接の前史になるかと思えます。思いの外時間をとってしまいました。すみません。

### ○『水曜読書会』の3つの目標

今申し上げたような前史と結びつけつつ、後半の話題に入っていこうと思います。この読書会を立ち上げるに当たって3つ目標を立てました。それぞれについて、色々ご批判もあろうかと思えますので、こちらは少し丁寧に話をします。これからの10年を、今後の10年につなぐためには、ご批判を受けて直すべき点は直すということをしていかなければならない、と思っています。そういうきっかけになってこそ、節目の座談会をやる意味があるのだ、と思っていますので、どうぞよろしくお願いします。嘘八百だとか、そんなことでできていないとか、そういうお叱りを頂ければ幸いなのですが。

目標の一つめは、授業で身に付くことは少ないので「少人数自主ゼミ」を非公式にやるということが、それ自身が目的だったということです。何を読むのだというようなことはどうでもよくて、基本的に公式のものはだめだ、公式のものでは身に付くことが少なくて、非公式なものではじめて身に付くことが多い。つまり、行っても行かなくてもいいところに自分が自主的に参加するということが、何か価値のあることである。非公式性こそが、我々が本を読むときに自由な読解を可能にする、本気で読むことを可能にする、そういう環境を我々に与えてくれる、と私は信じています。従ってちょっと悪口になってしまうのですが、徳島大学に来て、掲示板をみたときに、自主ゼミ、読書会の掲示がほとんどないということに唖然としてしまいました。いまは、国際関係論の饗場先生の自主ゼミとか、いくつか自主的な読書会や研究会が行われているということ、その後知ることが出来たので、「ああ、

ちゃんとやっているんだ」と思っていますけれども、最初に来たときにはそういうことが全然わからなくて、少し意気込んで、「でもぼくはやるぞ!!」と思いました。繰り返しますが大学で何かを身に付けようと思ったら授業では本当に限られたことしか身に付かない。このことはいまでも本当にそうだ、と思っています。というのは、自主的に、他人から与えられたこととは違うことをしようという意欲が役に立つようなことをこそ、大学では身につけるべきだからです。少人数自主ゼミを非公式にやりたいということで、名前は何でもよかったのですが、『社会学水曜読書会』という名前にしました。これは阿部さんには7、8年前に話しましたが、このような研究会を持続させるためには同じ枠組みで続ける、止めずに続けることが大事なので、タイトルの中に水曜と書いておけば水曜にやるのは明らかですし、その結果「何曜日にやるんだっけ」とか「火曜日だと思って来なかった」というような言い訳ができませんので、『水曜読書会』という形で立ち上げました。これが一つめの内容です。

さて、二つめです。二つめは私自身の社会学研究者としての方針と関わるのですが、「学際性」です。「学際性」は社会学にとってはとても大事な要素だと信じております。社会学の中にはそのように思っていない人もいるみたいなのですが、最近では連字符社会学ということで政治社会学とか医療社会学とか、教育社会学とか、社会学の中も様々な分化が発生しているのですけれども、社会学という以上そういうものを社会全体の中で位置づけ直す志向性があるはずで、つまり、政治社会学が政治学とは違うのはどこかといえば、政治社会学は、社会全体と政治を結びつけるから政治社会学なわけです。教育社会学が教育学とどこが違うかといえば、教育社会学は、社会全体の変化と結びつけて教育を考えるから教育社会学なわけです。すなわち、社会学はすべからず社会全体との関係を考えているべきなのであり、つまりは、学際性をもっていないわけにはいけなくて、そういう意味では「てのひら会」のコンセプトであった、「ありとあらゆるものを社会と結びつけて考える」という方向、そういう方向での社会学者として訓練が必要であって、それは巷で言われている学際性を重視するその流れとフィットして社会学者にとっても重要だし社会学を専門としない人、生業（なりわい）としない人にとっても価値があることだろうと思われました。そこに協同して研究会をやっていく基盤が成り立つだろうと思いました。なお、学際が大事ということで、具体的には、以下のように考えてきました。初回のチラシをもってくれば分かりやすいですが、初回のチラシや2回目のチラシにはテーマが書かれてあります。この『水曜読書会』がどんなテーマでやるかということが書かれていて、「フェミニズム」であるとか「人類学」であるとか「哲学」であるとかを積極的に読んでいくのだということを、1回目や2回目のチラシには書きました。最近のチラシは過去に読んだ本の紹介欄が大きくて、テー

マ欄が小さくなっていて、あまり書けてないのですが、「学際的に読んでいく」という方針自体は10年間持続していると思っています。ここにお集まりの皆様が自分の関心にフィットしたテーマがこの『水曜読書会』にある、とお考えならばそれは実はフェミニズムに関心があったり、人類学に関心があったり、哲学に関心があったりしたからだという解釈もできると思います。それで、私自身は、経済学に個人的には関心があるのですけれども、ここで解説するほどの能力を持っておりません。数学にももちろん関心があるのですけれども、ここで解説するだけの能力を持っておりません。自分の学際性は幅の狭いものだという反省があります。けれども、そういう自分が手に負える範囲で学際的に勉強会をやりたい、というのが二つめの目標でありました。

三つめの目標は、「現場の人と語り合う場を持ちたい」ということです。先ほどの二つめのテーマに似ているのですけれども、福祉医療の現場の方や若者の方と、そういう現場の人と語り合う場を持ちたい、ということです。こういう言い方は恥ずかしいのですが、私は45歳で、そこにいらっしゃる新名さんとは、親子ほどの年の差があります。もう最近入ってくる学生さんは、年齢差が大きすぎて、同僚に対してはつい「子どもたち」って呼んでしまっています。「学生さん」と言わずに。それでこうなると社会学者としてはひとつの危機なわけです。基本的に社会学者は、自分が歳をとって行って若者と年齢が離れていくと若者論ができなくなる。中年と年齢が離れていくと中年論ができなくなる。そうやって仕事のできる領域がどんどん狭まっていくという学問だと思っているのですが、その一方で、社会学者であるならば社会全体を論じなければならず、その観点からはできるだけ若者や中年のことも、老年のことも同様に論じていかなければならないので、いろんな世代のいろんな職場の、それぞれの現場にある人と話しあう場所は重要な訳です。ありがたいことに、これまでの『水曜読書会』には、福祉の現場の人や教育現場の人、あるいはボランティア活動をしていらっしゃった四国大学の方も来てくださったし、1回だけでしょうかソーシャルワーカーの団体の事務局長の方もきてくださったことがありました。理学療法士の方も来て下さっていたし、ありとあらゆる現場の方に対して、ウエルカムと言っていたら、馴染んでくださったわけではないにしても、1、2回は来て下さる、ということで結果として色んな方が来て話をしていって下さいました。それは私の目標どおりの流れでした。社会学というのは現場と結びついているところに強みがある学問だと思いますので、現場の人と語り合う場として読書会を持ちたいというこの三つめの目標も大事にしていきたいと思っています。以上、三つの目標をもって始めたというのは、後からつけた理由というのではなく、当初から考えていた理由としてメモにあったものをまとめ直したものです。

繰り返す形で申し上げますと、「少人数自主ゼミ」をやる。「学際的な読書会」を

やる、「現場の人と語り合う場」として生かしていく、これら三つの目標を持ってやってきて、曲がりなりにもそれらの目標を維持したまま、100回をやり抜くことができたのではないかと考えております。とりあえずここまでが準備してきたお話ですが、何か質問していただければそれにお答えするという形でさらに充実させていこうと思います。

#### ○参加者からの質問

司会：大変分かりやすくまとめていただいて、司会がいらないようなお話だったと思います。ありがとうございます。初めてお伺いするようなこともありまして以前前史とおっしゃったところでリーダーとして自主ゼミを率先してされていたこと、研究者としての姿勢そのものが『水曜読書会』に生きていたのだということを思いました。私の感想のようになってしまいましたが、私たちがメンバーとしてそれをどれだけ返せたかということを見ると反省している段階です。せつかくの場ですので感想でもいいですけども質問とか今のお話をうかがって更にお尋ねしたいようなことがありましたら、他の方いかがですか。

#### ○テキスト選定のこと、あるいは、社会学コミュニティの存在地について

中恵：先ほど学際的なこと、先生が先ほど社会学には学際的なことが必要で人類学・哲学の中から本をお選びになっていたということですが、私は振り返ってみると私に割り当てられたテキストとか研究というのが、先を見越されて当てられていたかのような印象をたびたび持ち、メンバーの人とも話したことがあるのですが、自分に当てられているというように。そういうねらい、メンバーに対して発表は教育的な配慮でしょうか？ということが質問なのですが。

榎田：途中で、会に組織論的な意味での質の変化があったということを確認すべきなのでしょうが、私自身はまず「てのひら会」と同じに、来る者拒まず去る者追わずという方針で、流動的で人の出入りがある程度あることが目立つような研究会をと思っていたのです。けれども、中恵さんが言ってくれたように途中からほとんどメンバーが固定して、このテキストならこのメンバーが発表するだろうと思う形で、テキスト選びをするようになってしまいました。毎年3月にテキストを机上にたくさん積み上げて、「担当希望のテキストがあれば申し出てください」と「担当希望受付」をやっていますけれども、テキストを本屋で探している時点で、これなら中恵さんがやってくれるだろう、これなら阿部さんがやってくれるだろうと事前に当てはめを考えるようになっているのは確かです。このことはメンバーの関心に沿った読書会運営に配慮しているということもできるでしょうが、しかし、このようなやり方が、『水曜読書会』の、当初からの目的目標だったかということ、そんなこと

はないということも言えると思います。先ほども主張しましたが、幅広く、日頃自分が読まないものを読んでいきたいということも『水曜読書会』の目的でした。このことは、同時に中恵さんにとっても中恵さんが日頃読まないものも読むべきだという意見を私が持っているということでもあります。ですから、そういう当て込みがあったと中恵さんがお感じになるのならば、それはその意見の面からは、私の失敗なのです。つまり新しいものを読む機会としての『水曜読書会』が中恵さんにとってはそうになっていなかったということだからです。現実には中恵さんがおっしゃるように、本を選ぶ段階でメンバーの顔が浮かんでいるという面はあります。それがいいことか悪いことかということは今申し上げたように、ちょっと微妙な面があるというのが今の私の意見です。

中恵：私は当て込みというのは大分後になってから気づくということで。むしろ先生が当初のねらいとおっしゃったように私だったら読まない、自分だったら選びそうもない本を選んでくださって、それが結果的にすごく印象に残っているということがあったものですから、すごい先見の明があるというのはおかしいのですけれども、何か私の先を読まれているような気がしていました。

樫田：こういうことはあるのかもしれませんが。素朴過ぎる議論で恥ずかしいのですけれども、日本の社会学というのは結局のところ東京と大阪にしかないと思っている訳です。先ほどから言っていますように社会学というのは先生から受け継ぐというよりは自由闊達に自分たち同士で読書会をやって育んでいく面が大きい訳です。そういうような自由なサークルが成立するのは、大学院博士課程をもった多数の大学が存在する東京地区と大阪地区だけだ。そういう大都市にしか、若手社会学者のコミュニティを成立させる環境がない、という風に樫田は信じております。もちろん東北大学にも優秀な若手研究者がいますし、九州大学にも、北海道大学にも優秀な人々はいますが、実際のところ新しい芽というのは東京と大阪にしか育たないと思っております。徳島に私が来るということは簡単にいえば東京や大阪ではこれからの社会学はこんな感じになっていくと考えられているし、こういうのがいいセンスだと思われる、ということ、5年遅れ、10年遅れ、15年遅れで地方に広めているという側面があります。もしそのような理解に当たっている面があるとするのならば、私が日本全体に15年後に広がる理解であって、東京では先行して芽ばえている理解を東京で身につけて、徳島に持ち込んできたのが、それが日本全国に流布する5年前であったとするのならば、中恵さんからみて自分がやりたいと思ったことが5年前に示唆されていたという現象にたまたまなってしまう、ということもおきるように思われます。これは中恵さん個人を当て込んでテキストを選んでいるのではないという話にもなります。つまり、同じようなテーマでも社会学者が論じるときに様々なパターンがありますから、Aという方向は伸びる、Bという方向は

廃れていく、Cという方向はこれまでの繰り返しであってくだらないということがあります。そういう中で、新しい芽だっていう方向につながるテキストを、この『水曜読書会』には出してきているつもりです。それが中恵さんにとって、有意味に思えた、自分にフィットしたテキストに思えた、そういうことなのかもしれないと思っています。

中恵：ありがとうございます。

### ○自由参加研究会としての『水曜読書会』

司会：中恵さんと先生とのやりとりに触発されて、もう一人ご質問ないですか？新名さんいかがですか？感想でもいいですけども。

新名：目標を改めてお聞きして、自主的にするというような点は自分ができていないので反省しなければという気持ちなんですけれども。こういう機会（『水曜読書会』）はあまりないので改めて貴重な場に参加させていただいていると思いました。以上です。

阿部：新名さんは本当に自主的にやってきたのですごいなあとと思います。

新名：掲示板で見かけて、はい。他にそういうのはなかったんで。なかなかめったにない機会だと思います。

樫田：国文では自主的な読書会をやっていっしょらないんですか？そのコースの中だけであつても、じつは授業とは別に自主的にやっているというような。

新名：ないですね。

樫田：大学で自主的な読書会がないということは、授業しかないってことですか？

新名：そういうことは授業で教わります。あと、授業の中で本とかを紹介されるだけですね。そういうものはないのが普通だと思っていました。饗場先生のものも私からしたら、そういうものをやったださっている先生がいるんだという感覚で。でも、そちらの方は専門の学生しか入れないような印象があつて。こちら（『水曜読書会』）は掲示板に自由にと書いてあつたので出させてもらっているんですが、ありがたいです。

### ○院生にとっての『水曜読書会』・教員にとっての『水曜読書会』

司会：時間は超えているとは思いますが、ここまできたら阿部さんにも一言お伺いします。

阿部：私は11年前の科目等履修生の時から参加させていただいております。大学院生として仲間たちと切磋琢磨していくことは、私の場合、『水曜読書会』を通して行われたと思っております。いろいろな本を読みましたが、どの本も現代社会論に結びついていくんだということが、途中から分かりました。『テレビCMを読み解く』とか『医療現場の会話分析』とか印象に残っている本はたくさんあります。どの本

も現代社会論に結びついていくということが分かったのがすごく収穫で、そして、社会学に触れたことがとても新鮮で、その時から私の社会への視点が広がっていったように思います。毎回、不思議さ、驚きの連続で『水曜読書会』がとても楽しみだったのを覚えています。知的刺激をいっぱい受けて、ワクワクする感じでしたね。議論をする楽しさを知ったのも『水曜読書会』でした。こういう「知的訓練をする場」としての機会を与えてくださった榎田先生やメンバーの方に感謝しています。

司会：榎田先生最後に何か一言お願いします。

榎田：実は恥を忍んで言うと、私は本を読まない人なのです。上野千鶴子もこの間書いていましたけれども、仕事で読む本が中心になると本を始めからおしりまで読むというようなことは少なくなってですね、買った本のうち2割ぐらいを斜め読みして自分の仕事に使う、そのうち半分ぐらいはあきらめてほとんどを読みませんがあとは置いておくだけ、というような読み方に今はなっています。まあ逆を言えば自分の仕事に必要なところはどこかということがちょっとは分かるようになってしまったので、そういうような時間の使い方になってしまっているという面がありますが、結局、今では買った本の8割は読まないですね。ではなぜ買うかという絶版になったら困るということで、あるいは、論文を書こうとした瞬間に集め始めたら締め切りに間に合わないということで買っているわけです。買って置いて積んで置いて、論文って同時に並行して複数の分野は書かないですね。それで、ある分野の論文を書いているときには5年かけて集めたその分野の本を机の脇に積み上げてざっと読む。今私の場合地方自治論の原稿を書いたりするんですが、そんな仕事は5年に1回くらいしかしないわけです。すると5年間かけて集めていた何十冊かの本を書棚のあっちこっちから探してピックアップして、使えそうな部分にまず付箋をはって、というような仕事の仕方をしています。そういう時にも、けれども領域での議論の文脈をつかんでおく必要はあるわけです。その領域でどんなことが今起きているかを頭にいれおく必要があるのです。それが出来ていないとピックアップして積みあげることも、必要そうな箇所に付箋を貼ることもできないんです。勝手ながらこの『水曜読書会』をそういう時の、ある特定領域の概要を頭に入れるときの仕事の基盤づくりに利用させていただいてきました。実はここでしか大澤真幸氏のものもほとんど読んでいませんし、最近では千葉大学の広井良典氏のものもここでしか読んでいません。原稿を書くときに、結局広井は何を言っているのかということはここで読んだ新書で把握しておいて、後は自分が使いたいぴったりの用語を広井がその新書で言っていなかったとしても、どうせ広井はこんなことを別の言い方で言っているはずだ、と予想して類書を当たっていく、そういう探索の羅針盤的意味あい、ここで読んだものを使わせていただいておりますので、みなさん以上に『水曜読書会』を活用しています。私にとっての読書会のメリットのひとつはこの



点にあります。自分にとって未知の主張を包括的にチェックするために、実は端から端まで読んだことのない人の主張を、とりあえず1冊だけでも端から端まで読んでしまうというために、私は参加しております。皆さんの中にも同じような関心でここにいらっしゃる方がいるようですし、あるいは別の関心で、別のメリットを感じながら参加していらっしゃる方もいらっしゃるように伺いました。いずれにしても、ギブアンドテイク関係がここにはある、あるいは最近の言葉で言えば win-win 関係となるようなものがここにはある。そういうことが成り立っているというような感想を本日は聞くことができたので、運営者として主宰者として自信を強めた、というかやっていて良かったというのが感想です。

司会：どうもありがとうございました。予定時間も過ぎてしまったんですけれども、それでも聴けてよかったという気持ちです。まとめはしませんけれども本当にありがとうございました。第一部榎田先生へのインタビューを、というかインタビューになっておりませんでしたけれども、これで終わります。

## ■第二部 自分の関心テーマと『水曜読書会』取り扱い書籍との関連について

### ○司会挨拶

司会：引き続きまして、「自分の関心テーマと読書会で取り上げた本との関連について」一人5分発表質疑応答2分という形で進めてまいります。

今日は私が司会になりましたので新名さん、中恵さん、阿部さん、榎田先生、最後に橋本の順番で回していこうと思いますのでご協力よろしくお願ひします。それではさっそくですけれども新名さんからお願いします。まず資料の順番はよろしいでしょうか？

### ○現代社会を学んだ本たち—土井隆義『「個性」を煽られる子どもたち』と香山リカ『私の愛国心』

[当日資料は、資料2の一部として、61頁に掲載]

新名：まず取り上げたい本としましては、土井隆義の『「個性」を煽られる子どもたち—親密圏の変容を考える』と香山リカの『「私」の愛国心』です。なぜこの2つを取り上げたかといいますと、私の関心のあるテーマは教育や現代社会問題にあるからです。これらの本を読んで、また他のものを読んで強く感じるのは、自分では自分の意思によって社会の一員として生きているつもりなのですが、社会学を学んでいくうちに「そうではない」というような、いろんな事に無自覚な自分に気づかされるということです。社会問題などをもっと知りたいということで、この2冊は現代社会の問題を直接的に書いているように思ひ選びました。他にもこれまで取り扱ったものでは『不自由論』や『恋愛結婚はなにをもたらしたか—性道徳と優性思想の

百年』などは特に感じる本です。政府や国家の思惑というものを全然知らない中で自分たちは生きているんですが、それを気づかされない仕組みになっているというのをこの本を読んで気づくことができました。学んでいくうちに知っているか知らないかですごく大きな差があるということを感じて、社会学を学ぶということは本当に重要なことだと思い読書会に参加させていただいているといった感じです。香山リカの本では愛国心が起こるメカニズムや構造、時代によって人々がどのような性質になっているのかが分かりましたし、『「個性」を煽られる子どもたち』の方でも、個性というものはそれまで私にはプラスのイメージしかなかったのですが、もっと違う角度から見ると個性によって子どもたちが追い込まれているというような一面が分かったのが貴重だったと思います。多様な考えを知ることによっていろんな事を拒否せず受け入れることができたり、考える自分というものが作られ対応できたり、違う視点から考えることによって前進できるように思います。私は教員を目指しているのですが、今後も子どもと教育との関連からいろんな事を学ぶという意味で、読書会に参加し様々な本を読んで勉強していきたいと思っています。以上です。

司会：ありがとうございます。読書会に参加することで多様な視点を身につけることができたということで教育者をめざしている中で勉強になる参考になるということでした。質問をいただきながら進めていきたいと思いますがいかがでしょうか？同じ教育者として中恵さんいかがですか？

中恵：私の問題関心ともリンクするのもかもしれないんですけども、多様な考えということをおっしゃって下さったのですが、多様な考えというとそれぞれの個性がどのような感じで終わってしまうじゃないですか？普通感覚でいうと。でもそもそも個性ということ自体も煽られているというそういう多様性を謳歌する的な考え自身も、意識下において批判するという側面が社会学にはあると思うんですけども、そういうことなんじゃないかな。通り一遍の多様性を賛美じゃないみたいなの。

新名：取り上げたい本で、『「個性」を煽られる子どもたち』を挙げたんですけども、(レジメが下手ですみません)。読書会で多様な考えを知ることができて、そういうことが知識としてなかったら新しい考えというものなかなか受け入れがたいものだと思うんですね。私自身は受け入れ難くてですね、そういうものをいろいろ知っておくことによって、今後いろんな子どもがいると思うんですけど、そういう子どもたちに対応できるのではないかという意味で発言しました。それとは別に、社会学の観点から個性を論じているということについては、多様性ということが重要であるということがこの本からわかったんですけども、特にプラス面ではなくてマイナス面に関して書かれていた点が考えさせられました。今までの教育方針からみると以前は受験戦争で子どもが画一化されていたと思うんですけど、その後、個性

を大切にという流れに変わり、みんなが認められるようになって、私は個性に対しプラスのイメージを持っていました。しかし、逆にそういうことによってプレッシャーを受けるというような考えにまで筆者が述べているところは、私は単に個性にプラスイメージしかもっていなかったのが気づかされてよかったと思います。

中恵：私も今実際に塾で働いていて、塾という現場はある意味で競争社会を賛美ではないけれども推し進めるようなところでありながら、評価は学校でされるわけですから、塾は逆に評価ということをしてしない。その子が伸びていくことを重視するという、個性競争はせずにすんでいるというところがある。学校で起こる悩み事とか聴いていると、やはり友だち同士で差異化をするための競争みたいところで自分というのはどこにいるんだろうかみたいな話をきくものですから、新名さんのご意見というのはすごく分かるような気がしました。

司会：ありがとうございました。他の方もご質問があるかもしれませんが後で一括して受けたいと思います。それでは中恵さんお願いします。

#### ○中恵の問題関心と『水曜読書会』との接点

中恵：先ほど樫田先生に質問させていただいたときに、自分の問題関心を当てられたようなということをお話したのですけれども、ここに(レジュメを見ながら[資料2として、60頁に掲載])私の問題関心と書いていることは振り返ってみてこうだったということです。私は「切れた少年」ちょうど神戸の連続幼児殺傷事件が起こった次の年が修論を書くときで、切れた少年の分析をしたいと思ってメルッチの理論を使って分析をしようとしていました。今回の読書会の100回記念をふりかえってみるとメルッチを理解する原型になったものが、見田宗介の『現代社会の理論』だったり、佐藤俊樹の『ノイマンの夢・近代の欲望—情報化社会を解体する』でした。丁度修論で、メルッチでうーんと悩んでいたときに読んでいたので、振り返るとこれがすごく大きな影響、私のメルッチ理解につながってしまっているということを見つけてしまったんです。この中で見田宗介は個人の欲望を創出するものとしての社会という風に現代社会を理解していて、資本主義が持続していくために外部に対してビジョンを求めて進めなくなると、人間の欲望を創出していくということによって内部に深化していくということを言っています、そういう社会。また『ノイマンの夢・近代の欲望』では、粗雑なまとめで恥ずかしいですが、広い意味での情報社会論で、メタ自己、変わっていく変化していくこともすべて意識下にしていくような社会だということだったかと思います。切れた少年というのは、私は神戸の殺傷事件ではなく、結局、黒磯で起こった事件の方を分析して、修論につながっていったのですけど佐藤俊樹の影響をすごく受けて最後の結論というのは、教師を殺害するに至ったというところで彼は突発的にやったように見えて、実はその時点において

自分の未来、自分の過去を総決算するような、そういう決断が意識下にあったというようなことを考えていたというものです。その後私大学院を博士課程に進んで、自我論でやっていこうと思っていましたが、ちょっと病気になってしまいまして中断してしまったんですね。その時も本当に辛くて研究できないという時に、家族のもとに帰って、自活していたところから帰って行って、自分の未来設計も自分でたてられないという時に、生きているというより生かされている。これはなんとなくくさいのですが、生かされているという感謝の気持ちとかいうのではないんですね。生かされているという重み、生かされる自分という自己選択して生きているのではないというようになってしまっただけ。そうすると単純に自分を軸とした善悪で判断ができなくなる。自分が生かされている中で自分が生きていくということ他者というものをつねにふみ込んだ考えとか選択というのができてきて、そこには自分はこれがいいとか悪いとかこれが好きとか嫌いとかいうそういう決断ができなくなってしまうという経験をしました。その後私も復帰とか病気も治って塾の講師をしつつ勉強できるようになってきているのですけれども。その時に去年、『自由論』という本を私が発表したのですが、この中ではアーレントを引いていて複数の自己とか他者性というものを考えているということで、自分というものをその病気の体験から翻ってみて、自我論と結びつけていくと「受難による翻身」ということをテーマにやっていきたいと思うようになりました。例えばバーガーは翻身というのは社会をすみかえるような体験という風に言うんですけども、同時に彼は、私の最初の問題関心（修論）がそうだったのですが、社会自体が変化を強いているような社会だという、もともと変化していく、そういえばメルッチもそう言っています。ところでその中でより根底的に変化したと言わざるを得ないような現象があるのだろうか？他者との関係があるのだろうかということはずーっと考えていて、有るのか無いのか、有るのか無いのかってというようなことを今考えているような最中で、翻身ということをテーマにインタビューを行いたいということが今の私の願望です。同時にその翻身を成長という言葉と結びつけて理解しようという社会というのは何だろうか？というところで成長賛美ではなく翻身というキーワードで、人間が根底的に変化するというのはどういうことなのか、また同時に変化する可能性というものが人間にあるとしたら、社会はどのようにそれを抑圧したり支持したりあるいは基盤を提供したりしているのか、そういうことを、考えたいと思っています。

司会：ありがとうございます。時間も気にしながらで大変だったと思います。いくつか質問も受けながら進めるのがいいのかもしれませんが、2分ありますか。

樫田：質問ではなく感想です。今まで討論をたっぷりやってきたつもりなんですけど、1冊の本をたっぷりやるのとかこういう風に何冊もの本を同時に扱ってよい中で討論をす

るのとでは違うなあと思って聞きました。中恵さんの話は申し訳ないけれども今まで一番良く分かったというのが今日のご発表への感想で、そうかそういう関心だったのかと腑に落ちました。しかもわかりやすだけでなく、出てくる言葉が大変ヴィヴィッド、色合いが鮮やかで、黒磯の話が教師の殺害の時点でそれを自分の未来についての決断をしていたはずだと読むなんてお話はこの全体の中恵さんのご発表の文脈の中でとてもフィットしていますし、それと結びつけて最後のお話、「翻身」というものを「成長」と結びつけて理解しようとするような社会がある特別な社会であって、そうではないような社会を私はそうは言わないけど望むとか夢想するとか最後におっしゃった話はとてもよく分かって、なるほど読書会を100回まとめて振り返ることに意義があったなあと思いました。そういう風に自分も考えると100回やっていく中で自分にも変化がありました。昔は私も世間をなめてたわけですね。我々がうまれて小学校中学校と過ごす間には、いわゆるレールに乗る乗らない論争というのがあったじゃないですか。つまり、冒険家になって世界に旅立つのか、こんなところで普通にサラリーマンになって一生宮仕えでつまらない人生を送るのかっていうことが人生の選択で、でもどうせサラリーマン人生だろうと思っていた。そしたらバブルが崩壊して、一生宮仕えができたなら幸せで、世の中自分の10年後がどうなるかわからないっていう時代になってきているわけですが、そういうリアリティの変化を、私は徳島に来たときにはまだ、本当は実感していなかったわけですね。どうせこのままいくだろう。ここに65歳までいられて、私大の定年は70歳のところが多いですから、上手くすれば70歳まで現役でいられると思っていました。そしたら、現在では全国の私立大学の4割は定員割れという情勢です。気がついたら大学がなくなっていたということも起き始めています。そういうリアリティの変化の中で何を感じたかということ、結局、何をやっているのが幸せかということを考えなおさなくてはいけない、ということです。それで、ひとつメタな話なのですが、先ほど中恵さんがおっしゃった「翻身」を「成長」と結びつけて理解するような社会が一つの種類の社会にすぎないという感覚がありうるということが、僕自身にとっては「解放」なんだけれども、もう一つメタにそのようなことを広い意味で社会学しながらですね考えうるということ、それは自分が例えば食べていることや職業を続けることとは別の幸せなのかなあと思っております。私読書領域が狭いですがけれどもテキストにあります鷺田小彌太が、北海道に住んでいる彼が、そのようなことを言っておりまして、大学ポストにつけない方が一杯いらっしゃるわけですがけれどもポストにつけなくても勉強できるだけで幸せっていう感を私は日々強くしていると書いていて、鷺田小彌太の本のその部分を読んで共感したんですけれども、こういう知的なブレイクスルーする、ああそんな風にも考えることができるんだという瞬間があるという幸せに比べれば、職があるとかないとかいうことは小

さいことだな、でも職は維持したいなということが、中恵さんのお話を聞いてて思った話でした。近いような遠いような話ですみません。

司会：ありがとうございます。理解までできていないかもしれませんが、中恵さんのやりたいことと自分のやりたいことが似ているとか皆さんそれぞれに似ているのかなとか、ここは違うのかなとかあったかと思います。先生がまとめてくださったので阿部さんお願いします。

#### ○メイナード「医療現場の会話分析」はよい本か、悪い本か

阿部：それでは、お願いします。資料はございますか。[資料 2 の一部として、59 頁に掲載]

私が取り上げたのは、「医療現場の会話分析」という本です。この本は、悪いニュースをどう伝えるかという本です。メイナード著、樫田美雄、岡田光弘訳です。2004 年に勁草書房から出ています。『水曜読書会』でも、2004 年の 6 月と 7 月の 2 回取りあげられています。私が 4 章で、樫田先生が 1 章、6 章、エピローグです。その 2 回に分けて発表されています。私の問題関心からいいますと、1 つに「医療コミュニケーションの構造にせまる」ということ、2 つには「現象としての医療コミュニケーション」を知ること、それと 3 つに「医療、看護系の対人コミュニケーション実践における可能性及び手段としての医療コミュニケーション」について考えるということです。

前任校の国際医療福祉大学に、この「医療現場の会話分析」の解説ということで、2004 年と 2005 年の 2 回、樫田美雄先生が、講義に来てくださっております。そのときのレジюме [資料 3 として、63 頁に掲載] を使って発表したいと思えます。当日、「医療現場の会話分析」ということで、看護科 4 年生に対して、90 分の授業をしていただきました。3 年生の臨床実習を終えて、地域の実習に入ろうかという 4 年生の 4 月に講義していただいたのですが、そのとき、樫田先生がどのように講義して下さって、学生たちがどのような影響を受けたかということを中心に話していきたいと思えます。このレジюмеをごらんください。地域看護学を習っている学生ということで、樫田先生は、まず講義の導入で、「現代社会と看護師」という課題をあげられ、「自分たちがどういう社会を生活しているのか」ということ、「どういう社会背景があるのか」ということをまずお話しく下さいました。そういう順序で本題の「医療現場の会話分析」に入っていたので、学生たちは、いつの間にかだんだんと樫田先生の授業に引きこまれていきました。学生の興味関心に引きつけながらのご講義は迫力があり、学生がすごく集中して聞いていることが手に取るように分かりました。学生は、現在、看護を学んでいますし、まさに分業化社会、専門化社会、高度情報化社会で生活しているのですが、そういう状況は普段

は、学生自身の中では、ほとんど意識されてはおりません。榎田先生が、そこをわかりやすく講義して下さって、特にレジュメ 3 番の、生涯学習社会で、「専門職は、常に学び続けなければならない」ということを話された時に、学生たちは、はっとした顔つきになりました。それと、レジュメ 4 番の、「非専門家も、たくさんの情報を持っている中で、看護職としてそういう状況をふまえて、患者に接していかなければいけない」ということも話されました。レジュメ 5 番目には、「看護職は、患者支援の役割が与えられつつある」ということが書かれています。今日は、榎田先生の当日のご講義をなぞりながら、私の関心分野に引きつけて話していこうと思います。現代社会というのは、看護師に限らず、プロとしての職業には、すごく厳しい目が注がれている。それは、とりもなおさず、社会一般からの期待にもつながっている。そういう中で、「私たち専門職は如何に生きるべきか」を考えるきっかけになる話をしていただいたと理解しております。それと、次の「医療現場の会話分析」について、1 章、4 章、6 章、エピローグとこの本には、いろいろなトピックスがあるわけですが、1 章、4 章は、悪い知らせとか、良い知らせがどのように日常生活の中で「意味構成」されるものであるのかとか、ニュースの意味は、どういう文脈で変わるのかとか、エピローグには、臨床事例に対してのいろいろな方法というものが示されています。

まず、最初に、この『医療現場の会話分析』という本が、どういう本なのか少し、特徴を述べてみますと、この本の特徴は、理論と実践の 2 つの分野に分けられているので、すごくわかりやすいという点です。どこの章をみても、どこを切り取っても、そこだけみても、理解ができるという、医療コミュニケーションの初心者向けの本としてはすごく先取りしている本だと思いますし、良書と思います。「医療コミュニケーションの実践的教育の可能性を広げた貢献は大きい」と私は感じております。

次は、医療コミュニケーションに対する話題ですが、まず、今、医療の現場では、告知をすとか、しないとかということが問題になりやすいのですが、告知でもニュースでも、だれが、どういうふうに、そのニュースを伝えたかということは、非常に大事かと思えます。それと、4 章では、「ニュースの意味が、文脈で変わる」ということで、たとえば、「あかちゃんができたんです」というようなニュースがもたらされても、その人たちが、「あかちゃんができる」ということをどういうふうに、意味づけているか、すなわち、ニュースにどのような「位置価」を与えているかということによって、展開が全然違うということがあります。そのニュースを、喜びと捉える、か、そうでないように捉えるのか、ということが違ってきます。たとえば、妊娠のように、一般的には喜びごととされることであっても、婚姻関係の状態や有無によっては、「いいことだね」という意味だけではなく、いろいろな意

味づけに変わっていくということがあるのですね。そしてこのように当てはめられる文脈には、社会常識と場面の特徴が影響しています。やはり、社会常識とか、社会の変化をいつも、意識している必要があるということですね。

そして、学生の反応としては、榎田先生の講義の後に、目からうろここというか、今まで普通に友達と話をしている、そういうコミュニケーションっていう意識づけがなかったようなのですが、ある学生は、友達に、「追試の試験の結果を見てきてね」って言われて、見に行ったら、頼んだ友達が落ちていたので、それをどのように伝えるのか、少し悩んで、落ちていた友達に「〇〇ちゃん、よく頑張っていたね、でもちょっと、結果は悪かったんだよ」っていうふうに、ワンクッションをつけて話をしたっていうことを思い出しましたということでした。それで、自分も、榎田先生の講義で「医療コミュニケーション」を習う前にも、そういうふうなコミュニケーションを「自然にしていたのかな」という、振り返りをしていました。実習の現場で、医師が、患者になにかを伝えるという場面についても、「講義を受けた今ならわかる」という感想もありました。そして「3年生の臨床実習の前にこのような授業をしてほしかった」という言葉も聞かれたので、榎田先生の講義は、学生にとって、すごく有意義な講義であったと改めて実感できました。私は看護学と社会学を統合して、学生たちに、学んで欲しいということを、常々思っています。社会学と看護学のコラボレーションの重要性というか、社会学を共に学ぶことで、より看護学の水準があがるのではないかと思います。榎田先生のご講義と「医療現場の会話分析」という本によって、地域看護には、社会学の視点がとても必要だということを改めて感じております。学生たちにも、この本をきっかけとして、社会にどんどん目を向けて現代社会を生き抜いていってほしいと願っております。私自身もこの「医療現場の会話分析」という本の全てを、まだ完全に理解できてはおりません。これからも、この本から、どのような発見があるのか、わくわくドキドキしながら、続けて勉強をしていきたいと思っています。

橋本：引き続き、榎田先生。

榎田：コメントあるんですが、ぼくからでいいんですか。さっきと似たようなコメントなんですが、阿部さんが最後に挙げた例っていうのは、私の中で、非常に、そのう、記憶が鮮明に残っている例です。2004年ですね、当時貰っていた科研費〔文科省科研費基盤（B）『医学教育のエスノメソドロジー』のこと〕の夏合宿の時に、阿部さんが挙げてくれた例なんです。友達の追試の結果を見に行った女の子が、その友達は試験には落ちていたわけですけども、落ちているにもかかわらずですね、「〇〇ちゃんが、頑張っていたの知っている」って最初に言ってから、「でも落ちてたよ」という形で言ったということ、阿部さんが褒めていらっしゃるということについて、申し訳ないけれども、徳島大学医学部青藍会館の小会議室に集まって



いたほとんどのメンバーがうまく理解できずにいました。阿部さんが褒める意図がわからないということです。そうやって、事態が一時紛糾した大変印象深い事例で、あそこで起きていたことは、何だったのだろうか、そのあと、3年間考えていたわけですが、それが、今の解説でやっとわかりました。メイナード先生が言う、パースペクティブ・ディスプレイ・シーケンス（PDS）、事前に今後、自分が話すことを、予告するような物言いとして、「〇〇ちゃんが、よく頑張っていたことを知っている」って言っていたのだったというのが、阿部さんの今日の解説で、やっと腑に落ちました。それで、あー、そうだったのかと。まあ、それが、今話を聞いた直後の感想なんですけれども。

阿部さんが、冒頭で、メイナード先生の本を褒めるにあたって、理論編と実践編が分かれていて役に立つって言ってくれた部分があったと思うのですが、そのことが、本当にこの本のよい点なのかっていうことが、議論に、なるだろう。今の私たちと阿部さんとの、事例理解の食い違いが、そういう議論に我々を導いていくのではないかと、とも思いました。私は何を言っているのでしょうか。つまり、阿部さんにとっては、その学生をしたことが、理論の実践だったわけです。自分が、追試の合否を見て、落ちていることを伝えるにあたって、「落ちてる」とすぐに言うのではなく、クッションとしてつまり、パースペクティブ・ディスプレイ・シーケンスとして、「〇〇ちゃん、頑張ったの知ってる」って前もって言うことが、効果がある。予告効果があると阿部さんは、阿部さんの学生の経験を解釈して言うのですけれども、やっぱりですね、そのように説明を聞いても、私どもとしてはですね、啞然とするわけです。というのは、そこで、そのパースペクティブ・ディスプレイ・シーケンスをしているメンバーは、同じ学生です。そして、すぐに、想像できるように、その子は、受かっているわけなんですよ。自分が受かっている、もうひとりが、落ちているときに、丁寧に、そのことを、予告して言うということは、僕たちのような、競争の中で心を疲弊させられている、まずしい心性の人間にとっては、耐え難いことであるわけです。競争仲間から、「〇〇ちゃん、気を落とさないでね、あんたが頑張っていたのを知ってる」って言われるってことは、「こいつ殴ってやろうか」、ってというような話ですよ。ぼくらの感覚では。つまり、阿部さんのように、心やさしくって、この世の中には、競争仲間なんてものが、表向きはあるけど、実はいなくって、実際にいるのは、共に学ぶ仲間なんだっていう感覚があるなら違うんでしょうけれども、仲間感覚が中心的な人間関係だっていう方ならば、我々のように、感じないのでしょう。けれども、中恵さんや私のように、競争社会の中で揉まれて、世間のたいていの人間は、敵だと思っている人間にとってはですね、やっぱりそういう感覚は耐え難くって、そういうセンスの違いが、やっぱりあるのだと思います。そのような違いが、あるのだとするのならば、じつは、

実践と理論に分かれているこの本を、単に学ぶことは、実践と理論を別々に理解しようとするのは、今みたようなセンスの食い違いのもとでは、予期通りの成果をもたらさない、たとえば、世渡り訓練にならない、コミュニケーションの洗練にならないってことなのだろうと思いました。つまり、学習の成果がそのようなパースペクティブ・ディスプレイ・シークエンスでは、我々は耐え難い、本当に耐え難い、阿部さん、それは、少なくとも、僕らにとっては、そのようなコミュニケーションスタイルが、耐え難いということは、理解して頂きたいことです。そんな半端なことをいうやつはですねえ、殴られてしまいますよ。言いかけた瞬間に。

ここで言おうと思って準備してきたんですけども、藤山寛美の娘、今、NHKの『いもたこなんきん』に出ている女優、なんて言う名前でしたっけ。

阿部：直美です。

樫田：そう、藤山直美が主演している映画で、『顔』[2000年、日本、監督は阪本順治、松竹] っていう映画があります。これに似たような事例が出てくるんです。『顔』に出てくる藤山直美は、引きこもりで、家の2階で、ミシンを踏んでいる。ミシンで繕いものをしているだけの暮らしで、クリーニング屋経営のおかあちゃんが、死んでしまったときに、妹から、なじられるんです。なじられるんだけど、普通になじられるだけじゃないわけですね、どうなじられるかっていうと、おかあちゃんが死んだあと、昔の写真を見て、おかあちゃんを偲んで泣いていたら、うしろから、妹が出てきてですね、「同情するわ」って妹に言われるわけですよ、で、「同情するわ」のあと、たぶん、「女になったら」とかって言われて、まあ、性的なその、意味合いを出して、姉が妹に侮辱されるんだけど、大きく言って、それが理由で、藤山直美は、その妹を殺すわけです。そのあとは、藤山直美があちこち逃げていくというロードムービーが、この『顔』っていう映画のメインストーリーなんですけれども、ことほどさように、つまり、「同情するわ」と言われたら、人は人を殺すわけです。許しがたいわけです。同情されるということが。だから、コミュニケーションというものが、予告したらいいとか、同情したらいいとかですねえ、そういうものじゃないってことを、『顔』っていう映画が、間接的に表しているとするのならば、阿部さんが挙げた今回の事例もですねえ、それに基づいた解釈ができると思うんです。つまりは、とても大きな、理解の断裂とか、世界観の断絶があるときには、メイナードの理論編で褒めているような、相手を思いやってですね、パースペクティブ・ディスプレイ・シークエンスをやって、前置きして、予告させるなんていうことも、まったく役にたたないだろう、逆に、相手の憤激を誘う議論になるリスクがある。ここから翻って、それが、僕たちが読書会っていうものをしている意味を再考すべきだ、という話にもつながると思うんですよ。つまり、やっぱり、読書会って恐ろしいもので、私にとっては、この本のこの作り方が、本当

にフィットしてよくわかって役に立つと思えても、他の人にとっては、ひどい本だとなる。今の阿部さんの事例を聞く限り、メイナードのこの本はひどい本ですよ。殺されてしまうわけです、そうやって。同情するなんてことを言えば。ということがわかって、2004年の夏休みからの謎もやっと解けて、驚きでしたというのが感想です。

阿部：3年越しの。

樫田：3年越しの。何を言ってるんだろう、何を言いたいんだろう。阿部さんは!?, っていうのが、3年前の夏からの悩みだったんで。そういうことだったのかあ、と。

橋本：なんか、だんだん、座談会らしくなってきたなっていう。

阿部：なんて、いい人なんだろうって思っていたんです。

樫田：阿部さんと合うんですよ、その子は。きっと。でも、友達からは、絶対に、申し訳ないけれども、その言われた子はね、他の子に、「あいつ、とんでもないやつだ」と言ってまわってると思いますよ。「ふざけたやつだぜ」とか「仲間はずれにしてやろうぜ」とか。そうでなきゃあ、その二人が、その、外側の子から言われてますよ。同じように。そんな同情が成り立つはずがないじゃないですか。片方が受かって、片方が落ちていて、通った子が落ちた子に「あなたが、頑張ってたの知ってる」ってさあ、じゃあ、がんばって落ちたらばかじゃん。

阿部：直接に「落ちてたよって」、話すほうがいいのでしょうか。

樫田：言わないんです。そんなことは。「自分で見に行ったら」っとかさあ。そんなことを、相手を傷つけずに伝える術を僕たちは持ってないんだから。だから医者は、殴られたり、けられたり、刺されたりするわけですよ。

バッド・ニュース・テリングは、難しいわけです。パースペクティブ・ディスプレイ・シークエンスしたからって、成功したりするような甘い話じゃなくって、しかも、医者の場合には、まだ許されているわけです。そういうことを専門的にする職業だっていうことで、別世界の人で、許されてる面もあるけれども、同じ学生でね、片方は、落ちるか通るかの時にたまたま通って、片方は落ちるか通るかの時にたまたま、落ちてたら、それをその、なぐさめながら使える手段なんかないですよ、と僕なんか思いますけどね。あります? そんなことはできないでしょう。友達に、見に行ってもらってさあ、「頑張ってたの知ってる」とかと言われたら、やっぱり、耐え難いと思いませんか?なんか、こだわりすぎかもしれませんけど。

中恵：あははは、わかります。あはは。

新名：でも、こういうことはよくあると。

樫田：ある?

新名：そう感じたんですけど。

樫田：ふんふん。

新名：今の前提としては、「聞いてきて」って言われているんですよね。

樫田：そうなんだよね、だから、うん。

新名：それを果たさなければいけないということを感じていて、でもなるべく傷つけないっていうのを表現する処置としては、その方法〔阿部さんの学生の方法〕はベストだったと思うんですけど。だから、報告される側が「聞いてきて」「見てきて」って言うていない時に、「よく頑張ったの知ってるけど落ちてたよ」って言われたら腹が立つと思うんですけど、「聞いてきて」「見てきて」って、その子は頼んだわけですよね。その前提がある限り、その役割を果たさなければいけないっていうのと言わなければならないということがあって、そこで一つ、慰めのクッションを置いておくということは、相手に伝わるわけですよね。「行ってきて」って言ったから行ってくれているし、プラス傷つけないようにという配慮がされていた。言われる側がそう捉える事によって、必ずしも今のは悪い例ではない、人間関係を良くしようとお互いがしている。お互いとか言う側がしようとしているっていう面もあるのではと思ったので、阿部さんが褒められる例として挙げたというのは、私はわからなくはないんです。

樫田：なるほどね。相手に合わせて、コミュニケーションするというのが、コミュニケーションの基本だとするならば、「聞いてきて」という時点で、その、合格した相手であっても、その子から言われて、別に、その、憤激しないような、あのう、その子が落ちた子として「聞いてきて」って言ったんだと判断すれば、阿部さんが紹介したようなコミュニケーションスタイルもありうるっていうお話ですよね。

新名：前提があるから、第三者から見ても言う側が配慮しているというのはわかるし、悪いことを伝えるのを「よく頑張ったね」という風にいうのは、褒められるべきだと思います。

阿部：新名さん、「見てきてね」って言う時点で、「自分で見てきたら」っていうような選択肢はあるんでしょうか？

新名：あっ、そうですね。それに気づけたらもっといいんですけど。

阿部：でも、それで、また、仲間が決裂するっていうことはないのですか？

新名：このテーマでもあると思うんですけど、言い方というか、樫田先生がおっしゃっていたように、「自分で見てきたら」というようないろんな手段があると思うんですけど。そのひとつとして、そういうのを思いついたら、また話は別ですけどという感じですか。見方についてはいろいろあると思います。

阿部：現代の若者文化ということで、興味深いですねえ。

新名：そうですねえ。コミュニケーションについては、私も大学の授業でコミュニケーション論というのを取ったりはしたんですけど。

坂田先生の授業ですけど、そういうのを受けたときにすごく衝撃的で。非常に気

づきが多くて、自分がいかに自分のコミュニケーションというものの重要性をわかっていなかったかっていうのが、授業で学んでいくうちにいっぱいあって。社会学で学んでいくにはそういうことやいろんなことを取りあげてやっていかないと、今みたいに社会の中でそれらが絡み合っていて起こっている問題は分からないんじゃないかなと思います。

阿部：先に新名さんが、社会学を学ぶ前には、無自覚な自分だったっておっしゃいました。医療コミュニケーションでも新名さんが習っているコミュニケーションでもいいんですけども、それを実践するという事は、絶えず神経を研ぎ澄ましていなければならない。私は疲れないのだろうかと思うんですけど。今まで、無防備で、普通に自然に話をしていたのに、コミュニケーションはこうなんだ、ああなんだ、こうしなければいけないという前提を教えられたとしたら、たえず私は、こうしなければいけないという抑制感とか切迫感にさいなまれてくるのではないだろうかと思うんです。もうひとつは、樫田先生がおっしゃったように、うまく人生を切り抜けていく手段として、「自分で見てきなさい」というのも、選択肢の一つとしてあるのかと今は思っています。

新名：コミュニケーションを知ることが、プラスになるかマイナスになるかっていうことですかね。私自身の話にも出てきたんですが、勉強をして物事を知ったときに、私は何かを知ってしまって悩むということよりも、知らないで何か間違いを犯したりしてしまう方が耐えられなかったので、機会を設けて自分でいろいろ知識を吸収していこうと思ったんです。なのでそこには迷いはないんですけど、悩んでしまう子は、何も知らないほうが幸せだったのかなあとは思いますが、でも、自分については、いろいろ知識がないことのほうが問題だと思ってたので、現在はいろいろ勉強していこうと思っています。

阿部：若者の心理ということで考えてもいいでしょうか。

新名：若者の考えかどうかわからないですけど。

橋本：だんだん議論が白熱してきて。でも、時間の関係もあって、次、樫田先生の発表になるので、少し、かぶせていただいてもいいし、先生の自由に発表してください。

### ○知的世界の見取り図を知るために役に立った本たち

樫田：はい。かぶせてという話なんで。で、僕ですね。すみません。阿部さんに、前もって資料を送っておりませんでしたので、いまお配りいただいている資料を見て下さい。100回の内ですね、取り扱うテキストとしては、3回目の見田宗介、これは、中恵さんと同じですが『現代社会の理論』、それから、1回目の『ロストハウス』。これらを中心に、2つのテーマで、すなわち、知的世界の見取り図を知るために役に立った本たちと、自分を知るために役に立った本たちということで、感想を述べ

ように思っております。それと、実は、今の阿部—樫田論争がたぶん、関係していて、そして、新名さんのお話も関係しているのですけれども、自分が一人で考えるときに行き着ける範囲を超えて、他人が発表しているときに同時に考えていると行き着けるところがあるというふうに思っております、それが、「読書会の価値」だと思うわけです。今ほども、議論していて、やはり思うのは、社会学で論じていることは、ここで、今、論じている具体的な問題と関わっているんだなということです。阿部さんの学生さんが、やったようなことは、メイナード自身がまず述べております。悪いニュースを伝えてきた、古代の伝達士は、お前が伝えてきたのは悪いニュースだって殺されたとメイナードは書いていて、それから、告知の時にも同じようなことが起きるわけですね、自分が一人で聞きに行くのに耐えられないニュースは、家族に聞きに行かせて、それで、ガンがなかったなら、まあ、いいけれども、あつたら、「このやろう、お前は、生き残るのに俺は死んじゃう」っていう話にもなるわけで、頼まれたから、まあいいってわけじゃない。自分にとって、無理なことを他人に頼んだからといって、諦めがつくほど、人間、自分の命について、あきらめることができるわけじゃないので、コミュニケーションってそういうときに、負荷リスクを他人にこう譲り渡すというか、預けるというか、押し付けるというかですね、そういう面があつて、頼まれたから引き受けりゃいいというものじゃないだろうって思うんです。しかし、まあ、頼まれたら引き受けるという阿部さんのような、観音さまのようなですね、人もまあいるから世の中、広いつてことなんだなあと思つて聞いておりました。

それで、こういう前振りで結局何を言おうとしているかということ、ほんの一步先の議論に、でも、一人では、たぶんたどり着かない水準の議論に、こういう議論の中でたどり着くことができるのではないか、たとえばメイナードさんの本を読む中で、素材を得て、あつ、あそこにも似たような事例があつた、と現実の事例の新解釈にたどり着くというようなことが、もし読書会でできるならば、それは、社会を知るということにかなり役立つだろうと思います。それで、残念ながら、私の、読んで最もそういうふうに社会を知るのに役に立つのは、社会学の本なんです。社会学以外の本も扱つてきた、というふうに、冒頭、あのう豪語いたしましたけれども、一番頭に残つていて、繰り返し頭の中で思い浮かべて、社会を理解しなおすすめ対称軸に使っているのが、今、挙げました、3番目の回のテキストだった見田宗介さんの『現代社会の理論』あるいは、見田さんが、その他で書いていらっしゃるご著書です。それで、先ほど、新名さんは、いろいろな考え方を本を読んで身につけると、それが素材になつて、いろいろ、多様な考え方ができるといったけれども、そういう大事なことを、教師が学生さんに伝え損なつていることがあると思います。ただし、やっぱり、良質の議論を読まなければいけない。同じようなことをいろんな人

が言っていますが、半端な思考で似たようなことを言っているものを読んでも、だめなんだと思うんです。半端な思考では、自分が、そこに、身体を寄せて、ともに、そうだ、そうだ、世の中、こういうものなんだ、と思うわけにいかないわけですよ、なんかいんちきっぽいわって思えちゃうわけです。その点、見田宗介は、しっかりしていてよいと思います。でも、不満もあります。見田さんが、最終的に、これが幸せだと出してくるものが、どうも、やっぱり、個人主義的に見える、私の幸せっていう感じになっていて、20世紀的、近代的である。中恵さんが言うように、もはや「私が私であるということも、流動化しかねない」現代においては、ちょっと古い感性だろうとは、思います。しかし、そのことを別にすれば、やっぱり、見田さんは考え抜いている。見田さんが、事例に挙げ、中恵さんがさつきとりあげた幸せの形、すなわち、何か人のものを奪うのではなくって、太陽に、日向ぼっこしてあたって、あったかいわって思うと幸せ。これは、別に他の人の幸せを奪っているわけじゃないという、そういう、リアリティというのは、やっぱり、社会の今後を考えると、決定的に重要なリアリティで、私にとっては、社会学のものをみなさんと一緒に読むことで、自分の社会に対する位置取りとか、見取り図が得られるというのが、この読書会の大きな価値でした。

それで、この主張のバリエーションとして、他の論者の位置が見えてくるということがあります。ちょっと悪口になってしまうのですが、見田宗介のその徹底さに比べれば、同じように、環境保護を訴えたり、定常化社会を訴えたりする広井良典は、思考の質がひとつ低くて、寄り添う気にならない、あっ、同じようなことを言っている、こんなに違うんだっていう形で、たとえば、見田宗介と広井良典が区別できる。それから、見田宗介と仲正さんが、これは新名さんが例に挙げていましたけど、『「不自由」論』に関してですね、区別できる。そういうようなことで、世の中に、有名な人はいっぱいいますけれども、有名な人同士を線で結びつけて、自分にとって、誰が重要で誰が重要でないという軸の中に配置できるっていう意味で、『水曜読書会』が役にたっていると思います。それで、もう一方の方はですね、冒頭に挙げた大島弓子『ロストハウス』で、これを橋本さんは、冒頭の紹介の中で、「なかなか刺激的だった」って上手におっしゃいましたけれども、これは失敗した読書会だったわけですね。すべっている読書会ですね。当時のレジュメを持ってくれば明らかのように、私は興奮してしゃべっているけれども、それは、明らかに私が、大島弓子フリークというか、のめり込みというかですね、そういう乗りで、大島弓子的なことを、「少女が世界を変えるんだ」とか、そういう決まり文句と一緒に喋ってしまった訳です。この時は、学部生の方も10人くらいは集まって、部屋がいっぱいになりました。12人しか座れない部屋が、全部で14人くらいで埋まっていっぱいになったという、そういう大盛況だったんです。しかし、読書会として

はずべてしまって、あまり、共感を呼ばないということがありました。それであとで、レジュメを見直してみると、やはり、思い込みが強い。だって、少女っていうキーワードは、それ自身は、中身を持たない、空無なものです。もちろん、状況劇場の唐十郎さんなんか、「少女」といえば、時代状況の中ではそれなりの雰囲気もあったのでしょけれど、この1997年4月に、「少女が世界を変えるんだ」とか、「核戦争があっても、そのあとの世界をこう、想像するのに、少女が役に立つんだ」とか、いってもそういうだけでは思い込みです。たしかにそういえそうな作品は、『ロストハウス』中にあります。それから、若年性アルツハイマー、今だと、「私の頭の中の消しゴム」であつかわれているような事例も使われていて、まあ、アルツハイマーじゃなくて、若年老化症があつかわれていた訳です。そういう社会的テーマを考えると、少女の視点はたしかに有効です。つまり、20世紀の、性別役割分業の、男性中心主義社会の中で、中心に置かれていない、少女というのは、つまりは、はずれもの、マージナルマンですから、マージナルマン的視点が役に立つというストーリーは成り立つのでしょけれど、それが、マージナルマンの話ならわかってももらえるかも知れませんが、それが、少女という仮象、抽象的な形を、になっているということに伴う色合いというものを、僕は、1970年代、80年代の人間として、そう言う色合いの感覚を持っているのですが、それは、通じないわけです。しかし翻って、このすべったことによって、初回に大島弓子『ロストハウス』を発表して、自分がその、これが決め文句だーと思っていたものが、1997年に19歳の子やはたちの子に通用しないということが、理解できた。自分がいかに、1970年代や80年代的なセンスに頼って、人に語り、そして生きているのかということが理解できた。読書会は一方では、社会を知るために役に立つと同時に、もう一方では、このように、それが、受けたりすべったりすることによって、自分を知る機会にもなる。そういうことを知ることができたという点で、初回の読書会は大変、画期的だったし、そういうことは、そのあともやっぱり、あるわけですよ。こういう集団の中で語る中で、自分が熱意を持って語る事が通じる、通じない、ということがある。世代が違うと違ったふうに受け取られるということがある。それで、それは、社会を知ると同時に自分を知るきっかけにもなるということです。つまり、そういうふうに読書会が2系列の、役立ち方をしているというのが、自分の感想であります。

#### ○土屋葉『障害者家族を生きる』—あるいは、質的研究の意義

橋本：ありがとうございました。あの、本当でしたら、ここで、また、質問もしたらいいと思うんですけど。時間の関係で、次、私にいかせていただきます〔発表資料は資料2の一部として、62頁に掲載〕。私の話をする前に、樫田先生のお話を聞いて、



『ロストハウス』を聞いたひとりとして、先生のお話を聞いていて、(樫田先生と) 同じ世代だったんだなと思いました。それで、私は、先生がすべったっていうことなんかは、今、はじめて、そういうふうに意識されていたのだなと気がついたんですけれども。むしろ、私は副田先生という方を知りませんが、先生の研究者としての過程をつくった筑波の中の生活の中で、読書会の前史をお話いただきました。その中で、やはり、漫画とか、大衆文化というものを社会学的に見ることができるのだ、というそういう発想が、すごく新鮮であったことと、この文字ばかりの本でなくて、ああいう本から、文化から見られる社会っていうものがあるんだ、という意味からも画期的であったように未だに思っています。

私もレジメだけは、長くて4枚もありますが、全部は言えないし、みなさんの話を聞いていて、やっぱり、取り上げる本は、自分の関心領域と共通していると改めて感じました。私が読書会でとりあげた本は、この『障害者家族を生きる』と仲正昌樹の『「不自由」論』です。この2冊ををとりあげました。他にもいっぱい、取り上げたい本があったのですが。最近で、印象に残っていたものになってしまったのですが、時間的な関係で、この土屋葉の『障害者家族を生きる』についてしか言えないと思います。私は、私自身の個人的、職業的体験ということで、前から、セルフヘルプグループに関心を持ってきているというのは、ここのみなさんをご存知かと思います。セルフヘルプグループは、共通の問題とか課題を持っている人たちが、主体的に、継続的に自分たちの問題を解決するために取り組むということで、具体的なイメージとして患者会とか家族会とかそういうものが、浮かぶわけなんです。そこで、自分の個人的な体験からいうと、そこ(セルフヘルプグループ)に身をおく心地よさとか、悩んでいるのは、自分だけじゃないとか、そこで、何をいっても許されるじゃないですけど、否定されずに聞いてもらえることを通して、なにか、自分の生き方を再確認するとか、そういうことが、すごく気持ちがいい。これはいったい何だろうかと(考えていた)。ずっと、修士論文を通して、自分の関心テーマだったと思います。そういう意味で、繰り返しになりますが、常に樫田先生には、そういうことを理解していただいて、いろいろな本を紹介していただいたなあと今更ながら思います。この土屋葉という人のこの『障害者家族』を読んだときに、私は、ちょっと、嫉妬心じゃないんですけども、こんな30歳ちょっとの人がですねえ、この人、まだ、若い人と思うんですけど、障害者の家族の親でもなければ、身内にいるかどうか知りませんが、こんな若い人が、障害者家族をリアリティを持って書けるっていうことが、まず、すごいと思いました。なにか、体験したものにはしか分からないとか、よく言ったりしますが、体験する、しないじゃない、やっぱり、本物がわかる人はすごいなあっていうのがあったので、すごく面白かった本です。レジメも全部、読む時間もないんですけども、土屋さんは、

「障害者家族」を行為者の視点から「障害者家族」を描き出すっていうことに徹していて、それが、すごく成功しているなと思います。レジュメナンバー1の下から、3、4、5、6行目ですかね。個人にまつわる規範と個人の構成する家族のリアリティということで、「シュツ」は、リアリティを構成するのは、われわれの経験の持つ意味であるっていうふうに言っていて、自分たちがそれをどういうふうに語るかとか、意味の解釈とか、それを、まあ主観で言うのでしょうか？そういうものから、出発しているのですけども、(土屋さんは「障害者家族」のリアリティを)本当にうまく書いているなと思いました。(レジュメ)2枚目にいきますが、リアリティというのはなにかということで、ブルーマーのシンボリック相互作用論とか、ちゃんと勉強しているわけじゃないんですけども、社会の秩序について新しい見方を生み出したとか、レジュメ2枚目の6行目のところに、この本の中の一部ですが、「社会の秩序とは、解釈の装置を生み出すところのものであり、社会の客観性とは、こうした成因に分け持たれた解釈装置によって保障されている」とあります。土屋さんも引用したかどうかはわからないのですが、これは、「もっとも主観的と考えられてきたものこそ、最も客観的なものとして、把握されなす」という転換があるということで、これは、非常に魅力的なフレーズでした。阿部さんもよくわかるかなと思います。どうしても看護とか、医療の世界とか、教育の現場にいと、なんか、看護の研究で客観性が乏しいであるとか、どうも、質的研究対量的研究じゃないですけども、なんか、こう、事例を丁寧に掘り下げても、それが、妥当なものかとか、普遍性があるのかと、突っ込まれるんですけども、この文章に出会ったことによって、主観と客観が対立するものではなくて、両方を全体的に捉え説明ができないものかなあっているように、常々思っています。あとは、この土屋さんの本だけじゃなくて、自分がずっと、関心があったなと思う本っていうのは、主体性とか、自己決定とか、主観、客観とか、そういうことだろうか。いつも、頭の中にあっただように思います。もう一回、この2冊の本を読み直すことで、ああ、よかったなあと考えたことを抜き書きしているだけのもの、4枚もあるんですけど、実際全部は語れないなと思いました。

この、『「不自由」論』の方の本は、これで、私の知識がないことが実感できた。主体性とか、自己決定とか知識について、すごく丁寧に書かれていて、大風呂敷を広げるといふのじゃなくて、あんまり、無理のない最後、結末になっていますけれど。いろんところで、配慮している、書き方しているなあと考えたのと、主体っていうものが、実は、従属することとの関係で、説明があったりして、これは、上野先生の『児童虐待の構築』にも出てきた話ですが、すごく印象に残っています。たぶん、時間が過ぎているなと思いますけども。あの、以上で。

樫田：まだ途中では？

橋本：中断ですけど、たぶん、全部言えなくて。これは、今日、すみません。レジュメになっていないものを提出していますけども。

阿部：これだけは、言っておきたいということがあれば。

橋本：うふふ。いやあ。

阿部：ないですか？これを言わなきゃ、帰れないって言うことはないですか。

橋本：いえいえ。それは、なんか、自分の言葉になりきってないので。たぶん、1分でもうまく言えないと思いますので。まあ、以上ですっていうか、ちょっと、中途半端なんですけど、終わらせていただきたいと思います。で、あのう、まあ、一応、ひととおりは、みんな、発言したんですが、十分、質疑応答ができなかった部分もあるし。

樫田：最後の橋本さんの質疑応答をしてよろしいでしょうか。

橋本：はい。

樫田：いや、橋本さんの話はですね、2つが、つながっているように聞こえましたというのが、感想です。つまり、われわれの業界的な裏話風にいえば。私も、橋本さんもある困難に立ち向かっているわけです。二人は、私は社会学の質的調査者として、橋本さんは、医者と同じ学部にいる看護学研究者として、「お前のやっていることは、あやふやで、個性がなくて、いんちきかもしれなくて、一生懸命やっているのかもしれないけど、あまり、役に立たないかもしれない」とかいわれている中で、それは、そう、そうかもしれないと思いつつ、でも、自分は大事なことをやっているかもしれないという自負があるわけです。それでそれには、なにか、支えるものが、その、直接支えてくれるものでなくても、間接的な支えであっても必要なのですが、そういうものが本の中に、あればいいなあと、思って読んでいたらあっ、あったという話だったのではないのでしょうか。このことは、土屋さんの話で橋本さんがキーワード風にとりあげていらっしゃる部分が、まさしくそこに対応していると思います。つまり、人間の、見たり聞いたり感じたりしている実感というものが、それ自身で、この世の中を成り立たせているとするのならば、それを捉える捉え方が、十分開発されていなくて、医者が信じるような水準のものに、医者から見なくなってしまったとしても、その大事さに鑑みて、私たちはそれをあつかっていかなければならない。そもそも、社会秩序が、人が、感じるということによって、成り立つものならば、人というものの感じ方を經由して、それを捉えるしかないのだから、ないものねだりをする人が、人というものを經由しないで、捉えるような方法からみて、粗雑とか、あいまいだとかいっても、相手にする必要はない。それは、土屋葉さんも、橋本さんがご批評されていた部分で、言っていたように思います。でも、さらに、そこからですね、議論を発展させていくこともできるように思います。そのような立場をとったときに、私が、実感として大事だと思ったものが、私にとって、ただ、単に大事だと感じられたというのではなくて、社会的に、それを

大事だと考えろというような、圧力の下で、私が、感じさせられたり、考えさせられたりしている可能性があるという話しに展開していてもよいのではないでしょうか。セルフヘルプグループについていうと、橋本さんが修論でそれを書いたときには、それは、まず「私」の実感の中で大事なものであって、ついで、社会的にも研究すべきものであると展開する文脈で取り扱われえたのに対し、仲正さんのテキストを使うと、セルフヘルプグループが大事だという文脈の方が、先にある、それに、乗っかって、橋本さんが考えただけかもしれない、というふうに、思えるようになったという話を書いてあって、そこから、あとは、実は、中恵さんが冒頭から、書いていらっしゃる話につながっていくんだらうっていうのが私の感想です。つまり、そのように、感じるあなたのありようも、そのように感じないあなたのありようも、そのように感じることを以前とは、違ったように解釈しようとするあなたのありようも、すべて含めて、「翻身」というテーマや、社会の中でのアイデンティティというテーマで、我々は取り扱おうとしているのです。我々が、困難に行きあたって、戸惑い、迷い、ふらついているからといって、我々が、大事な問題があつかつていないことにはならない。我々が、大事な問題を扱っているがゆえに、ふらつき、迷い、ごろごろしているのなら、私のことを、もっと、尊敬しなさいって、これを中恵さんが言って、中恵さんから始まった話と、橋本さんで終わった話がぐるっと一巡しているなあ、とそういうふうに思いました。

橋本：もう、本当にまとめていただいて、ありがとうございました。はい。

樫田：と、中恵さんなら、言うだろうと。

中恵：あはは。

橋本：はい。いつも、思うことなんですけど。先生に言われることによって、あー、なんでそういうふうに、なんで言えないんだらうかって、いつも、思うんですけども。

樫田：横取りですみません。

橋本：そういう言葉が浮かんでこないことが、なさけないものがあります。だんだんと、もっと、こう、かみしめる時間があればいいのになあと思うんですけども。もう、本当に5時になって、しまいました。テープは止まっていないので、まだ時間はありますけども。

### ○本の質を見分ける

阿部：樫田先生への質問、いいでしょうか？

橋本：はい。はい。どうぞ。

阿部：先ほど、樫田先生がおっしゃっておられた、見田宗介、広井良典の名前が出たときに、同じことを言っているのに、その質が違うということ、その質の良さを見分けるっていうのは、どんな勉強をして、磨かれるのでしょうか。先生の基準というも

のについて、教えていただけるとありがたいと思います。

樫田：こういうめったにない機会だからですね、誠心誠意、正直に話します。人並みの知識、知能を自分は持っていると思うんですけども、その中でこぼこがあって、どうもそのある種の論理的思考、つじつまが合っているかどうかをチェックする能力については自分は、少し高くて、その分、そこに引っかかって、大局を見失うという難点がある。自分のそういう、チェック能力、論理的なつじつまがっていないかについてのチェック能力を、ガイドバーにしながら、本を読んだり、人の意見をきいたりしているのだろうというのが、今の阿部さんの質問への答えです。さっき、新名さんにも、それに、付随するようなコメントを言ったんですけども、多様な考えが、そこそこ、くわしく書いてある本なんて、山ほどある。でも、たいていの考え方は、自己矛盾を抱えているわけです。気が利いた流行の言い方も知れないけれども、そのように言ったら、別のところで、こう言っていることと矛盾するんじゃないかみたいな問題を抱えています。それで、そういう問題の存在を自覚して先取りすると、ものを書くときの、ある書き方の型というか、質というかですね、そういうものがでてくるわけです。見田さんの場合には、やはり、明らかに、根底から考えるという本の書き方になっています。社会のことを考えるのに、ゾウリムシの話から始まったりするわけですよね、見田さんのものを読んでいると。それは、やはり、そこから、考えるしかないという覚悟を持って、社会学なのに、なんで、そんなゾウリムシの進化からはじめるんだって、非難されるかもしれないけど、そこから、はじめよりしかないと思うから、そこからはじめているわけで、そのようなことを、その、見田さんの論理を追体験するだけではなくって、「あっ、ここには、覚悟がある」というふうに感じるところから、見田さんを信用しているっていう面があるかと思います。もちろん、その分、はずしている可能性もあって、『ロストハウス』に関して、これを「少女論」としてですね、「少女」のイメージで読んですべったのと同様なミスを私どもが、見田宗介に対してしていたり、内田隆三に対してしていたり、そういう、失敗をしている可能性がありますので、100%信用しているわけじゃないんですが、今、言ったような観点で、阿部さんがというようなチェックを働かせているような気がしております。

阿部：樫田先生、大変わかりやすく説明していただきありがとうございました。橋本先生、お時間をたくさんいただいてしまってすみません。

橋本：いえ、いえ、とんでもないです。せっかくの機会ですから、あのう、中恵さんとか、あったら、聞いてみることもとか、ありますか？

中恵：もう、最終のことを考えています。すみません。最終というか（笑）。最後、なにをしゃべろうかと（笑）。

橋本：はい。何時からはじめましたか。3時、

阿部：3時12分ですね。

橋本：3時12分。うわっ、もう。

阿部：5時12分で終わる予定です。

橋本：そうですね、じゃあ、もう、2時間になりますね。最初、90分の予定だったのが、120分になって、予想通り、延長になってしまいました。ですけど、今、終わると中途半端になってしまいますので、一言ずつだけでも、かまいませんので、みなさんから、これからの、自分にとっての『水曜読書会』の抱負について、お言葉をいただきたいと思います。じゃあ、また、さっきと、同じ順番になるんですが、新名さんの方から、一言、お願いしたいんですが、最初の予定は一人が言ったら、また、だれかが質問するんだったんですが、質問の時間をとらなくて、言いつばなしでまわりまして、最後に、樫田先生に、ちょっと、縮めてもらおうかなと思いますので、よろしくお願いします。

### ○さいごに一言ずつ

新名：先ほどから、一緒に抱負も述べているのですが、やはり、自分にとって知らないことがたくさんあるっていうのを、どんどん自覚していっているんで、今後とも知識を増やして行って、プラスにしていきたいと思っています。今後とも、よろしくお願いします。

阿部：これからも、ぜひ来てくださいね。

新名：はい、行けたら。来てもいいんですか。ありがとうございます。お願いします。

橋本：じゃあ、中恵さん、お願いします。

中恵：はい、中断していた期間にですね、病氣中断していた間に、そのう、読書会で喋るための言語を喪失していたということがあって、はやく追いついて、もう、たくさん、本を読んで、あのう、喋りたいと思うけど、それができないという苦しさを抱えているんですが、そのう、今日、やっぱり、自分が考えていることとか、私も、まあ、就職もしたりして、現場の人となっているわけで、自分の体験から考えたこと、それから、本を読んで、考えること、この両方で、努力していきたいのでよろしくお願いします。

橋本：阿部さん。

阿部：私は、平成13年に徳島大学大学院人間・自然環境研究科人間環境専攻を修了と同時に県外に就職した関係もあり、『水曜読書会』への出席回数が在籍時に比べて、非常に少なくなりました。毎回でも出席したい気持ちはあるのですが。これからも、1年間に3～4回位出席できればと思います。いつも、『水曜読書会』では、知的刺激を与えていただいております。ここにまとめてある『水曜読書会』100回までの「テキスト一覧」にあるこれらの本を読んできたというのが、自分の中の誇りに

なっています。今の自分を形づくってくれた『水曜読書会』といえると思います。100回までの間には、本当にいろいろなジャンルの本を読みました。その中には、自分では選ばないようなジャンルの本もありました。『水曜読書会』に参加することによって、読書の幅が広まったことはもちろんですが、読書を通じて、人間の幅も広がったと感じています。樫田先生や、メンバーの人たちと議論したことが、私の血となり肉となり、新たな価値観が少しずつ身に付いていったと言っても過言ではないでしょう。いいことばかり言って恐縮ですが、それほど、『水曜読書会』は、効く!!』ということでしょうか。大学院在籍時には、多いときには、年2回ないし3回くらい、発表が当たることもあったのですが、十分な理解もせずに、発表に臨むこともありましたが、そんな時には、それを見透かしたごときの樫田先生の鋭い質問に、たじたじになり、冷や汗が背中をタラリーっと走ったことも、数知れずありました。私が他のメンバーの方へした質問が舌足らずで分かりづらい時には、樫田先生がそれを補ってくださり、代弁してくださり、「自分が言いたかったこと」があらためて見えてくることが何回もありました。樫田先生のフォローのして下さり方、それは、見事なものでした。それは、現在も同じようにして下さっております。私はそれを「教育的配慮」ともいえると思っております。社会学的センスに乏しい私がこれほどまでに楽しみながら、『水曜読書会』への参加を続けてこられたことは、そういうご配慮があつてのことと感謝しております。私は、『水曜読書会』という読書会に参加させていただきただけではなく、読書会の先にある「無限なる人間の知を知る・考える」という壮大なものへと樫田先生が私たちを導いてくださったのだということ、今は強く感じております。10年間という年月を思うとき、それが、短かったのか長かったのか言葉に表すことができません。私たちが、樫田先生に導かれついでにきた10年間と樫田先生が主宰者として過ごされてきた10年間は、同じ10年間であっても、それぞれの感慨は、それぞれに、違うことでしょう。冒頭の橋本先生のインタビューに答えられる形で、述べられた樫田先生の『水曜読書会』に対する思い、前史などをあらためてお聞きし、10年間主宰者として、1回も欠席することなく、『水曜読書会』を継続されてきた樫田先生に改めて敬意を表したいと思っております。そして、10年間の間、参加して下さった全ての方たちに。私たちが、『水曜読書会』で共有してきたあの時間は、何のものにも代えることができません。これからも、可能な限り参加させていただき、「知的生産者」としての自分に磨きをかけていきたいと思っております。それが樫田先生にできる唯一の「恩返し」だと思っております。最後に、『水曜読書会 100回記念』、本当におめでとうございました。『水曜読書会』のこれからの発展を心より祈っております。樫田先生が存在される限り、『水曜読書会』は、永遠に不滅です。

橋本：私も、最初の頃院生の頃は、まだ、まじめだったんですが、だんだん、こう社会学

から、遠ざかってきているなあという自分を感じています。でも、今回 100 回座談会を企画しだして、ほんとうに、初心にもどれたり、刺激になったんですけど。本を読んで何かを考える、知的な時間がものすごく必要なんだな、それは、お金とか、そういうものでは買えないものであるなというふうなことを感じました、また、自分では、本屋に行っても、たぶん、こういう本は、手元に置くことはできなかったと思います。読むと面白かったです。これからも、4 月から 7 月ぐらいまでだめかもしれませんが、可能な限り、参加したいと思っています。で、できるかぎり、レジュメもきりたいとおもうのですが、今日も、レジュメになっていなくて、申し訳なかったのなと思っています。なんか、反省みたいになってしまったんですけども。一言で終わらせていただきます。

最後に、まあ、樫田先生に全部を通してお話いただいて。

樫田：なるほど。全部を通してということならですね、個別の今、出た話にお答えするというよりは、全部を通してというふうにしようと思うんですけども。あのう、やっぱり次のような視点は必要だと思うんですよ。「マンネリズム打破」、という視点がです。100 回記念で終わりでないんならば、これは大事な視点だと思います。それで、それぞれにとって、まあ、参加のメリットがあつてですね、なおかつ、自分ひとりでない、みんなで本を読む価値があつて、場が維持されている、それならば、マンネリでいいじゃないかっていう感覚もあるかと思うんですが、それはよくないとも思うのです。実は、今日、来年度のテキストを提示しようと思って、昨日、本屋さんをまわって、読みやすさを考えて、新書を中心に何十冊か、本を買ったんですが、私が、手を伸ばす本が減っているという問題が、生じていました。つまり、マンネリズムですね。広井良典もどンドン書いてるし、ここに出てくるような仲正さんとか、みんな、どンドン書いてるけど、一冊読めば、まあいいやと、思うような人が多いわけですよ。それで、大澤さんが書いていたから、大澤さんの、新しい本を買って来ましたけれども、もう、10 年やっていくなら、まあ、任意の読書会なので別にやる義務はないんですけども、もし、もう 10 年やっていくのなら、次に話すテーマが成り立つかどうかを検討すべきではないかと、常々思っております。それは、「社会学批判」というテーマです。私は最初の目標の 3 つの中には、それを明確には掲げなかったのですが、社会学は、1945 年に、日本が敗戦になった直後は、日本を近代化する学問でした、日本を近代社会にするための学問として、45 年、55 年、65 年とですね、やってきたわけですけども、1970 年代以降、社会学は、近代社会批判として、少なくとも日本では、成長してきたはずなんです。しかし、そこどころが、社会学批判とか近代社会批判の部分が、この読書会ではあまり強く出ていない、ついつい、現代社会理解とかですね、そういう水準でとどまってしまうっていて、もっと先へもっと先へという、力動が弱まっているような気が



しております。そういう力動を取り戻すために何が必要かということを考えながら、やっていかなければ、じり貧になるだろうというふうに思っております。それでみなさん、それぞれ、職につかれて、お忙しいように見えます。それならば、たとえばの提案ですが、合宿制の読書会、「夏休み特別水曜読書会」というような形の合宿で本を読む、つまり、ブレイクスルーするために、すこし、専門書っぽい物をしっかりと読むというのはいかがでしょうか。新書を読んでいたって、2冊目の新書も3冊目の新書も面白くなっているだけで、書いてあることは同じなわけですよ。そんなものを複数冊読んでいったって、しょうがないので、そして、先端の内容になればなるほど、新書には、出てこなくなるわけですから、ブレイクスルーするためには、たとえば、フロイトの新しい全集が、今出ております。それを読む、合宿を組む、とか、そういう、何か、ブレイクスルーにつながることをしなければならぬ。私たちに、そういうことをさせることが可能になるような枠組みを開発しながら、新しい『水曜読書会』の、10年を、10年でなくても、数回でも、それを進めていくことができればいいなあと考えて聞いておりました。それで、そういう、努力のをする中で、はじめて、中恵さんが言った話、つまり、もういちど、言語を獲得する、何かを語る言語を獲得する、ということが可能になるのだと思われまます。マンネリを乗り越えようとする意欲の中で、その勉強をしていく中ではじめて、自分や世の中を語るに価する言語は獲得できるのであって、マンネリ的な言語を獲得しても、しょうがないだろうと思いました。タイマーがピッ、ピッ、ピッといっておりますので、これで、終わりにしようと思えます。テープが終わった音です。

橋本：はい。ちょうど、時間に、2時間ぴったりになりました。当初の予定より、延びましたが、有意義だったように思います。どうも、ありがとうございました。

榎田 中恵 新名 阿部：ありがとうございました。

資料1 『社会学水曜読書会』テキスト一覧（第1回～第109回）

※阿部 智恵子 作成

以下『社会学水曜読書会』の11年間109回分のテキスト一覧を年度別の表形式で掲載する。110回目以降は徳島大学総合科学部地域システムコース地域社会サブコースのWWWサイトにおいて見るができるようになっている。

## 平成9年度水曜読書会

NO.1.

月日	テキスト名	発表者
(1)1997.4.23 ※12名参加	大島 弓子『ロストハウス』（角川書店）に関する加藤 秀一氏の講演テープ（マンガと現代社会＝1997.3.2JRTラジオ『サンデーウェーブ』）を聴く	樫田 美雄
(2)1997.5.28	大島 弓子『ロストハウス』角川書店を読んで、その他	樫田 美雄
(3)1997.6.25	見田 宗介『現代社会の理論－情報化・消費化社会の現在と未来－』岩波書店（1章・2章）	高木 竜輔
(4)1997.7.23	見田 宗介『現代社会の理論－情報化・消費化社会の現在と未来－』岩波書店（3章・4章）	高木 竜輔
(5)1997.9.24	鷺田 清一『じぶん・この不思議な存在』講談社	橋本 文子
(6)1997.10.22	野村 雅一『身ぶりとしぐさの人類学－身体がしめす社会の記憶』中央公論社（I～IV章）	中恵 真理子
(7)1997.11.26	野村 雅一『身ぶりとしぐさの人類学－身体がしめす社会の記憶』中央公論社（V章）	早崎 一修
(8)1997.12.17	大越 愛子『フェミニズム入門』筑摩書房 （3章以降、97～233頁）	樫田 美雄
(9)1998.1.28	内田 隆三『テレビCMを読み解く』講談社 （序章～第1章）	橋本 文子
(10)1998.2.18	内田 隆三『テレビCMを読み解く』講談社 （後半）	阿部 智恵子

※初年度のみ3月を休会した（樫田注記）

## 平成 10 年度水曜読書会

NO.2.

月日	テキスト名	発表者
(11) 1998.4.22	コーンハウザー『大学で勉強する方法』玉川大学出版局	樫田 美雄
(12) 1998.5.27	山之内 靖『マックス・ウエーバー入門』岩波書店 (プロローグ、第1章、第2章、98頁まで) 前半	早崎 一修
(13) 1998.6.24	山之内 靖『マックス・ウエーバー入門』岩波書店 (後半、第3章、第4章、終章、最後まで)	樫田 美雄
(14) 1998.7.15	佐藤 俊樹『ノイマンの夢・近代の欲望－情報化社会を解体する－』講談社 (前半、序章、第1章、第2章、130頁まで)	阿部 智恵子
(15) 1998.9.16	佐藤 俊樹『ノイマンの夢・近代の欲望－情報化社会を解体する－』講談社 (後半、第3章、第4章、最後まで)	早崎 一修
(16) 1998.10.28	清家 篤『生涯現役社会の条件』中央公論社	阿部 智恵子
(17) 1998.11.18	今福 龍太『クレオール主義』青土社	早崎 一修
(18) 1998.12.16	古川 隆久『皇紀・万博・オリンピック』中央公論社 (前半：127頁まで＝3章まで) 3章	橋本 文子
(19) 1999.1.27	古川 隆久『皇紀・万博・オリンピック』中央公論社 (後半、128頁から最後まで) 5章6章	阿部 智恵子
(20) 1999.2.24	ロジェ・シャルチェ『書物の秩序』筑摩書房	田井 豊
(21) 1999.3.17	今までに読んだ本の総復習	樫田 美雄 他

## 平成 11 年度水曜読書会

NO.3.

月日	テキスト名	発表者
(22) 1999.4.28	社会学のテキストを読むⅠ（初学者向け） 奥村 隆編『社会学に何ができるか』八千代出版 （前半、39～198頁まで）	田井 豊 橋本 文子 檜田 美雄
(23) 1999.5.26	社会学のテキストを読むⅡ（初学者向け） 『社会学に何ができるか』八千代出版 （後半、199～376頁まで）	檜田 美雄 田井 豊 阿部 智恵子
(24) 1999.6.23	奥村 隆編『社会学に何ができるか』八千代出版 5 章 歴史社会学入門（その1） 副田 義也『教育勅語の社会史』有信堂 （前半、1～187頁まで）	橋本 文子 阿部 智恵子
(25) 1999.7.14	歴史社会学入門（その2） 副田 義也『教育勅語の社会史』有信堂 （後半、189～365頁）	檜田 美雄
(26) 1999.9.22	福祉社会学入門（その1） 藤村 正之『福祉国家の再編成』東京大学出版局 （前半、1～114頁）	田井 豊
(27) 1999.10.27	福祉社会学入門（その2） 藤村 正之『福祉国家の再編成』東京大学出版局 （後半、115～254頁）	中恵 真理子
(28) 1999.11.24	マーク・ポスター『情報様式論』岩波書店 （前半）	中恵 真理子
(29) 1999.12.22	マーク・ポスター『情報様式論』岩波書店 （後半）	阿部 智恵子
(30) 2000.1.26	小此木 啓吾『対象喪失－悲しむということ－』 中公新書（前半）	橋本 文子
(31) 2000.2. 23	小此木 啓吾『対象喪失－悲しむということ－』 中公新書（後半）	檜田 美雄
(32) 2000.3. 22	田尾 雅夫『会社人間はどこへ行く』中公新書	田井 豊

## 平成 12 年度水曜読書会

NO.4.

月日	テキスト名	発表者
(33)2000.4.27	市野川 容孝 『身体・生命』岩波書店	阿部 智恵子
(34)2000.5.24	宮原 浩二郎『変身願望』ちくま書房 (前半)	檜田 美雄
(35)2000.6.28	宮原 浩二郎『変身願望』ちくま書房 (後半)	田井 豊
(36)2000.7.26	西垣 通 『こころの情報学』ちくま新書 (前半)	阿部 智恵子
(37)2000.9.27	西垣 通 『こころの情報学』ちくま新書 (後半)	高橋 政宏
(38)2000.10.25	佐藤 俊樹『不平等社会日本』中央公論社	高橋 政宏
(39)2000.11.22	鷺田 清一『「聴く」ことの手』TBSブリタニカ (前半)	島田 洋子
(40)2000.12.	鷺田 清一『「聴く」ことの手』TBSブリタニカ (後半)	渡辺 真紀子
(41)2001.1.24	米本 昌平ほか『優生学と人間社会』講談社 (後半)	木野 綾子
(42)2001.2.21	米本 昌平ほか『優生学と人間社会』講談社 (後半)	阿部 智恵子
(43)2001.3.21	西村 周三『医療と福祉の経済システム』 ちくま新書	檜田 美雄

## 平成 13 年度水曜読書会

NO5.

月日	テキスト名	発表者
2001.9.26 (番外編)	イヴァン・イリッチ『脱病院化社会ー医療の限界』 晶文社	檜田 美雄

## 平成 14 年度水曜読書会

NO6.

月日	テキスト名	発表者
(44) 2002.4.24	広井 良典『定常化社会－新しい「豊かさ」の構想』 岩波書店 (前半)	木野 綾子
(45) 2002.5.27	広井 良典『定常化社会－新しい「豊かさ」の構想』 岩波書店 (後半)	橋本 文子
(46) 2002.6.26	吉見 俊哉『カルチュラル・スタディーズ』岩波書店 全部	大日義晴
(47) 2002.7.17	富永 健一『社会変動の中の福祉国家』中央公論社 (前半、1～90頁)	木野 綾子
(48) 2002.9.18	富永 健一『社会変動の中の福祉国家』中央公論社 (後半、90～243頁)	村瀬 博志
(49) 2002.10.23	荻谷 剛彦『教育改革の幻想』筑摩書房 (前半、1～136頁)	橋本 文子
(50) 2002.11.27	荻谷 剛彦『教育改革の幻想』筑摩書房 (後半、137～215頁)	大日 義晴
(51) 2002.12.25	大澤 真幸『虚構の時代の果て』筑摩書房 (前半、1～144頁)	阿部 智恵子
(52) 2003.1.22	大澤 真幸『虚構の時代の果て』筑摩書房 (後半、～297頁)	樫田 美雄
(53) 2003.2.26	広井 良典『死生観を問い直す』筑摩書房 (前半 1～95頁)	多田 和代
(54) 2003.3.26	広井 良典『死生観を問い直す』筑摩書房 (後半、97～292頁)	阿部 智恵子

## 平成 15 年度水曜読書会

NO.7.

月日	テキスト名	発表者
(55) 2003.4.23	H.L.ドレイファス『インターネットについて』産業図書	村瀬 博志
(56) 2003.5.28	渋川 智明『福祉NPO－地域を支える市民企業－』岩波書店（前半119頁まで）	阿部 智恵子
(57) 2003.6. 18	渋川 智明『福祉NPO－地域を支える市民企業－』岩波書店（後半、194頁まで）	本郷 澄子
(58) 2003.7.23	鹿野 政直『健康観にみる近代』朝日新聞社（前半、105頁まで）	近藤 恭子
(59) 2003.9.17	鹿野 政直『健康観にみる近代』朝日新聞社（後半、190頁まで）	阿部 智恵子
(60) 2003.10.22	モーリス・ブランショ『明かしえぬ共同体』筑摩書房	村瀬 博志
(61) 2003.11.26	荻野 美穂『生殖の政治学－フェミニズムとバース・コントロール』山川出版社（前半、143頁まで）	中恵 真理子
(62) 2003.12.24	荻野 美穂『生殖の政治学－フェミニズムとバース・コントロール』山川出版社（後半、ラストまで）	松尾 かほり
(63) 2004.1.28	土屋 葉『障害者家族を生きる』勁草書房（前半、114頁）	木野 綾子
(64) 2004.2.25	土屋 葉『障害者家族を生きる』勁草書房（後半、237頁）	多田 和代
(65) 2004.3.24	御厨 貴『オーラル・ヒストリー』中央公論新社	橋本 文子



## 平成 16 年度水曜読書会

NO.8.

月日	テキスト名	発表者
(66)2004.4.28	上野 加代子・野村 知二『〈児童虐待〉の構築』 世界思想社（前半、4章まで）	大林 陽一
(67)2004.5.19	上野 加代子・野村 知二『〈児童虐待〉の構築』 世界思想社（後半、5章から）ゲスト：上野加代子氏	檜田 美雄
(68)2004.6.30	メイナード著 檜田 美雄・岡田 光弘訳『医療現場 の会話分析』 勁草書房、（第4章のみ）	阿部 智恵子
(69)2004.7.28	メイナード著 檜田 美雄・岡田 光弘訳『医療現場 の会話分析』 勁草書房（第1、5、6章とピローク ）	檜田 美雄
(70)2004.9.22	副田 義也『弔辞の社会学』岩波書店 （前半）	橋本 文子
(71)2004.10.27	副田 義也『弔辞の社会学』岩波書店 （後半）	檜田 美雄
(72)2004.11.24	仲正 昌樹『「不自由」論ー『何でも自己決定』の限 界ー』 ちくま新書（前半、115頁まで）	中恵 真理子
(73)2004.12.22	仲正 昌樹『「不自由」論ー『何でも自己決定』の限 界ー』 ちくま新書（後半、117頁～ラストまで）	大林 陽一
(74)2005.1.26	竹田 青嗣『現象学は〈思考の原理〉である』ちくま 新書 （前半、121頁まで）	阿部 智恵子
(75)2005.2.23	竹田 青嗣『現象学は〈思考の原理〉である』ちくま 新書 （後半、123頁～ラストまで）	橋本 文子
(76)2005.3.16	斉藤 純一『公共性』岩波書店	中恵 真理子

## 平成 17 年度水曜読書会

NO.9.

月日	テキスト名	発表者
(77)2005.4.27	斉藤 純一『公共性』岩波書店（続）	中恵 真理子
(78)2005.5.18	土井 隆義『「個性」を煽られる子どもたち－親密圏の変容を考える－』岩波ブックレット633、2004	新名 由佳
(79)2005.6.22	加藤 秀一『〈恋愛結婚〉は何をもたらしたか－性道徳と優生思想の百年間－』ちくま新書（3章120頁まで）	阿部 智恵子
(80)2005.7.27	加藤 秀一『〈恋愛結婚〉は何をもたらしたか－性道徳と優生思想の百年間－』ちくま新書（後半の4以降）	佐竹 文子
(81)2005.9.28	西原 和久・宇都宮 京子 [編] 『クリティークとしての社会学』（1章&2章、自我&自己物語）東信堂、2004年	新名 由佳
(82)2005.10.26	西原 和久・宇都宮 京子 [編] 『クリティークとしての社会学』（4章&5章、長生き社会&カルチュラル・スタディーズ）東信堂、2004年	橋本 文子
(83)2005.11.30	ハンナ・アーレント『イエルサレムのアイヒマン－悪の陳腐さについての報告』みすず書房（8章末、118頁まで）	中恵 真理子
(84)2005.12.21	ハンナ・アーレント『イエルサレムのアイヒマン－悪の陳腐さについての報告』みすず書房（後半、最終頁まで）	大林 陽一
(85)2006.1.25	吉見 俊哉『万博幻想－戦後政治の呪縛－』ちくま新書（前半、2章末、148頁まで）	阿部 智恵子
(86)2006.2.22	吉見 俊哉『万博幻想－戦後政治の呪縛－』ちくま新書（後半、最終頁まで）	檜田 美雄
(87)2006.3.15	赤川 学『子どもが減って何が悪いか』ちくま新書、2004	檜田 美雄

## 平成 18 年度水曜読書会

NO.10.

月日	テキスト名	発表者
(88)2006.4.12	斉藤 純一『自由』岩波書店、2005	中恵 真理子
(89)2006.5.17	嵯峨崎 泰子『生命と医療にかける橋』 生活ジャーナル2000	樫田 美雄
(90)2006.6.28	大林 雅之『生命の淵ーバイオエシックスの歴史・哲学・課題ー』東信堂（1～4章、59頁まで）2005	佐竹 文子
(91)2006.7.19	大林 雅之『生命の淵ーバイオエシックスの歴史・哲学・課題ー』東信堂（5章、140頁まで）2005	阿部 智恵子
(92)2006.9.13	倉本 智明 [編] 『セクシュアリティの障害学』明石書店 (1, 2, 3章と5, 7章) 2005 ゲスト：倉本智明氏	橋本 文子
(93)2006.10.25	盛山・土場・ほか [編] 『〈社会〉への知/現代社会の理論と方法（上）理論知の現在』勁草書房、2005 (4章&5章,大澤 真幸：個と社会、佐藤 俊樹：意味と社会システム)	中恵 真理子
(94)2006.11.29	盛山・土場・ほか [編] 『〈社会〉への知・現代社会の理論と方法（上）理論知の現在』勁草書房、2005 (6章&7章、太郎 丸博：合理的選択理論、織田 輝哉：秩序問題への進化論的アプローチ)	佐竹 文子
(95)2006.12.20	香山 リカ『〈私〉の愛国心』ちくま新書 (3章まで、～119頁)	新名 由佳
(96)2007.1.24	香山 リカ『〈私〉の愛国心』ちくま新書 (ラストまで、～216頁)	樫田 美雄
(97)2007.2.21	副田 義也『あしなが運動と玉井義臣』岩波書店 (前半：1～236頁)	橋本 文子
(98)2007.3.14	副田 義也『あしなが運動と玉井義臣』岩波書店 (237頁～ラスト)	阿部 智恵子

## 平成 19 年度水曜読書会

NO.11.

月日	テキスト名	発表者
(99) 2007.4.12	市野川 容孝『社会』岩波書店：（前半、1-139頁）、2006	新名 由佳
(100) 2007.5.2	市野川 容孝『社会』岩波書店：（後半）、2006	橋本 文子
(101) 2007.6.20	野口 裕二『ナラティブの臨床社会学』勁草書房、2005 （前半、123頁まで）	中恵 真理子
(102) 2007.7.18	野口 裕二『ナラティブの臨床社会学』勁草書房、2005 （後半、124頁から）	阿部 智恵子
(103) 2007.9.19	好井 裕明[編]『繋がりと排除の社会学』明石書店、2005より （蘭 由岐子著、4章「宿泊拒否事件にみるハンセン病患者排除の論理」）ゲスト：蘭 由岐子氏	檜田 美雄
(104) 2007.10.17	好井 裕明[編]『繋がりと排除の社会学』明石書店、2005より （水野 英莉著、5章「スポーツする日常にある性差別」）	中恵 真理子
(105) 2007.11.28	檜村 愛子『ネオリベラリズムの精神分析－なぜ伝統や文化が求められるのか－』光文社新書、2007 （前半192頁まで）	阿部 智恵子
(106) 2007.12.19	檜村 愛子『ネオリベラリズムの精神分析－なぜ伝統や文化が求められるのか－』光文社新書、2007 （後半最後まで）	橋本 文子
(107) 2008.1.23	佐藤 健二・吉見 俊哉編『文化の社会学』有斐閣、2007 （一部のみ：第7章金田淳子「マンガ同人誌－解釈共同体のポリティックス」、第8章澁川 修一「ネット文化－2ちゃんねるの光と陰」、2つの章で163～216頁）	阿部 智恵子
(108) 2008.2.20	若林 幹夫『郊外の社会学－現代を生きる形』筑摩書房、2007 （前半108頁まで）	檜田 美雄
(109) 2008.3.19	若林 幹夫『郊外の社会学－現代を生きる形』筑摩書房、2007 （後半最後まで）	阿部 智恵子



## 資料 2 社会学水曜読書会 100 回記念座談会準備用シート

以下に掲出する 4 枚のシートは、座談会準備用に事前に提出されたものである。※檜田は提出しなかった。

[阿部 智恵子分]

氏名	所属	E-mail	携帯電話番号	
阿部 智恵子	石川県立看護大学 ※2008 年の所属	55613a@ishikawa-nu.ac.jp ※2008 年のアドレス		
<b>座談会テーマ：『自分の関心と水曜読書会で取り上げた本との関連について』</b>				
関心のあるテーマ	1. 医療コミュニケーション 2. ライフコース論 3. 障害学			
<b>座談会で取り上げたい本</b> 注：1 冊~2 冊の間でお挙げください。				
1 冊目	著者名	題名	発行所	発行年
発表年月日 H.16.6.30 (1 回目) H.16.7.28 (2 回目)	D.メイナード著 檜田美雄・岡田光弘 【訳】	『医療現場の会話分析』	勁草書房	2004.2.25
2 冊目	著者名	題名	発行所	発行年
発表年月日 H.12.11.22 (1 回目) H.12.12. (2 回目)	鷺田清一	「聴く」ことの力	TBS ブリタニカ	1999.7.2
① 座談会にあたっての ご要望等ありましたら、 何でもお書きください。 ② 座談会で、話したい内容 についても、自由に何でも ご記入ください。	① はじめての座談会体験ですが、とても楽しみです。どうぞよろしく願 いします。 ② 『話す』『聴く』という 2 つの関心分野から上記の本を選びました。 『医療現場の会話分析』では、論点を 3 つくらいにしぼり 1. 悪い知らせ、良い知らせと日々の生活 2. ニュースを伝えるシーケンス 3. ニュースを告げる方法 等について本から学んだこと、実際の臨床現場で起こっている現象等につ いて自分の考えを述べたい。檜田先生の講義についてもとりあげたい (2004 年、2005 年) 『聴くことの力』では、話す・聴くという行為が、人間同士の関係の中で どのような意味をなし、関係を紡いでいくかについて論じたい。 ※発表当日は、発表時間の関係で『医療現場の会話分析』のみにしぼる可 能性があります。			

[中恵 真理子分]

氏名	所属	E-mail	携帯電話番号	
中恵 真理子	科目等履修生			
座談会テーマ：『自分の関心と水曜読書会で取り上げた本との関連について』				
関心のあるテーマ	1. 自我論から翻身論へ（自分の関心を育てていったもの） 2. 3.			
座談会で取り上げたい本 注：1冊~2冊の間でお挙げください。				
1冊目	著者名	題名	発行所	発行年
発表年月日 1997.6.25 1997.7.23	見田宗介	現代社会の理論 —情報化・消費化社会 の現在と未来	岩波書店	1996
2冊目	著者名	題名	発行所	発行年
発表年月日 1998.7.15 1998.9.16	佐藤俊樹	ノイマンの夢・近代の 欲望—情報化社会を 解体する	講談社	1996
①座談会にあたってのご要望等ありましたら、何でもお書きください。 ②座談会で、話したい内容についても、自由に何でもご記入ください。	2006.4.12 齊藤純一『自由』岩波書店 2005.			

[新名 由佳分]

氏名	所属	E-mail	携帯電話番号	
新名 由佳	徳島大学総合科学部人間社会学科アジア研究コース 4年			
座談会テーマ:『自分の関心と水曜読書会で取り上げた本との関連について』				
関心のあるテーマ	1. 教育 2. 現代社会問題 3.			
座談会で取り上げたい本 注: 1冊~2冊の間でお挙げください。				
1冊目	著者名	題名	発行所	発行年
発表年月日 (2005. 5. 18)	土井隆義	「個性」を煽られる子どもたち ー親密圏の変容を考えるー	岩波ブックレット633	2004
2冊目	著者名	題名	発行所	発行年
発表年月日 (2006. 12. 2)	香山リカ	〈私〉の愛国心	ちくま新書	2004
① 座談会にあたっての要望等ありましたら、何でもお書きください。	①特にありません。 よろしく申し上げます。			
② 座談会で、話したい内容についても、自由に何でもご記入ください。	②これまで取り上げた本について皆さんと活発にお話できたらと思います。			



[橋本 文子用]

氏名	所属		E-mail	携帯電話番号
橋本文子	徳島大学医学部保健学科 看護学専攻		hasimoto@ medsci.tokushima-u.ac.jp	
座談会テーマ：『自分の関心と水曜読書会で取り上げた本との関連について』				
関心のあるテーマ	1. セルフヘルプグループ 2. 主体性とはなにか 3.			
座談会で取り上げたい本 注：1冊~2冊の間でお挙げください。				
1冊目	著者名	題名	発行所	発行年
発表年月日 2004年1月28日	土屋葉	障害者家族を生きる	勁草書房	2002
2冊目	著者名	題名	発行所	発行年
発表年月日 2004年11月24日	仲正昌樹	「不自由論」-『何でも自己決定』 の限界-	ちくま新書	2003
①座談会にあたってのご要望等ありましたら、何でもお書きください。 ②座談会で、話したい内容についても、自由に何でもご記入ください。	参加者の方々に助けていただきながら何とか司会進行役を果たしていきたいです。			

資料3 国際医療福祉大学特別講義・地域看護方法論：  
地域看護と会話分析(2005年4月25日)配付レジュメ

【『医療現場の会話分析』と地域看護：現代社会論としての医療・知識・組織社会学】

榎田美雄(かしだ よしお)  
(kashida@ias.tokushima-u.ac.jp)

【基礎データ】

□ = 教科書 =

D.メイナード著、榎田美雄・岡田光弘訳、2004『医療現場の会話分析』勁草書房。

□ = 領域と狙い =

- ・在宅看護・地域看護の課題を現代社会理解に基づいて検討する
- ・文脈の中で、会話の意味が定まることを理解する

【授業の流れ】

I。現代社会と看護師

- (1) 近代社会は、分業化社会、専門化社会である。  
(身分・属性主義→業績・能力主義)
- (2) 現代は、高度情報化社会でもある。
- (3) したがって、専門職は、学び続けなければならない。(生涯学習社会)  
参考：近頃の若者は挨拶もできない≠コミュニケーション能力が低い？  
「能力の非個人主義的理解」
- (4) 素人(非専門化)も、たくさんの情報を持っている中で、そういう状況を踏まえて医療者は患者に接しなければならない。
- (5) 看護師には、患者支援の役割が与えられつつある。

II。医療現場の会話分析について

- (1) 「告知」にはするか、しないか、という問題だけではなく、どのようにするかという問題もあることを理解してもらう。  
参考：背景としての現象学、生活世界論
- (2) ニュース(「知らせ」)の意味が、文脈で変わること理解してもらう(4章)  
病気を喜ぶ & (ちゃんとした)病気でないことを悲しむ
- (3) 文脈には、社会常識と、場面の特徴が影響していることを理解してもらう
- (4) PDS(パースペクティブ・ディスプレイ・シークエンス)の考え方を理解してもらう

III。まとめ

- (1) 自立強迫社会において、患者は、インフォームド・コンセントを強いられている。
- (2) この負担をなるべく軽くする、援助提供者として看護師は働きうる。



## 第2章 社会学水曜読書会（第51回目）2002年12月25日開催記録 —大澤真幸『虚構の時代の果て』（前半）を読む—

テキスト：大澤真幸著 1996『虚構の時代の果て—オウムと世界最終戦争』筑摩書房  
（前半、1～144頁）

司会：榎田 美雄（徳島大学）

発表：阿部 智恵子（国際医療福祉大学）

徳島大学総合科学部内 18:30～21:00

参加者（発言順）：榎田 美雄、阿部 智恵子、渡辺 真紀子、村瀬 博志、中恵 真理子、大日 義晴、橋本 文子、多田 和代、以上8名（教官1名、学生2名、社会人5名）

### ■発表の前に

榎田：それでは、始めましょう。

阿部：はい。阿部が発表させていただきます。

資料の確認をお願いします。レジュメがA3で7枚です。それと、資料があります。

榎田：せっかくだから、構成を先にお話になっていただけますか。せっかく気合いが入ったご発表だと思うので。レジュメ7枚だっただけですが。

阿部：はい。最初に構成として本を読むときの姿勢を示しました。それから総評があって、要約を各一章、二章、三章につけています。それから具体的な内容で、あとコメントを章毎につけました。全体を通してのコメントは、レジュメ12ページにあります。それと、参考文献が3つあります。

榎田：参考文献が、よくわからないのですがどういうことなのですか？

阿部：参考文献です。この本の紹介なのですが。

榎田：発表との関係をお教え下さい。

阿部：発表とは、関係は特にはないのですが、オウムから帰還した人の手記ですとか、島菌進氏の宗教社会学の資料です。それと、ハーベスト社の資料をつけています。

榎田：わかりました。これらの資料は、阿部さんのご発表を、まず書評論文に近いようなものとして、受けとることができて、その書評論文としての発表に対する参考文献である、というような位置づけでよいのですか？

阿部：書評とまではいかないのですが、簡単な要約のようなものです。

榎田：大澤さんの本に対しての、阿部さんのご発表についての参考論文、参考文献なので、すかかって聞いたのですが、そうじゃないですよ。

阿部：はい。よろしいですか。

榎田：何をしても、勝手かつ可能なのですが、聞いている人の助けになるように紹介をしていただいた方がよくなって、聞いている人にとって阿部さんのご発表をどう聞いたらいいかということに、どのようにこの参考文献が関わっているのかというのが質

問なのですが。

阿部：一つずつ大まかでいいでしょうか。

樫田：いいえ。参考文献の位置づけですから、一つずつである必要はありません。

### ○参考資料の、発表における位置づけ

阿部：この本の中では、インタビューや著者の参与観察も、入っています。資料の一つめの高橋さんという方の、オウムに入っていた人の「オウムからの帰還」という話は、「内部の実情」ですとか、それから「若者の現在」っていうような感じで捉えることができ、この本と少し似通った点、類似点があるかなと思って出しました。

樫田：どうも、ありがとうございます。最初に言わなかったんですけど、今日 20 時半からの企画もあるんですね。で、わたし提案をあまり丁寧にしなかったのですが、20 時半にですね、一人一言ずつというのがあって、そのあと「来年に向けての抱負」があるので、これは、ぜひとも阿部さんの発表の途中にも休憩を入れようと思うので、休憩中にお考え下さいっていうのを最初に予告しておこうと思います。当然、ね、「今年一年の反省と今後の抱負」を、かっこよくやるためには「大澤さんの話に引きつけて語る」という課題になるわけですから、理想の時代をいかに私たちはすでに乗り越え虚構の時代を生きているのか、ということですね。当然、抱負の中で語っていただくことになるかと思しますので、そういうつもりでも阿部さんの発表を聞いてもらえれば、と思います。じゃあ、発表をお願いいたします。

### ○本を読むときの姿勢

阿部：それでは、発表させていただきます。本の名前は、『虚構の時代の果てーオウムと世界最終戦争』です。著者は、大澤真幸です。まず、この本を読むときの姿勢として、どのように読んでいったら良いかということのを少しあげてみました。大澤も言っているのですが、一つめは「われわれ個人個人にとってのオウムとは何か」ということについて考えながら読みたいと思います。二つめとして、現代社会における宗教、たとえば社会理念としての宗教、消費社会ですとか、IT 社会ですとか、情報化社会ですとか、そういう社会との結びつきの中で考えていきたいと思います。三つめとして、大学教育とか医学教育とか、教育関連のことがらと若者との関連とか、宗教との関連はどこにあるのかという関連も含めて読めれば、と思います。それと、現代社会が宗教とどういう風に親密に結びついているのかということ、私たちの日常に、どのように宗教が入り込んでいるのかということについても考えていければと思います。

まず、総評です。この本を読んでいて、すごく緻密に議論が展開して読者を納得させようとしているように思いました。ただし、その中には、議論が展開しているところとそうでないところ、主張の粗密・強弱もあるのではないかと思います。

た。この本の特徴は、章の終わりや小さな結びの終わりに、疑問詞で終わるやり方をしていて、そうやって次につなげていこうという姿勢が感じられるのですが、後に続く章に必ずその答えがあるのかといえば、ないような、あるような、つながりが私には少しわかりづらいところもありました。でも、疑問を打ち出し、読み手の私たちが著者の疑問を受けとることによって、著者と私たちの間が、近づいていくというような感じを受けました。文中のインタビューは、なかなか読みごたえがあるものでした。読み終えた後でも、完全には、この本を理解できていませんけれども、この本は読者の関心によって、いかようにも読むことができる本だと思います。たとえば階層論とかアイデンティティとか、経済的なこととか、環境の事、社会理論とかもですね。社会学的論考、というよりもアイデンティティとか現実的な議論が多かったので、心理学的な傾向が強いのではないかと思います。

## ■第一章 妄想の相互投射

第一章に入ります。妄想の相互投射ということで、第一章の要約ですけれども、「世界最終戦争」とみなされるべき、第二次世界大戦で日本が敗北してから、ちょうど半世紀を経たときに、すなわち 1995 年に、日本で二つの戦争が勃発しました。その一つは、「兵庫県南部地震」で、他のひとつは「サリン事件」です。この二つは戦争とみなされました。具体的な内容に入ります。

### ○半世紀後の二つの戦争

#### \*半世紀後の戦争

1995 年に二つの戦争が勃発しました。1995 年とは世界最終戦争とみなされるべき戦争で日本が敗北してから、半世紀を経た年になります。この世界最終戦争ってというのは、第二次世界大戦ということです。この第二次世界大戦は、空間的規模と時間的展望の両方向からの特徴づけにおいて世界最終戦争でありました。そのことの理由は、はじめて地球規模の真の世界戦争であったということと、人類が自らを死滅に追いやるのが可能であることが初めて確実なものとして示されたという点においてであり、つまり世界最終戦争と認定されるべき戦争であった。著者が、強調している事は、我々は最終戦争後の世界を生きているのだということです。どうして、このことを強調しているのかと考えたときに、最終戦争が終わっているということは普通だったら平和な時代が来るべきと期待されているのに、というような意図が含まれているのかなあとと思います。そのなかで、そういうことが起こったっていうのは、現状に引きつけて考えていく必要があると考えています。

檜田：わかったと言い張るつもりはないんですけど、たぶんそうじゃないのだと思いますよ。たぶん、『ナウシカ』や『アキラ』と同じ現実が、今の現実なのだっていう話なのだと思いますけども。平和が来るっていう話よりも、最終戦争後だから最終戦争の

リアリティがあるっていう、『アキラ』や『ナウシカ』の話。

阿部：はい。わかりました。どういう戦争だったかっていうと、1 番に 1995 年 1 月 17 日に、兵庫県南部地震で、同じその年の二ヶ月後に、東京の地下鉄サリン事件で、数多くの人びとが突然に亡くなりました。これらのできごとが、戦争であることの理由は、戦争様のものでして感覚されたことです。地震は自然災害なのですが、それを自然のものだと指摘することによって、みんなが、一種の違和感を感じたということです。それゆえ、この二つのこと、両者の同時性に、偶然以上のものを認めることができました。たとえば、地震が一種の戦争として、感覚された理由としては、地震への対処策としての、「危機管理」が問題とされました。それと、地震の被害が空襲と比較されました。それから、地震に「人為性」を見いだそうとする言説の、最も極端のものとして、端的に地震兵器によって、地震が引き起こされたとするものがありました。これは、妄想的な推論ですが、そのようなものがあったということです。地震を戦争の一種と見なす無意識の感受性が、広範に見い出されたという事実は、次のような推論を促すのではないかと。地震が想起させたような、極端な「偶有性」は何らかの不確定で予期できない〈他者〉への感応という形態でのみ、実質化することができるのではないかと。〈他者〉の反応というか〈他者〉が、働きかけるとするか、そういう風な、極端な偶有性は自分の力では、どうしようもない、〈他者〉との関係の中で見出されるということであると思います。兵庫県南部地震は、資本の効率性のみ志向していたインフラストラクチャーが、予想外の激震によって破壊に遭遇したとき、とてつもない非効率性をもたらしたということを明らかにしました。これは、都市というのが道路とか、静脈とか、血管とかいろいろなものにたとえられるんですけども。以前は、地下と地上というのは、生と死を分けるものとして取り扱われたり、地下は神聖な死者のいる場所として、取り扱われたりしたのですが、今は地下鉄とかそういうところに、人為的に人の力が入って、それが結局、資本に効率性のみを指向しているっていう事の弊害をもたらして、このような地震の時に被害にあったというような。思いがけないということではない、予期された事として効率性の喪失をもたらせうるっていうことを感じました。都市のことは後の方で出てきます。

#### \*もう1つの戦争

地震と並ぶもうひとつの戦争ということで、「サリン事件」のことなんですけども、地震と違って、このサリン事件は、あからさまに自覚的な犯行グループと、警察あるいは、警察を支持している日本社会のマジョリティとの間の戦争として紹介されています。で、このサリン事件が、戦争とみなされた理由として、まず、第一に、これは、すごく凶悪なテロ行為で、社会体制そのものに対する攻撃として解釈され、個人的なものではなく国家とか、警察とかそういう大きな組織をめざして行われたテロ組織であ

るということと、オウム真理教団自身、自らを「国家」に擬せており、いろんな役割をもった省庁を作って、本当に国家として、機能していたということがありました。そして、国家間の戦争の一環としてテロ行為を決行しているように見えたからである、ということです。この地下鉄でのテロは、神戸に仕掛けられた攻撃に対する反撃を一つの目的としていた、という可能性を否定し難いのです。兵庫県南部地震と地下鉄サリン事件との間に直接の因果関係があったかもしれないのです。「この半世紀後の二つの戦争」を並列させてみたのは、地震を「戦争」として、受容させてしまった心的な構造と、オウム真理教団が自ら戦争を仕掛けようとするに至った心的な構造との間に同型性を認めることができるからです。麻原彰晃は、神戸の地震を誰かの力をかりて予見していた。そして、地震の被害の時に駆けつけていって救済にあたりました。教団メンバーが、このとき、被害の大きさに驚愕し強い印象を刻みつけただろう、ということは、想像に難くないということです。

## ○妄想の相互投射

### \*妄想の相互投射

阿部：妄想の相互投射です。サリン事件はマスコミが伝達して、又、視聴者、読者が受容した情報が事実に対して常に先行した。これは、特徴的なことであって、このサリン事件は、松本のサリン事件のことですが、事実より情報が先行してしまっていて、その情報が事実であるというように捉えられ、本当に情報を吟味することなしに流れた情報が先行しているような情報の伝達の仕方でありました。で、これは、いいかえれば通常だったら、事実を確認されるまでに、本当にそうかと検証の手続きがあるんですが、それがすべて省略されて情報イコール事実として散布されて受けとられました。これが、ひとつの特徴でした。情報の伝達方法の。事件をめぐる、とりわけ初期の言説が事実の客観性よりも、我々自身の想像力の方により強く規定されてきたと、いうことを大澤は述べています。これをまず、確認しておかなくてはならない、と著者は述べています。オウム真理教団が、「市民社会」や「国家」に対して「戦争」を仕掛けたのだとすれば、その戦争は、この「陰謀史観」によって、正当化されていた可能性が高い。「陰謀史観」とは、どういうことをいうのかというと、社会に許容し難い反秩序を見いだした時、その反秩序の原因を直接には見出し難い外部の他者（の邪悪な意志）に投射する、「押しつける」ことで、その社会の現状を歴史的に説明しようとする態度です。「陰謀史観」は、相互に投射しあうような関係の中で抱かれているときには、自己成就的な仕方で充足されてしまいます。「陰謀史観」が、反秩序の原因を帰属させる攪乱的な他者は、必然的に、あらん限り（心理的）に遠方の他者、他者たちの中でも最も遠くにいる他者として措定される。

檜田：「陰謀史観」なんですが、相互に投射しあうっていうことの中身を口頭でだけでも、ご説明いただいた方がよいと思うのですが。相互に投射する中身は、ほとんど、書い



てはあるんですけど、相互に投射しあっているメカニズムにおいては説明されてないですよ。

阿部：はい。こちらは、こう、鏡のような。互いに、自分と相手が鏡のような。鏡像のような。

榎田：どう、自己成就で、当然あったのか、っていうお話しが説明では、あまり、丁寧に説明されなかったように思います。

阿部：自分で、納得して、相互関係の中で。

榎田：ウーン。

阿部：互いに相手を他者のように見立てることによって、鏡のような存在として連射しあう。お互いの妄想を、結局、事実として、提出していくということです。

「陰謀史観」が、反秩序の原因を帰属させる攪乱的な他者は、必然的にあらん限り、心理的に遠方の他者、他者たちの中でも最も、遠くにいる他者として措定されるということになると思います。

#### \* あらん限り近い他者

阿部：「出家信者のおよそ四割は、スパイである。」というのは、サリン事件の村井秀夫の弁です。村井の言葉は、この教団が、強迫的にスパイを恐れていたことを示しています。この四割というのは、本当に半分ぎりぎりのところで、本当に、スパイか味方かっていう感じのところのギリギリの線です。集団を教団として、認定することがギリギリかろうじて正当化できるくらい。教団の中にスパイがいるといううわさが、教団の中で流れており、「スパイ・チェック」が頻繁に行われていました。自分たちにとっての非常に基本的な規範にすら従わない最も遠い敵対的な他者が同時に自分たち自身に内在しているということ。このことが、ものすごい恐怖であり、自分（たち）自身こそが、その他者である、という恐ろしい逆転がまっていた。本当は、いろんな事をしている悪い人は、遠くの方にいる人というふうに思うのですが、その人たち、自分たちこそが、その他者であるかもしれないという恐怖感があらん限りある、ということです。この遠く、かつ、近い《他者》への恐怖が、オウム真理教信者たちの陰謀史観を支え、戦争への衝動を駆り立てていたのだとすれば、探求すべきことは、このような《他者》が、いかなる機制を通じて彼らにとって現実的なものとして信憑されたのか、ということであろう。我々の社会は一少なくとも現代の日本社会は一、何らかの理由によって「人間を食う」ということによって、表象されるような極限的に敵対的な《他者》に、自らが寄生されているという想像力に現実性を与えるような感覚をオウムは醸成してきました。

#### \* 新新宗教としてのオウム真理教

ここまでの、議論は、今までの議論の中で、示してきたことは、オウムと我々は、完

全に合わせ鏡の関係になっているということです。しかも、そのことは、オウムを攻撃、否定する我々の態度の中に最も明確に示されるということ、です。私もオウムを全然、自分たちと違う人間のように感じていたのですが、そうではなくて、オウムのなるものが、自分たちにある。オウムを攻撃して否定する我々の態度の中にもそういうオウムのものを見ることできるし、オウム自身のようなものがある、この合わせ鏡というのはそのような意味です。この、あらん限り近い他者と、前の文章とは、結びついています。この、オウム真理教がもつ特別さ、極端さ、例外性と、新新宗教の特徴からみた典型性というのは、オウムを日本の宗教史の文脈に位置づけた場合に、新新宗教としての特徴が、あるんですけども、それは、あの、新興宗教に比べると、不幸から救われるというようなものではなくて、不幸とか貧乏とかそういう風な事ではなくて、自分がどのように、生きてらよいか、そういう生のむなしさの問題、悩みの質も違って来ていますし、そのように新新宗教には特徴があり、オウム真理教は、これらの点で「典型である」宗教であるということです。で、これは、米国のテロにも見られ、日米のテロのこのような呼応はオウム真理教の問題を日本にのみ、見出される表層的な要因から説明しようとする事に対する警鐘となっているとも言えるだろう、とのこと。日本にだけテロが起こっているのではなくて、アメリカとか色々なところでテロが起こっている。ですから、日本のことだけに、問題を見出すとか日本の教育問題だけにオウムのものを見出すこと、それでは、説明し尽くす事はできない、という事を著者が書いています。

阿部：地震を「戦争」として受容させてしまった心的な構造と、オウム真理教団

が自ら戦争を仕掛けようとするに至った心的な構造との間に、同型性を認めることができるというところは、わかるんですけど、少し無理が感じられる点もあるのではないかと思います。著者の少し、オウムよりの論考がかいまみられるのではないだろうか、と思います。

## ■第二章 理想の時代／虚構の時代

第二章の要約は、最初の最終戦争から50年の流れの中で、オウム真理教が、どのような位置をもつのかを概観してみるということです。オウム真理教は、虚構の時代の終焉（極限）を代表するような位置を担っております。現代のある種の新新宗教は、又、サブカルチャーは、しばしば潜在的な無意識の欲望の水準においてではあるが、「未来の絶対的な断絶」を求めなくてはならなかったのだろうか。

### ○1. 理想の時代と虚構の時代

\*二つの可能世界

オウム真理教によるテロは、教祖麻原彰晃が予言していた世界最終戦争（の前哨戦）として行われたという仮説に立ちましょ。で、この、最終戦争後の最終戦争、

つまり、2度目の最終戦争、ということに関して、見田宗介は、戦後45年の段階で書いた論文の中で、「現実」が、どのような形態の「反現実」に準拠することによって、組織されているかに応じて、戦後史を三つの段階に区分することができる、と論じています。それは、日本社会の戦後史において、現実が照準している反現実の様相は、「理想→夢→虚構」の順に転換してきた、ということです。著者（大澤）の考えでは、この内、「夢」という語は「理想」と「虚構」の両方に引き裂かれるような二重性をもっている。これは、「夢」は、ある種の「理想」という意味に使われることもあれば（「将来の夢」）、「虚構」という意味にも使われる。（「夢のようにはない」）。ですから、それゆえ、中核的な意味素にのみ注目するならば、三段階は、さらに、「理想→虚構」の二段階に圧縮することができるはずだと著者は、主張しています。理想と虚構の相違は、どこにあるのだろうか。と、いうことで、理想も虚構も、現実世界ではないという点において、すなわち、いわゆる可能世界であるという点において共通しています。で、オウム真理教が戦後史で占める位置は、虚構の時代の終焉（極限）を代表するような位置を担ったのだということです。ここに連合赤軍との照応関係があるのですけれど、大塚英志はオウム真理教を「オタクの連合赤軍」と呼びます。たとえば、連合赤軍は、理想の時代の終焉、極限の代表であったのですが、オウムは虚構の時代の終焉（極限）を代表するような位置を担っています。これは、戦後史を構成する二つの段階の極値を象徴している点に特徴があります。

＊ 理想の時代の現実主義。

これは、アメリカとソ連のことなんですが、理想を表象する覇権国で、これらの理想を標榜する知識人は「進歩派」と呼ばれ、保守派の権力と対抗した。で、この進歩派知識人の代表的論客の一人丸山真男は、『現実』主義の陥穽（かんせい）1957年。丸山の論は理想への志向がそれ自身、現実への志向であることと、言い換えれば、理想は現実の局面であることをよく示しています。見田宗介の注目したことは、全国的な社会心理調査の質問項目なのですが、明治維新以降の百年の日本の近代化の各時期を、色彩にたとえたとすると、何色が適当か、という質問である。それによると、戦争中は「黒」、終戦直後は「灰色」、現在は「ピンク」によって表現されている。今は、ちょうど、平和な時代ということです。同時に、日本近代の流行歌史上の変遷も注目されています。

檜田：それ、何年か言わないと、今のは説明にならないと思いますよ。テキスト、63年か、なんかですよ。

阿部：はい。すみません。言い忘れました。1960年前半のことです。

（丸山も見田も）それぞれが、歴史的なコンテキストの中での位置に注目しています。理想の時代から虚構の時代への転換点は、旧新宗教から新新宗教への転換点と

一致していることがわかる。ですから、新新宗教の転換点と言うのは、オウムが出てきたぐらいが、虚構の時代の転換点になっています。レジュメ 5 ページにあります。理想の時代とは、社会が全体として理想へと疎外されている時代です。このような、時代において、最大の不幸は、理想から永続的に疎外されること、つまり理想との関係において、二重に疎外されることである。真木によると、人が何ものかから、疎外されるのは、まず、その「何ものか」へと疎外されているからである。と述べている。で、旧新宗教が果たしてきた役割は、まさにこのようにして、不幸を解消することによって、理想から疎外された人びとを、理想の圏域へと引き戻すことである。ですから、旧新宗教が、約束する救済は、どうしても、いわゆる「現世利益」でなくては、ならない。ですから、その時代の新興宗教は、理想の時代のスウィーパーとして働いていたといえます。

#### \* 虚構の時代の反現実主義

虚構の時代の黄金期は、1980年代です。で、これをもっとも、象徴しているのが、1983年開園の「(東京)ディズニーランド」です。

この、「(東京)ディズニーランド」が、興行的な成功をしております。これは、日本社会が、虚構(幻想)ただ中に入ったことを示している。ディズニーランドは、ご存じのように、中に入ると、現実を思い出させるような時計もない、塵ひとつない。作り上げられた、虚構の中で一時の虚構、現実を忘れて、虚構を楽しむように作られています。又、新宿から渋谷に、「盛り場」が変わったのですが、渋谷の方が虚構の時代に適合した「盛り場」として存在しています。これは、渋谷は消費社会に適合した「ハイパーリアル」で、オシャレな街ということで、要するに渋谷は、虚構の時代に適合した「盛り場」だったのだ。見田宗介は、「家族ゲーム」について、言及しています。これは、もっとも、生活的で、実体的なものであるという家族でさえもが、ゲーム=虚構と化しつつある風景を、映像化しています。これは、普段は食事は、家族が円形になって囲むものだったのですが、その家族ゲームという映像化では、一直線に並んで、互いに視線も会わさない、それぞれが、それぞれのところを見ている。家族もそういう横並びの関係になってきた、ということを表しています。「虚構」の時代の若者風俗の上での対応物としては、「新人類」であり「オタク」があります。で、新人類というのは、特定の理念や思想にとらわれることなくファッションや趣味などの消費の水準における「記号的な戯れ」によって自己を提示する若者です。オタクはこの新人類から分化、発展してきた若者の類型です。このオタクのキーワードは、「不合理」とか、「過剰」とか、「耽溺」とかがあります。この新人類の特徴を更に言いますと、「理想」の時代を支配していた重い「理想」からの解放を前提にした態度です。ですから、「理想」から解放されたこと、新しい時代が生まれたことがわかるのです。オタクが耽溺する領域は

多くの場合、物語＝虚構の集合です。オタクにとっては、通常の実現よりも、彼らが愛する虚構の世界の方が、より、重要なものになっているように見えています。ですから、現実社会よりも虚構の方が、オタクにとっては、より重要です。新新宗教が、要請されたのは、このような時代においてである。主たる救済の様態も、現世利益から、現世離脱へと転換する。現世＝現実を離脱した志向性は、もちろん、ある種の虚構（霊的世界）へと向けられ、そのことによって、現実と虚構との価値配分が逆転し、虚構の方に圧倒的な重要性が置かれることになる。オウム真理教は、先に述べたように、このような新新宗教の「典型」であった。だれもが、そんなものに、価値を置かないということに、価値をおいてそれにのめり込むということが多かった。そういう若者を反映しています。

#### \*オウムの虚構世界

オウム真理教団が前提にしていた世界は、虚構的であるということは多くの論者によって指摘されてきました。ここに、「コスモクリーナー」というのが出てくるのですが、これは、教団内の建築物に設置されている大型の空気清浄器です。教団の中はきれいなところではありません[これは阿部の主張・榎田による注]。この「コスモクリーナー」によって、教団の中の空気をきれいにしています。これは、後から出てくる毒ガスサリンのこととつながっています。オウムが、自らを国家に擬制している点に、オウム真理教が依拠した虚構の顕著な特徴があります。この特徴には、オウム真理教団が活用した虚構の「虚構性」を強化したことの帰結として、そのような強化に随伴する集団の独特な自閉化のひとつの帰結として、部分的には説明することができるものがある、と著者は述べています。これは、オウム真理教は「出家」という信仰の形態にきわめて高い価値を置いています。これは、閉鎖性という自閉化を、目指したものとして、虚構をさらに自閉化によって、強めることができます。で、オウム真理教団と外部の社会との間の対立は、家族によって、「子どもをとられた」とか、「戻してくれ」と言うトラブルが起こるのは、この「拉致」と「監禁」に関わるものとして現れてきます。

#### ○両方向からの越境

##### \*理想を否定する理想

日本の戦後の半世紀というのが、理想の時代から虚構の時代への転換として、把握しうること、そして、オウム真理教が虚構の時代の先端に登場するような宗教であったこと、これらのことを著者は述べてきました。ここでの問題は、虚構と現実との落差がいかんにして埋められたのか、虚構がいかんにして現実としても機能し得たのか、にあります。理想の時代の末期には、すでに理想の時代の内に包摂するのが困難であるような現象が突出しつつありました。60年安保の運動と60年代末期の

学生運動がそれにあたります。理想の時代の大衆的な表現こそが、高度成長でした。しかし、60年代末期は、高度成長の限界が自覚された段階でもあります。たとえば、「公害」のような社会問題が、このような自覚に対応して認められる。同時に1970年には、理想の時代の最後の祭典の「万国博覧会」が、大阪で開催されています。

理想の時代の末期は、むしろ、理想の時代を否定する運動や感覚によって特徴づけられる。ここで、確認すべきことは、理想の時代はその展開の過程で、むしろ自己否定に導かれていくらしい、ということである。つまり、理想の時代の最終の終了は、自己否定ということなのです。

#### \* 虚構への反転

団塊の世代とは、そこ（連合赤軍事件）までの人生が、ちょうど、日本の「理想の時代」と重なっていた人々であるといってもよいだろう。団塊世代に属する優れた思想家が抱えている共通の課題は、理想を否定しつつ、いかにしてなお、理想を維持するかといったほとんど、解答不能な問いに集約させることができる。思想家の代表的な例の一人として、竹田青嗣を見ることができる。この人は、井上陽水論で、井上陽水の歌を分析しているのですが、陽水の歌は、解答不能な問いに直面している。ということです。どういうことかということ、幻想に固執する理想主義者でもなく、しかし、一切の理想に対して、冷笑的なだけの現実主義者でもない、緊張に満ちた中間的な陽水の立場を竹田は評価する。ですから、陽水の歌の、中間的な理想を否定するのではなく、又、冷笑するのでもなく、理想にちょっと近づいているような、中間的な立場を評価しています。オウムは、連合赤軍とは、全く逆の理由から、つまり、「影」ではなく「世界の終り」に止まる「僕」の気分を肯定する態度の方から、逆説的な反転を被って「世界の終り」に比せられる共同体の外へと出てきたように思えるのです。オウムの悲劇は、「世界の終り」の境界線を挟んで、連合赤軍の悲劇とはまったく反対側に位置しているのではないか、ということです。オウムと連合赤軍は、

檜田：特に名前を出さずに、こういう形で、要約されても、無理なんじゃないかなあと思うんですけど。

阿部：最初の方に

檜田：いえいえ、だって、「世界の終り」って、何のことだかわかんないじゃないですか。

『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』の作品を先に紹介しないと。

阿部：はい。すみません。そうですね。村上春樹を先に紹介しないと、わからないですね。最初のレジメのところの。7ページのレジメにあります。『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』ということで、これは、理想の時代の困難や限界を乗り越え、村上春樹の小説で、『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』、この物語の、主人公の『僕』は、『世界の終り』と名付けられた、壁に囲われた閉

鎖的な共同体に住んでいて、この閉鎖的な共同体は、『国家』とかを想起させます。

『世界の終り』では、すべての住民が、「影」—これは、「自我」や「心」の象徴である—を切り離された状態で生きている。それは、幼い頃からの成長を通じて獲得された「自己の規範化された理想」によって規定される、個人の内的な原理です。物語の結末において、「僕」は、「影」の説得を拒否して、「世界の終り」に留まることを選択するのである。オウムは、連合赤軍とはまったく逆の理由から、つまり「影」ではなく、「世界の終り」に止まる「僕」の気分を肯定する態度の方から、逆説的な反転を被って「世界の終り」に比せられる共同体の外へと出てきたように思えるのです。ですから、連合赤軍の方は、オウムと全然別なのですから、オウム教団は、彼らの閉鎖的な共同体の外に出て、攻撃的なテロリズムを敢行しました。

榎田：そうですね。何か、中身に入っちゃってますけれども。竹田青嗣によればですねえ。連合赤軍は、理想に負けたって書いてあるわけですよ。 「影」っていうのが理想の訳でしょ。理想に負けちゃって、村上春樹ならば、「世界の終り」にとどまったところを、連合赤軍はとどまらずに、一緒に外に出て行ってしまったっていうのが悲劇だったって書いてあるわけです。

阿部：オウムが外に出たのでは。

榎田：うん。オウムが外に出たのは、外の方が「世界の終り」だから。連合赤軍の話においても、「ハードボイルド・ワンダーランド」においても、囲いの中、あれっ、たしか、囲いの中が『世界の終り』なんですよ。

阿部：囲いの外が、「世界の終り」なんじゃないでしょうか。

榎田：えーと、囲いの外が、「世界の終り」なのは、えーと、オウムにおいてですよ。ええ、世直しなわけですよ。サリンは。

阿部：連合赤軍は、自分の中に囲い込んだ。

榎田：ちがう、ちがう。連合赤軍も世直しなわけ。オウムも世直しなわけ。連合赤軍は、現実主義的な世直しで、オウムは虚構主義的な世直しだっていう、そういう（一次的なものからするとそうなっているという）。

そうすると、阿部さんが、オウムに対して近しいと大澤さんを、その、非難するのは、どうかなあと言う気がするのですよ。大変冷たい見方に見えるんですけどね。

阿部：私が。

榎田：ちがう、ちがう。大澤さんがオウムに対して。

阿部：どちらかといえば、連合赤軍が、

榎田：連合赤軍に、心情的にだと、哀惜感を伴った評価をしていると、僕には見えますけど。つまり、理想を目指して、外に出たところを、その、理想が抑圧的だったのために、内ゲバにならざるをえなかったっていう話なんですよ。で、それをうけて1973年以降の政治思想が存在するっていう話。「僕」とか「世界の終り」っていう話は、その前に、村上春樹を説明しなくては、無理でないでしょうかっていうこ

と。中身については言及するつもりはなかったんですけど。

阿部：すみません。説明不足でした。先に、村上春樹を説明すべきでした。それでは、次いきます。

#### \* 哲学的レッスン

ここで、主張しておきたいことは、第一に団塊の世代の最も良質な代表者たちが、試みたことは、理想の、理想としての有り様を単純に放棄したり拒否することではなく、まさに理想の理想性に固執し、それを徹底させることであったということ。第二にそのような徹底によって、理想は自己否定へと導かれほとんど虚構に近いものとして再生するという。この「理想への志向」が、「虚構への志向」へと反転する。現実には、常に必然的に虚構が入っている。廣松は、どのような現実も必ず、意味を帯びたものとして現前するという。つまり、現実には〈虚構〉が張りつくとき、それ自身としては、たえず生成・変化し、また、どこまでも確定的な区別もなく拡がる現象が、固定的で、周囲から一義的に区別された物体のように現れることとなります。最初、我々は、現実と虚構を対立させたが、しかし、それ自体をもう少し精細に眺めることによって、両者が差異を保ちつつ、不可分の関係にあることを確認することができます。現実と虚構のこのような複雑な関係は、ずっと後の考察にとって重要な意味をもつこととなります。ともあれ、ここでは、哲学的な考察を一旦脇において、虚構へと反転した理想（現実）が、さらにどのような変化を被るかをおとづけていくことにします。

#### \* 反対方向の反転

連合赤軍は、理想から、虚構への反転を象徴している。虚構の時代も、その内部に、自己自身を否定するような段階を含んでおりました。われわれは、そうとは余り強く自覚することなくすでにこの否定の段階に入ったのではないか、ということです。で、教団のメンバーは、20歳代から30歳代後半の人が多く、この教団は、オウム真理教団は、麻原彰晃なしではとうてい成り立つまいと言われていました。でも、この教団の中では、メンバーは、すごく若い人ばかりで、麻原のみが、「理想の時代」に内属していると見なしうるような諸属性を有している。もう少し、厳重に言い換えれば、理想の時代が不可避に孕まざるをえないような影の部分を想起させる諸属性を、麻原彰晃は担っているように見えるのです。虚構が徹底されたとき、メビウスの帯のような回路を通じて、理想＝現実へと再反転してくるのではないか、という仮説を提起してきました。終末として提起されたときに、虚構が理想として機能することができるのはなぜか？というような疑問が出てきます。このことを説明しなくてはならないと著者は言っています。



## ○終末論という倒錯

### \* 終末論の氾濫

これは、また、村上春樹が出てくるのですが、団塊の世代に属する村上春樹が著した「世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド」は、彼が「理想の時代」の困難や限界を乗り越えてきた、ということを証するものだったと言えます。虚構の時代の新宗教、つまり新新宗教において、破局的な終末への危機感を表明するものが圧倒的に増大していること、しかも、新新宗教が予期する終末は切迫の程度が高いこと、これらのことに注目しておかなくてはならない。

ここで、確認しておきたいことは、世界の終末を想定しているということは、オウム真理教の固有の特徴ではない。終末論的な世界観は、かなりの数の新新宗教によって、共有されている。それゆえ、終末論が説得力を持ちえた社会学的理由を、われわれは、オウム真理教に固有の事情に求めるべきではなく、新新宗教を興隆させた社会的文脈の内に探さなくてはならない。その「社会的文脈」とは何か。それは、「虚構の時代」とここで名付けてきた社会と意識の編成である。と著者は言っています。

世界の終末を想定しているっていうことは、オウム真理教に固有の特徴ではなく、他にも、いろんな宗教があり、世界の終末を想定しています。その元となっているのは、ノストラダムスの『大予言』です。これがブームの一端になっています。比較的新しい作品としては、『美少女戦士セーラームーン』等も、最終戦争的な戦争を戦う戦士を描いていると見ることができる。『セーラームーン』は、主人公の戦士が普通の女子中学生・高校生であるという点で、注目に値する。この作品は、オウム真理教よりも新しいので、その教義や世界観に影響を与えている可能性はまったくない。しかし、それにもかかわらずこの作品は、最終戦争以外にも「オウムの要素」をいくつも備えている。転生、前世の関係を根拠にした無意識の連帯、「ホーリー・ネーム」等。新新宗教の終末観とサブカルチャーの終末観は、明らかに同時代的な現象として共振しているということが言えます。この、サブカルチャーの終末論的な想像力を示すものとしては、『宇宙戦艦ヤマト』、『風の谷のナウシカ』、『アキラ』等のマンガやアニメーションが代表的なものであります。

### \* オウム真理教の終末論

阿部：そもそも、オウム真理教が予期している終末は終末論を有する他の諸宗教の終末のヴィジョンと比較して、破滅的であり、要するに「暗い」。対馬路人は、オウム真理教が描く終末と大本教が描く終末とを比較すると、オウムの場合には圧倒的に悲観の方に傾いていることがわかる、と論じている。最終戦争の直後に到来する終末の時は、一般に究極の救済の時でもある。そして、一般に終末の予想は、救済の希望と結託している。オウム真理教に関して言えば、未来社会についてのこれらの構想は内容的に

は非常に貧困で具体的なヴィジョンを欠いている、ということが、特に注目されるのである。

オウム真理教においては、無意識の内に真に欲望されているものは、まず第一に、世界を全的に否定する破局そのもの、つまり、最終戦争ではないか、こう推測せざるをえないのです。翻って考えてみると、終末論を唱える他の新新宗教においても、あるいはまた終末のヴィジョンを描く同時代のサブカルチャーにしても、オウムほどには明白ではないにせよ、終末論が真に指向していることは、終末期の完全な秩序よりもまずは、世界そのものを終末へと導く破局ではないか、たとえば、『アキラ』というアニメですが、アキラという少年の、世界を破滅に導きかねない破壊的な超能力を封じ込めるために、そしてまた、アキラの超能力を悪用しようとするものを滅ぼすために、主人公たちは戦っています。しかし、この戦争において主人公たちが賭けている積極的な構想や価値はほとんど何もなく、つまり、主人公たちがどのような社会や共同性を実現しようとしているのかというヴィジョンはほとんど明らかにされず、マンガはただ戦争の過程だけを生き活きと描くのである。このマンガが第一に欲しているのは、理想化された共同の秩序ではなく、戦争そのものであると言うべきであろう。ここで、われわれがたてた仮説をもういちど、考えて見ると、われわれの仮説は、虚構の時代を支配する『虚構』を、極限にまで純化していった場合に、その「虚構」は、それ自身、「理想」として機能するようなものにまで反転していくのではないか、というものであった。しかし、虚構から反転してきた理想は、もともとあった理想—理想の時代の理想—とは全く異なったものになるらしい。それは、かつてだったら、どのような思想、イデオロギー、規範の下でも、決して理想化されえなかったような可能世界だからである。しかし、それにしても、虚構の時代の果てで、極端な否定のみが、理想たりえたのは、一体どうしてなのだろうか。

#### \* 近代的な時間

第二次世界大戦中に、まだ「核兵器」の威力が現実化する前の段階で、ボーヴォワールという人が、こう、言っています。「人類が消滅するであろうなどとわれわれが断言するのを、何ものといえども許しません。人おのおのは死にますが、人類は死ぬべきではないことをわれわれは知っています。」

真木悠介は、『時間の比較社会学』の冒頭で、ボーヴォワールのこの言葉を分析しています。どのように分析したかという、近代社会の時間意識を代表するものとして分析しています。「理想」というものは、時間に対する近代的態度—つまり、営みの価値をその未来における結果において評価する態度—の中で、機能する。ということは、行為の価値を未来（目的）との相関で評価することが意味をもつためには、行為が準拠する単位（ユニット）が—つまり行為が誰（何）のためのものとして選択されているかというときに、志向されている単位が—、どのような

未来においても、同一性を保持し、永続していなくてはならない。ボーヴォワールは、そのような単位として「人類」を措定したのである。ですから、いつも、同一性でつづいていかななくてはならない。ということは、「理想」とかそういうことは、永続していくためには、「時間が永続的な」ものであるということを確認しておかななくてはなりません。ですから、近代社会は決して終わらない時間を、要請せざるをえない。で、オウムの破局的な終末論は、近代的な時間の構成から見ればとてつもない倒錯であるといわざるをえない。絶対の終わりを想定するこのような終末論は、近代的な時間—決して終わらない時間—とは正反対の位置に置かれるはずである。われわれは、近代的な時間が、永続的な未来を想定せざるをえない必然性を見ておいた。では、なぜ、現代のある種の新新宗教は、また、サブカルチャーは—しばしば潜在的な無意識の欲望の水準においてではあるが—未来の絶対的な断絶を求めなくてはならなかったのだろうか。それでは、ここまでが二章の発表です。二章のコメントはありません。以下は、三章のコメントです。

樫田：何がおきているのですか。

阿部：二章のコメントをつけ忘れていました。ここに書いてあるコメントは、三章のものです。

樫田：そうですか。わかりました。

### ■第三章 サリンという身体

#### ○毒ガスの恐怖

##### \* サリンの恐怖

阿部：それでは、第三章の要約にいきます。第三章の要約は、なぜ、彼らは、毒ガスサリンを生成し使用しなければならなかったか。オウムの身体観、家族観、極限的なコミュニケーションについての特徴性、その宗教との相違点についてみていきます。それでは、第三章、毒ガスの恐怖。サリンの恐怖。

サリンを撒いたのも教団でしたが、サリンを恐れていたのも教団でした。同時に彼らは、攻撃の武器としても、サリンやVX等の毒ガス兵器に必要以上に拘泥していたように見える。毒ガスへの不合理なまでの拘泥は、毒ガスの内に彼らの宗教性の根幹に触れる何かが、表象されていた可能性を、示唆していないだろうか。で、サリンの特徴があるのですが、これは、気体であって、身体の内部に侵入し充満してしまう。そういう特徴が、サリンの恐怖というのをよけいに増長しています。

##### \* 腐海を護るオーム

これは、宮崎駿の『風の谷のナウシカ』で、これはオウムとの類似性が強くあって、『ナウシカ』の世界観とオウムの「劇画」的なそれとの類似性は、オウムの「サブカルチャー」的な文脈を強調する何人かの論者によって、すでに指摘されている。

ここで、注目しておきたいことは、まさにその「腐海の秘密」である。腐海は、毒ガスの発生源ですが、やがて、その腐海の植物こそが毒ガスを浄化する作用をもっていることが発見される。で、風と毒ガスの通底性では、腐海には、毒であることと、清浄であることとの際どい二重性が与えられている。飛行機が墜落しかけて、取り乱している部下たちを安心させるために、ほんの瞬間であるが、腐海の毒ガスの中をマスクもつけずに、堂々と「メーヴェ」で、ナウシカが飛んで見せる場面で、あからさまに示されている。『王蟲』は、脱皮を繰り返して、小山ほどの大きさにまで成長するのだが、通常の昆虫のように変態することがなく、幼虫の形態を保ったまま成長してしまう。物語は王蟲とナウシカの神秘的な繋がりを何度も強調している。ナウシカだけが、非言語的な直接的感応を通じて、王蟲とコミュニケーションすることができる。ナウシカは何度か王蟲の危機を救い、そして王蟲もまた、何度もナウシカを救う。そのようなつながりがあります。

## ○極限的な直接性

### \*浮遊する身体

『風の谷のナウシカ』は、風に乗って、飛翔することへの強烈な憧れに貫かれている。これは、オウム信者の超能力への願望に通じるものがある。オウムの超能力の原点が「空中浮揚」であったということがこのことを示している。でも、この空中浮揚というのは、局所性の克服の方法としてはまだまだ不完全なものです。しかし、オウムに共感し参加する者たちの原初的な欲望がどこに向けられているのか、ということを示している。

身体が、この現実世界において有する局所性——身体が「今・ここ」にあるということ——を克服すること。これは、遠くで麻原をみた信者が、麻原に問いかけても知らん顔をして、行ってしまいますが、麻原は、そこで、いなくて、違うところにいた、というようなことです。局所性を克服する技術になるであろうと推測される「空中浮揚」の完成度をもう少しあげるのは、「体外離脱」であったり、「変化身」であったり、「ワープ」であったりします。ちなみに、オウム真理教と同時代的に流行したマンガやアニメーションが描く「超能力」の最も素朴な形態も、しばしば、身体の局所性を克服する技術である。たとえば、「ワープ」と呼ばれる技術——空間の屈曲を利用して言わば途中を省力することによって、移動すること——は、『宇宙戦艦ヤマト』を通じて非常に広く知られるようになった。

### \*身体の微分

局所性を真に克服するためには、個体という身体の粗大なまとまりを解消しなくてはならない。ということで、身体をどこまでも、小さく小さくどこまでも微分し、そのことによって、外界との境界を融解させてしまわなくてはならない。というこ

とで、ここに「ダウティ」という初歩的な修行があります。これは、細長い清潔な布を口から腹中に入れて、再び引き出す修行です。これは、皮膚的な界面の内側にまで、布を入れ腹中の汚れをかき出すことで、個体を区画する境界の恣意性を実感させる効果をもっています。それは、身体の個体的なまとまりを解除することを指向しています。身体を微分していく修行の徹底ということですが、ついには、自らの身体を、内外に開かれた流体や気体（風）として、あるいは、エネルギーの波動や光のようなものとして、実感しうるまでになるだろう。ということで、「クンダリーニ」は、バイオコスミックなエネルギーである。解脱というのは、「クンダリーニ」の境位を実感しうるほどに、自己の身体を融解させるならば、やがて、当然、個体の内に閉じこめられていた「自我」は、粉碎されることになるだろう。ということで、麻原彰晃は、1986年7月にヒマラヤで、「最終解脱」の境地を獲得したと豪語していた。あとで、出て来るんですが、石井久子は、修業で得られた「光の体験」について語っています。というのは、解脱をめざす修業を通じて、微細な粒子や気体の波動、あるいは、光によって、構成された体験をすることが、できるようになるというひとつの例であります。

#### \*身体の「ここ」性と「そこ」性

周囲から遮断された窓のない真っ暗な部屋で長時間こもりつきりになって瞑想する修行、つまり、独房修行を解脱へのステップに取り入れたところは、オウム真理教の完全にユニークな特徴だと指摘されている。ミシェル・フーコーは、独特な工学的な設備の元にある独房（監獄）を、近代的な権力の形象化ととらえていました。

「パノプティコン」という監獄があつて、どこからも、本人はみえないですけど、どこからも、みえているようで、監視されているように思い、自分が、自己を統制するようになる。オウムの修行では逆の効果があつた。オウムの独房には、全く穴がない。この閉鎖性がかえって、他者へと開かれて行くような構成を備えているのである。オウムの修行は、身体を流体や気体、あるいは、エネルギーの波動のようなものにまで変容させることを志向している。それは、身体の局所性の、つまり、身体の「ここ」性の克服を核におくものだった。言い換えれば、身体が「ここ」にあり、かつ、「そこ」にあるとでも、表現するほかないような、状態を可能にする。このような云い方に最も、適合的なのが、体外離脱の場合である。大澤の指摘が二点ある。第一に〈他者〉は、共同体のどのような共同主観化された規範によっても、決して、妥当なものとして承認されることがない経験となるはずだ。規範の適用は、身体の最小限の自己同一性を前提にしているはずだが、自己性が他者性へと、通底するような関係性においては、身体はどこまでも差異へと解体し、決して自己同一性を確保することがないからである。しかしながら、それにもかかわらず、第二に、われわれが他者（他人）が存在しているという事実を自明のこととして生きているのだとすれば、我々自身も皆、その〈他者〉という境位（自己性と他者性の圧縮）

を、そうと自覚することなく実践の上では前提にしているはずである。

#### \* 極限的に直接的なコミュニケーション

身体をクンダリーニーの境位にまで変容させるならば、自己でありつつ、他者に内在していることを、つまり、〈他者〉を実感できるに違いない。あるいは、自己であることと他者であることの圧縮を技術的に触発することによって、「解脱」への歩みが促進されているように見えるのである。このような自己の他者への内在は、通常のコミュニケーションを否定する。極限的に直接的なコミュニケーションの様相を呈するだろう。ここで、極限的に直接的なコミュニケーションというのは、どういうコミュニケーションかというと言語とか、そういうふうな第三項の媒介を必要としないコミュニケーションである。すなわち、コミュニケーションの極限的な直接性とは、自我としての同一性の意識に訴えることなく、したがって、言語という媒介を経由せずに、そして、ときには、時空的な距離すらも越えて、〈他者〉の身体（の志向的な作用）に直接に感応＝共鳴することによって得られる、コミュニケーションの様態である。絶対的に信頼しうる他者がいるならば、一切の判断をその他者に委ねることが可能ならば、さしあたって、比較的容易に「自我」を空虚化することができるに違いない。

#### \* シャクティパット

麻原の身体との極限的に直接的なコミュニケーションを、技法化したものが、彼らの言うイニシエーションである。そして、あらゆるイニシエーションの原型は、シャクティ・パットという技術である。シャクティ・パットというのは、両目と額の中間にある弟子の「第三の眼」に、師（グル）が、親指をあて、自らの霊的なエネルギーを注ぎ込むイニシエーションであって、それを行うことによって、師は異様な消耗を伴います。麻原は、シャクティ・パットについて、「私自身が自分で“これだ”と思っている「超能力」であり、「日本でこれができるのはおそらく私一人だけだろう」と自負している。シャクティパットは、永沢哲が論じているように、第三者の眼から見れば、波動と化した身体の共鳴現象の一種であると解することができる。このシャクティ・パットの代替物の中で、最も顕著なものが、信者たちによって、PSIと呼ばれていたヘッドギアである。このヘッドギアは事件後、オウム信者の象徴と見なされるほどにまでに、有名になった。トップクラスの幹部を別にすると子どもを含むほとんどの出家信者がこれを装着していたからである。PSIは、師（グル）の身体の波動（脳波）を、電子的な方法で直接に弟子の身体に伝送してしまおうとする装置である。「波動」としての、身体の中の「共鳴」として客観的には記述しうる極限的に直接的なコミュニケーションは、他者との最も原初的な関係性に属するものである。

#### ○ 家族の無化

##### \* イエスの方舟

「イエスの方舟」の指導者である千石剛賢が、オウム真理教を激しく批判しています。それは、アーナンダ井上の言葉に向けられました。アーナンダ井上は、オウム真理教団の中でも特に人望があり、きわめて多数の信者の勧誘に成功しています。どういうことであるかという、井上嘉浩は、尊師の命令であれば、たとえ、親であっても、殺すことができると語っているのである。それに対して、千石は、親を殺すとはとんでもないことであり、そのようなことを言う者は、必ず、地獄に堕ちるだろう、と非難します。方舟とオウムでは、方舟もかつて、社会的に糾弾されていまして、オウムと同じような批判を浴びたことがあります。簡単に整理すれば、方舟とオウムでは、自己と他者を設定するときのベクトルが逆になっています。たとえば、方舟では、還元不可能な最小限の内容をもった自己の同一性が与えられていることが、まず、前提になっており、そこからの類推や拡張として、他者に到達しようとする。だから、方舟の方は、自己愛もあるし他者愛もある。仲良しクラブであり、かつ利己的なものの集まりでもあるが、その人のアイデンティティを認める。オウムの場合は逆であった。オウムは、方舟と違い起点が他者の方にある。だから、自己がそのまま他者化しなくてはならない。そのためには、原理的には、自己のあらゆる同一性の内実がたとえばごく素朴な欲求とか、利害関心すらもが否定されなくてはならず、そのことを通じて、自己が過激に空無化されなくてはならない。要するに、オウムが獲得を目指していた〈他者〉性の水準への指向を、方舟は全く持たないのだ。オウムと方舟との違いは、端的には、超能力への志向の有無の内に現れている。方舟には、超能力を得たいという願望は全く見られない。それに対して、オウムの信者は、超能力への強い欲求をもって、集まってきている。方舟の方は、他者の中で、自分を見る境地に到達しなければならないというように考えています。端的に言うと、方舟は仲良しクラブであって、かつ利己的な者の集まりである。オウムはその反対で、仲良しクラブでもない。利己的なものは、一切排除されている。そういうことです。

#### \*家族性の肯定

方舟にもオウムにも、信者がそれまで内属してきた家族的な関係性を否定する潜勢力がある。しかし、方舟の場合は、家族の否定は根源的なものではないですが、千石イエスは、家族的な関係を否定するのではなく、よい関係の究極のモデルとして肯定しています。千石イエスの場合は、疑似家族みたいな感じです。千石自身が、父親のように働いて会員は、信者は、千石のことを「おっちゃん」と呼んでいます。麻原とか、幸福の科学、そんなのは、そういう父親的な感じではなくて、ブッダの生まれ変わりとか、そういう風な感じのヒエラルヒー（構造）があります。家族とは何か、問題になるのですが、家族とは、人間が形成する集団の中で自生性の程度が最も高く、かつ最も一般に見出される集団の形態なのである。家族とは何か？というところで、第一に留意すべきことは、どのような人間にとっても、広義の一養

育者を含む集団という意味での一家族は自ら自身の選択に先立って、与えられるものであり、彼または、彼女は、さしあたって、これを受け入れるほかはない、ということである。第二に家族は、個人の生存にとって、最も緊要な集団であり、それなしにどのような社会の形態も考えられない、ということです。というような二つのことが考えられます。イエスの方舟と連合赤軍との比較なのですが、オウム真理教のポジションを理解するための参照軸を与えるために、そういう比較をするのは有益なことであろうということです。で、方舟は、身体に直接に現象するような、性質に関しては、これを自然なものとして受動的に受け入れる傾向が支配的である。たとえば、女性性の問題なのですが女性性を逃れてやってくる信者もあるのですが、この女性性というのを認めてあげることによって、アイデンティティの一貫性の確保をするのですが、連合赤軍の場合ですと、この女性性の否定を過激にするような方向に作用しています。たとえば、永田洋子は、女性性を否定することによって、はからずも自分の女性性をあらわにしてしまうことがあります。連合赤軍が、この種の性質を、革命の「理想＝大義」を準拠にして偶有的なもののみなし、能動的＝選択的＝人為的に克服しようとする。その悲劇的な帰結が「総括」という名の私的な死刑である。千石＝方舟のやり方は、村上の『世界の終わり』における、「影」の正しさを拒否し自らの気分に従った「僕」の行為に連なるものだと言える。家族を試金石として置いてみれば、方舟はこれを究極的には肯定し、連合赤軍は意識的な努力によってこれを無化しようとするだろうというのが、大澤の主張です。

#### \*家族の根源的否定

オウムの家族否定は、イエスの方舟の場合と異なり、根源的なものである。オウムは、特定の家族だけではなく、家族的な関係性そのものをもはや基礎的なものとは見なしていないのだ。麻原の命令であれば、親でも殺せる、という井上嘉浩の言葉は、ここから出てくるものであり、千石の批判は、オウムのこのような「家族の根源的な否定」に、彼が同調できなかったことに由来している。オウムが、家族を拒否する理由は、この教団の信仰世界の中では、先に述べた「極限的に直接的なコミュニケーション」、これは PSI のようなものを言いますが、「極限的に直接的なコミュニケーション」のみが、本質的なものと見なされるというところに特徴があります。オウムと連合赤軍は、まったく反対の位置に立っていて家族を否定していることがわかります。連合赤軍が、家族を否定するのは、家族の自生的な性格を主体的に選択された関係に服させようとしているからであり、近代主義的なものである。他方、オウムは自生的なものとして現れる家族を、より一層、自然で原初的な関係へと還元しようとしているのであり、言わば、原始主義的なものである。というような違いがあります。だから、方舟の家族（性）の肯定を挟んで、連合赤軍とオウムの二つの反家族的な志向が対照的な位置を占めるという構図を得ることができる。整理すると、連合赤軍の「身体否定」が一方の端にあり、中間に方舟の「身体



消極的な肯定（受容）」があって、他方の端にオウムの「身体の過激な肯定」がある、という布置を得ることができるだろう。

#### \* 家族否定の歴史的文脈

家族をまったく偶有的なものとして受け取るこのようなオウム真理教の態度は、もう少し広い文脈の中で、たとえば、「日本の家族の戦後史」や、さらに「家族の近代史」の中で理解しておく必要があります。戦後史の中で、一貫して擁護され強化されてきたのは、穏やかな意味における「個人主義」的な価値観であると言えるだろう。で、これは、宗教史に反映されていますが、ごく大雑把に図式化すると、現実の親子関係の特徴や祖先崇拝を教義の核に置く宗教から、イエスの方舟のような現実の親子関係ではなく、理念化された親子関係を規範化する宗教を間に挟み、オウムに代表される親子関係や家族を否定する宗教へと展開してきた、と整理することができるだろう。森岡清美によれば、かつての新宗教は、内部の関係を「親子」の比喻で捉え、組織をその親子関係の積み重ねとして理解していた。だが、創価学会や立正佼成会のような地域ブロック制を敷いた、1960年代の大教団は、この「親子モデル」に代えて、「なかまー官僚制連結モデル」を実現した。それは、地域ブロックごとに、信者を企業のような業務遂行型の組織に統合していく方法である。島藺進は、これを受けてさらに70年代以降の新新宗教においては、「業務遂行組織ー消費者接合モデル」が現れた、と述べている。最初、個々の信者は、消費者として教団に接し、そこから、サービスを受けるが、それ以上熱心な信者になると、業務遂行型の官僚組織に取り込まれるというわけだ。以上の推移は、教団の組織が、次第に家族的なものから遊離してくる過程を示していると言える。家族を含む伝統的な自生的集団に対するこのような徹底した否定の身振りに類似したものを、歴史の中に求めるとすれば、たとえば、われわれは、ポール・ポトの民主カンブチアを見出すことができる。ポール・ポトは、地域的なコミュニティや家族、そしてそれにともなう一切の文化といったあらゆるカンボジアの伝統を一旦解体し、これを貨幣ももたない原始的な共同体に再組織しようとした。よく知られているように、ポール・ポトは、都市の住民を農村に強制移住させる。つまり、自生的に成長してきたコミュニティを強引に解体させてしまうのである。ポール・ポトの不安というのは、ポール・ポトが政権の座にあった1976年末の演説からも読み取れる。ポール・ポトの政策がもたらした悲惨さは、彼の演説が表明しているような強迫観念によって規定されている。そこでは、「細菌」への恐怖を語っている。ここで「細菌」として指示されているのは、彼らの社会の中に深く侵入していると考えられていた「敵」、「裏切り者」、「スパイ」のことである。これらに対する恐れから、友人や学者を次々と殺してしまう信じがたいほどの規模の粛清と、ベトナム（これが細菌の送り先と見なされたから）との戦争が、引き起こされたのだ。ところで、これは、オウムの《他者》への恐怖と同じ種類のものである。ポール・ポトが「細菌」と呼んだものを、オ

ウムは「毒ガス」の比喻で捉えたのだ。

## ○クンダリーニー＝サリン

\*クンダリーニー＝サリン

オウムは家族を、最も原初的な関係性の方へと向けて解体する。このような関係性への感受性は、彼らが追求していた身体の様態に規定されたものであった。あらためて整理しておけば、オウムが修行を通じて獲得しようとした身体は、相互に関係する二つの契機によって、特徴づけることができる。オウムがサリン等の毒ガス兵器に不合理なまでに、拘泥したのは、それが彼らが熱烈に希求していた身体とまさしく同じものだったからではないでしょうか。秋山英俊が、千葉大学文学部に提出した論文がある。秋山論文の中に、公開でなされた「水中エアー・タイト・サマディ」とは、周囲を水に覆われた完全密閉の空間で、通常ならば、酸素欠乏で死んでしまうほどの期間を瞑想して過ごすことです。これに、成功するという事は、呼吸・飲食・排泄等の肉体の機能を完全に停止させた、完全なサマディ（究極の瞑想状態）にあることを証明するものであると考えられています。88年の三月から五月にかけて、三回、麻原彰晃と石井久子が、この水中エアー・タイト・サマディを公開で試みようとしている。だが、公開実験は、三回とも中止される。興味深いのはその理由である。第一回目の中止理由は、水が内側の水槽へと（あるいは装置の外へと）漏れている、ということでした。二回目は漏れている物質が、水から有毒ガスに変わる。有毒ガスが発生しているということは、麻原彰晃自身が指摘したことらしい。そして三回目もまた有毒ガスの発生が理由で中止される。この反復が示唆していることは、身体を究極の境地へと差し向けようとする、その度に、執拗に、無意識の内にそれが毒ガスと連合してしまう、ということである。修行によって得られる身体と毒ガスとの結びつきは、信者たちによっても、わずかながら、しかし、反転した形で自覚されてもいる。つまり、身体が究極の境地に漸近するとき、毒素が排出物のようなものとして発生すると考えられているようです。

\*サイバーパンクの想像力

「サリン」への恐怖を糸口にして導出した身体と同じ形式の分裂を、電子メディアや電磁波に対する彼らの想像力を手がかりにして剔出することもできる。PSIの使用に見ることができるように、電磁波には、彼らが獲得を目指している身体の様態が、つまり、直接的コミュニケーションを通じて共鳴する身体の様態が投影されている。マスコミによる情報伝達の方法は、とりわけテレビやラジオの電波を通じた情報伝達の方法は、師の身体の波動を電子的な方法で弟子の身体に直接に伝送するというサイバーパンク的な構成の、薄められてはいるが大規模化された再現として、受け取られうるものである。電子的なものへのこの種の過信は、オウムに限らず、新新宗教的な運動にしばしば見出されるものである。典型的なのは、ESP研究所であり、ここでは信者の信仰生活のすべてが、ただ主宰者である「石井普雄先生」から発散

される超念力を「ESP シール」や「エスパー・テープ」などの超念力グッズあるいは、電話を使って遠隔地で受け取ることに尽きている。超念力が、電磁波に隠喩を求められる何かであることは間違いない。しかし、他方で電子メディアやマスコミは、拒否すべき否定性の代表ともみなされているのだ。麻原彰晃とオウム真理教の思想と実践の困難を—その可能性を極限的に拡張した上で—真摯に問うならば、結局、ここまでまさに論じてきたことに、つまり、同じ身体が敵対的な二つの相に引き裂かれざるをえなかったということに、あったと見るべきではないか。彼らが敵対し戦争を通じて排除しようとした《他者》は、彼ら自身の身体の内的な異和なのだ。彼らが分離した二つの相—クンダリーニーとサリニー—は本当は、身体の同じ水準に属しているのではないか？もし、これら二つの相が本来同じものであるならば、これを敵対的なものとして分極化するのではなく、まさにその本来性に従って、全的に抱擁することができたはずではないか？というのが、大澤の主張であり、大澤は、身体の同じ状態が敵対的なものへと分極化していったのは、なぜだろうか？という疑問を呈している。

阿部：これで、三章のテキスト発表を終わります。

三章のコメントでは、身体の間取り扱われ方が、家族の間取り扱われ方については、オウムの家族観が、現在の人々の家族観にも通じるものとして受け止められるのではないのでしょうか。穏やかな個人主義の延長として。このテキストの全体をとおしての、問題関心とコメントですが。

檜田：三章のコメントで読まなかったところは、読まなくて良いのですか。

阿部：いいえ、読みます。三章のコメントです。レジュメ7ページの下から2つのかたまりです。

#### \*三章のコメント

直接的なコミュニケーションとか、家族のことに関しては、オウムのことだけではなく、現代社会の変化も背景に読み解くことができると考えます。家族のことを、サマナのことが、出てきたのですが、家族のことを完全に忘れられる人ばかりでなかったことに、注目することができます。これはオウムという組織の意向と個人の考えの違いがあります。次に、本の全体をとおしての問題関心とコメントです。レジュメ12ページです。このテキストには、注がなかったのに注があったら、もっと読みやすかったのではないかと思いましたが、意図的につけなかったのでしょうか。あとがきにも書かれていましたが、オウムの人たちに親近感を持っていると、私が、著者のことを言ったのですが、さっき檜田先生がおっしゃったので、そういうことはないということがわかりました。

檜田：いいえ、そういうことは、あるんです。あるんですけど、肩入れしているわけじゃなくって私たちの似姿がそうだっていうことを主張したのです。

阿部：はい、そうですね。本の紹介に、冒険的論考というのは、ちょっとあぶない論考か

なという感じで、受け止めていたのですが、ここの社会学と読むことができれば、読むことができるのですが、冒険的になってというのが宗教を扱っているからってというような視点も入っているのかなと思っています。冒険的論考について、又、わかっている方がいれば、教えていただきたいのですが。少し、無理なことでも、考察をしていくってということは、それをすることによって、メリットとか、デメリットとか、気をつけることとかで、宗教論と言うよりも、自我論的な要素の強いものでなかったかと思います。大変、難しい本でしたが、自分の中でのオウム的なものを、見つけ出すことは、まだ難しいです。まだ、オウムと自分の間には、まだ、距離があるということにしておきたい気がするのですが、中の本文にもありましたように、やはり、自分が批判しているものが、自分自身というような感じの、そういう面では、この本は、色々考える機会を与えてくれました。オウムを通して、自分や現代社会を改めてみることはできたのかと思います。オウムに特徴的なものが、果たして本当に特徴的なものであるのかという視点を持つことも必要なのではないかと思います。参考文献は、ちょっと、関心があったので、少し、本を集めてみたのですが、1番の高橋英俊という人は、本当に出家していた人で、オウムの内情とか、自分がオウムにどういう経過で入って、どういうことをしていたかという、若者論というような感じで読んでも、よいのではないのでしょうか。2番、島菌進さんは、「消費される宗教」っていうことで、これも、オウムの中でも、ITとか、電子の情報化ってというのが、そういうのが出てきたのですけども。このテキストも、そういう風な情報化にあらわれるべくして、あらわれるっていう。次に、大谷善吉さんっていう人は、「構築される身体」っていうことで、どのように宗教を語るることができるかっていう語りの部分で、若手研究者による、生きた宗教伝承の活動の記録という、現代社会という鏡にさまざまな形で、映し出される宗教を、言葉で語るための、力を手に入れようとしている。で、この『大航海』という本は、宗教戦争として、関連があるかなと思って持ってきたのですが、内容的には、イスラエルとか、国がいつぱい出てきて、その国の戦争のことを書いているので、直接、関係はなかったです。ここの、資料の中に、B5の資料は、「構築される身体」の大谷善吉さんの『用語解説』というものが載っていたので、ちょっと、宗教の用語で、役に立つかなって感じなんです。それと、島菌は、この本の中にも出ているんですが宗教の中で出ているんですが、私がこの間参加した〇〇大学のパーソンズの研究会で、「宗教の進化をどうみるか」ということを発表されているので、今日の発表とは、関係ないのですが一番最後の表なのですけれども、理解宗教から、古代、近代、現代という表になっていますので、それは、このテキストの中でも少し、話されていたことですが、最初は、儀礼、祭司のような状況なのですが、生活全体に関わってきて、その中で、個人としての、選択とか、そういうようなことが載っています。で、この表の一番下の3つのことなんなんですけど、宗教とか、宗教の進化とか言うのは、どう

ということなのかを、文章で書いてくれています。それも、関心があれば見てください。

檜田：どこでしょうか。

阿部：はい。この一番下の、表の下、表の下のこれです。

発表させていただくにあたり、関連がありそうな資料を集めてみたのですが、あまり、よく読みこめていないままに発表してしまい、不消化なものとなってしまいました。すみませんでした。

## ■質疑応答

檜田：どうも、ありがとうございます。同じ新書でもですね。時間のかかる新書ですので、時間をかけて、発表していただいて仕方がなかったかと思います。20時30分からあまり遠くない時間で議論を終えたいと思うのですが、いささか伸びるのは仕方がないとも思っております。いつものとおりですね、阿部さんの発表に対して、阿部さんには、わかっているだろうけれど私にはわからないと思われること、あるいは、レジュメの読解と関わって、理解の提示をしていただけるような点などありましたら。どうぞ、どなたからであっても、結構です。ご指摘下さい。章をきった方がよければですね、きろうと思うのですけれども。メモもそれぞれ、おとりになったものがあると思います。章をきった方がよければ、きります。どうでしょうか。一章で、じゃあ、あればお願いいたします。

全員：（沈黙）

檜田：余分なことを言うとはですね。1996年の作品ですので、今から6年前ですから、例の9.11以降として、大澤真幸を読むってというようなですね。読み方もあるかと思えます。関係ないと言えば関係ないわけですが、そういう読み方もあると思えますし、あるいは、今日の水曜読書会の後に残っていただければ、クリスマス会っていうのを、阿部さんが、企画してくださってあってですね、そこで、ご自身の抱負ってというのが、プログラムにあるのですが、大澤さんのご本は、時代がどのような時代であるかというのを、書いてあるわけですから、ご抱負と結びつけて大澤さんの言っていることを吟味するという吟味の仕方もあるかと思えます。少し、余分な領域の促しをしてしまいましたが、もう一度、一章について、ここなら、阿部さんが、わかるだろう、ここなら、他の参加者わかるだろう、それを教えてもらう。自分はここをこう読んだ、それを聞いてもらう。どちらであっても、結構です。なければ、一章、二章っていうふうに開いて行こうと思うのですが、一章、ないでしょうか。一章、二章まで開いてご質問を受けつけようと思えます。

全員：（沈黙）

檜田：どうでしょうか。もっと丁寧に、やらざるをえないってようなことなら、前の方から、復習しながらというようにしますが、色々大変なようですがどうでしょうか。必ずしも、前の方からやったからよくわかるということでないという、けれど

も、後ろ読まなきゃわからないっていうふうにやってしまうのも、逆に見通しを悪くするので、読んだ範囲で右往左往しながらっていうのが一番効率がよいと思うのです。ですから、二章までで、特に言いにくいようでしたら、三章まで開いて、ご質問を受けつけます。阿部さん、よく勉強してくださっているようですので、用語に関する質問であつたって、結構です。

全員：（1分間沈黙）

樫田：来月、このテキストの後半部分が私の発表予定なのですが、私には、とうてい出すことのできないですね、重要な論点っていうのが冒頭、阿部さんによって提示されているので、何とかそこまでいきたいという気がするんですね。

つまり、私にはとうてい、思いつくことのできない、たとえば、阿部さんのコメントの3番とかですね、大学教育や医学教育や看護学教育との関連で大澤真幸を読むっていうのが、ちょっと、私には、思いつけなかった論点で、せつかく、阿部さんらしい論点なので、ここまでたどりつきたい。後ろの10分取るとすると、そうですね。他の論点もありますので、読解の論点は10分くらいしか取れない感じなのですが。

阿部：私が、このコメントを出してきた理由は、オウムに入っていた人が割とエリート学生さんが多かったので、びっくりしたのです。これが、どうしてなのかと、不思議だったのです。権力論と関連させて解き明かすことができるのかとかいろいろ、自分なりに考えてみたのですが、よくわかりませんでした。すみません、焦点がずれているかもしれません。

樫田：いーえ。あー、なるほど。つまり、そういうことですよ。非常に重要な話ですよ。大澤さんは、「俺は、納得したぞっ」って叫ぶわけですよ、きっと。つまり、「貧病苦」っていう話じゃないっていうのが、オウムの特徴なわけですから。エリートが参入していることや、医学生や弁護士が参入して来る行動なわけですよ。

もはや、この世の課題は、そういうことです。そういうことですけど。そういうことを、大澤さんが、どれくらい、我々に、納得できる形で、描ききってくれているか、等が、議題になると思うのですけど。

阿部：新新宗教のその解説を、今の先生のお話を伺って、あらためて、新新宗教の特徴がよくわかりました。

樫田：新新宗教の特徴をオウムが持っているということと、オウムに価値を求めて、エリートの方が、たくさん、参入なさるということは、当然つながっているわけで、にもかかわらず、麻原の身体が必要であったっていうところが、大澤さんの、謎解きになっているわけです。たぶん。理想主義的な。たぶん、大澤さんの。これ、うしろ、読まないとわからないけれども、麻原の身体を経由することによって、虚構から理想への反転が、容易になっているっていう、おそらく、謎解きですよ。かってに、道具だてから、想像すれば。ひるがえって、そのように、虚構から理想への反転が可能

な形で、オウムが作られていることが、むしろ、魅力になって、エリートたちを、引きつけていったという話ですよね。おそらくは。それこそ、人材の取り合いなわけですから、医者、弁護士のような、エリートではないにしても、看護学に来る方も、意味を求めてくるわけですから、そういう方々をオウムと取りあいをしていらっしゃるわけですから、オウムを考えるということは、そういうところの看護学教員としての、阿部さんにとっての、人生上の課題なわけですよね。

阿部：人生上の課題とか、あまり、自分のこととしてそこまで深くむすびつけて考えていませんでした。ただ、単純に、エリートをひきつけるのは、なんだろうという疑問ばかりが強くて。今、樫田先生の言われたこと、なるほどと納得しました。うーん。奥が深いということですねえ。

渡辺：あの、質問してもよろしいでしょうか。

樫田：お願いします。

渡辺：このレジュメ、6 ページの上の虚構への、反転のどこなんですけど、あのう、書いてあることは、言葉では、（理解）できるんですけど、結構、視覚的に書いてますよねえ。内だとか、外だとか、ちょっと図とかで書いていただくとよくわかるんじゃないかなあと思って、もし、よければ。内がこれでとか言っていただくと、非常にわかりやすいかなと思いでして。もし、よければお願いします。

阿部：質問ありがとうございます。レジュメ 6 ページの、虚構の反転のところですね。

渡辺：はい。そうです。えーと、この、なんて言うんですか。理想とか、虚構とか、何ていうか、関係について書かれていますよね。現実とか、関係性が、なんか、こう、内とか外とか言って、視覚的に述べられている感じがするんですけど、ちょっと、いまいち、ビジュアル的に、きちんと把握できていないんで私が。何か言わんとしていることは、境目がある感じは、わかるんだけど、内だとか外だとかってイメージが湧きにくいんで、もし、よかったら教えて欲しかったんですよ。はい。

樫田：えっとですねえ。さっき、私が言及していた部分ですよええ。

渡辺：はい。そうです。

樫田：阿部さん、もののついでに、一遍に全部やってもらえませんか？。つまり、今、渡辺さんが、言及したのが、レジュメ 6 ページの一番上ですよえ。虚構の反転。でも、それはですねえ、反対方向の反転と対なのですよ。レジュメ 6 ページの末尾の。それぞれが、どれに、対応しているかという、連合赤軍と、オウムなわけですよえ。連合赤軍は、簡単に言えば、理想から虚構へ反転したのに対して、オウムは虚構から理想へ反転したんですよ。そこが、レジュメじゃ、落ちているんですけども。レジュメ 6 ページのいちばん下では。6 ページの一番下からね、7 行目に、連合赤軍が、理想から虚構へ反転したのを、象徴してと書いてあるじゃないですか。レジュメ上、これに対になるものとして、オウムは虚構から理想に反転すると書くべきなわけですよ。

それで、その話と、先程の村上春樹の、世界の終わりから外に出ない立場をほめる

竹田青嗣っていうのが、関係しています。それが、中間なんですよ。たぶん。で、連合赤軍は、外に、たぶん出ようとしちゃって。オウムは、外が世界の終わりだったわけ。で、その2つの話を解説してくだされませんか。つまり、いいですか。連合赤軍は、理想から虚構への反転、オウムは、虚構から、理想へ反転。その話と、大澤真幸が、村上春樹の例を引いて、それを解説している。そこでの、内とか外とか、閉域とかっていう、言葉を。セットで、まとめて解説してくだされませんかっていうのが、たぶん渡辺さんの真意だと思うんですけど。

渡辺：あっ、はい。それがわからなくてすみません。はい。

榎田：一つだけ「わからない」って言われても、ちょっと困るんです。

渡辺：はい。

榎田：閉域があつてね。世界の終わりとか、その内側と名づけたり、外側と名づけたりしていること。連合赤軍とオウムと井上陽水のこと。

（ここから、阿部が黒板に向かう）

榎田：あっ、仕事がしやすいようにしてください。ごめんなさい。イスがじゃまじゃありませんか。ちょっと、動いたほうがよければ。黒板、使いやすいように。

阿部：はい。大丈夫です。ありがとうございます。

えーと、オウムが理想から虚構へつと。（と言いながら、白板に図をかく）

榎田：いいえ。理想から虚構へは、オウムじゃなくて連合赤軍の話ですよねぇ。

阿部：村上春樹の場合は、円形に書かなければいけないでしょうか。

榎田：閉域を書かなくてはならないと思いますよ。あんまり、頭に入っていないんですけど。「サティアン」にくみすことができるものとしての。

阿部：外に出ていかないのですよね。オウムは。

榎田：いいえ。オウムは外に出ていっちゃうんですけど。でも、オウムの場合には、外が世界の終わりなんだろうと思うんです。

阿部：そしたら、中で連合赤軍はとどまっている。

榎田：いいえ。ぼく、赤軍の方は、外へ出て行っていると思うんですけど。やっぱり。

ちがうの？ところが、赤軍にとっては、世界の終わりが中ですよ。

阿部：こっちは、外へ出たら終わりなんですよ。

榎田：うん？世界の方が、破壊すべき何ものか、偽りの理想に。

阿部：偽り？世界は？

榎田：偽りって言うか、オウムにとっては、外の世界は、えーとお、

渡辺：あっ、よかったら、先生の方の理解をちょっと、書いてみて下さったら。

榎田：えー、いえっ、ぼく、もう、今、口で言った限りで。あのう、あまり、よくみてないんで。セーラームーンじゃなくて、セーラームーンでいうところの、この世の中見てみたらっていうのが、オウムにとっても外の世界なんですよ。ここに、書いてますけど、それは。無理と思うんですよ。一個の図で書くのは。できるかな。赤



軍にとって、

村瀬：（テープの裏への変り目）それは、理想の挫折のコンテクストで、内ゲバというものがありますよね。つまり、理想から虚構へ。でも、オウムの人にとっては、サリンをまくことが、そういう行為の結果は、理想の挫折ではなくて、理想の遂行だったわけですね。サリンを撒くということは。まったくわからないという意見もあるでしょうけど。要するに、虚構の世界から、理想の世界へ出たということ。まあ、サリンをまくという行為が、あの人たちにとっては、理想の遂行であったということ（感じました？）。

樫田：えっと、阿部さんのレジメに基づけばですねえ。たぶん、こうなっているんですよ。阿部さんのレジメの6ページの上から10行目に「影」って書いてあるのが、たしか、理想のことなんですよね。で、だから、オウムは、いや、連合赤軍は、「影」にくっついて、僕は出て行っちゃった、っていう話しになっているでしょ。

渡辺：あー、あー、あー。あー。

樫田：えーと、うん。えーと、単に、仮説を提示しているだけなんです。

つまり、理想主義的な悲劇として、理想の虚構性を充分、生きなかったものの悲劇として、大澤によって、取り扱われているんじゃないですか。今、村瀬さんは、外に出ることが理想から虚構に展開することだったとまとめられてしまわれたんですけども、具体的には、そういう時代なのですが、この中で、大澤の扱った範囲で、理想を徹底しようとして、内ゲバになったって書いてある。それが、そのうしろの身体性とか家族とかの話とたぶん、対になっていると思うんですよ。つまり、近代的な理想主義からしたら、家族なんかにこだわるのは、間違いだっていう話になるし、近代的な身体性とかからすれば、指輪なんかして、女性性に依存するなんて、許し難い。もつと、革命のために邁進せよっていう話になるわけですね。

で、それよりは、思想的に洗練された態度として、村上春樹を評価しているわけですね。大澤さんは。理想を追求してしまうと、連合赤軍になってしまうから、理想の追求をやめようっていうのが、井上陽水の歌だったし、村上春樹だったっていう。それで、『1973年のピンボール』の話は、連合赤軍みたいに有意味な理想を追求してしまうと、殺し合いになっちゃうから、有意味な理想なんか追求せずに、ピンボールの3台目を探すんだっていう、どうでもよい理想を追求することで理想を追求する心がけだけは維持して、でも、実際には他人を攻撃しないようにずらす工夫がなされていたっていうのが、『1973年のピンボール』の解釈で、そこで、実ははじめて、虚構への転換がおこるわけですね。人を殺さずに、理想をするという姿勢を維持しようとする、本当に理想を追求してはいけなくて、革命のように本当に理想を追求してしまうと、殺し合いになっちゃうから、アメリカの理想にもソ連の理想にも、追随せずにピンボールを探しにいくっていうような、どうでもよい理想だけを追求するしか、生き残る道はないんだっていう覚悟がそこでは、追求

されているっていう話になっていると思うんですけど。それで、その展開の中に、オタクがあるんですよね。新人類とか、オタクとか。

ところが、オウムは、アメリカの理想もソ連の理想も追求せずに、かつ、原初的な身体性を求めてしまう、と。原初的な身体性を求める手続きが、麻原に同一化するというやり方であって、ところが、麻原自身は、70年代前的な「貧病争」の志向性を持っていて、何かを破壊しなければならないと、麻原は思っていて、それで、麻原に依拠してしまうので…。

阿部：あっ、クリスマス会のピザの配達がきたようなので、下の玄関まで取りに行ってきます。お話になっていて下さい。

樫田：玄関が閉まっているということですか。だって、だって、ここまで、きてもらえばいいじゃないですか。それは、無理なんですか。

阿部：お話ししててください。玄関まで持ってきてもらえるように頼んでいるので。玄関が開いてないんです。

渡辺：取りに行きましょうか。

阿部：ありがとう。でも、大丈夫です。

樫田：と、ということで、村瀬さん、阿部さんが行っている間に、図を書いてくださいな。

村瀬：あはは。むずかしすぎて、ぼく、わかりません。

樫田：書いてください。阿部さんがわかるようにしないと。

この図が、正しいといえば正しいんだよね。つまり、村上春樹的に言えば、僕に基づいて、外へ出ると、オウムだし、影、すなわち、理想にもとづいて外へ出ようとすると、連合赤軍だっていう。

渡辺：時代の区分とかは、どんな感じでしょうか。

樫田：時代の区分は、1972年があって、つまり、理想が最終的に追求すべきものとしての輝きを失ってしまった時っていうのが、あって、その象徴が連合赤軍だっていう話ですよ。つまり、1972年までは、理想主義が時代の雰囲気なわけですよ。でも、60年代安保があって、それは、純粋な理想主義なんだけど、60年代安保は、まだ、追求する対象が、アメリカか、ソ連かというどっちも、理想主義なわけですよ。ところが、すでに、60年代安保でなく、70年代安保末では、こういう夢は、自己否定されているわけですよ。連合赤軍以前に、「理想の自己否定」としての「理想」しか追求されていないわけです。反帝国主義・反スターリン主義ですから。

村瀬？：反転化した理想？

樫田：という、奇妙な理想なわけですよ。それが追求される。すでに、60年代末に反転したという奇妙な形の理想しか持ててないから、この時点で、理想から虚構の反転が、部分的には、おきているっていうのが、大澤さんの話です。それで、それを「夢」と呼んでも、いいわけですけども。その、理想から、虚構への反転の先行形というのは、かつて追いかけていられた理想が対象になります。アメリカ的な自由主義もソ連

的なコミュニズムも、それぞれのものが出て、公害運動のことも書いておりましたが、それが 60 年代末に、そのものとしては求められなくなった、そういう先行形態だったという話ですよ。追求する対象が、アメリカ、ソ連という、どちらも、理想主義ですよ。それが求められなくなった。すでに、60 年安保末では、こういう自己否定をされているわけです。ところが、その反転で、最後のぎりぎりの理想追求の形だったはずの連合赤軍が、おまえ、そもそも、理想を完全に求めているのかという、忠誠競争になってしまって、オウムと、そこじゃあ、同じ論理だと思うんですが、「おまえがスパイでなくて、理想をちゃんと求めているのなら、今までの自分の、十分に理想的でなかった姿を総括しろ」とやりはじめると、死ぬしかないですよ。十分に理想的じゃないもの、僕たちは。で、おまえは、十分に理想的でありたいならば、充分理想的でなかった自分を総括しろというと、ほとんどの人は、死んでいくしかないわけで、それは、やだというと、理想を追求することなんかやめようというと、「オタク」的になるわけですよ。

でも、理想を追求することを全部やめて、それでリアリストになるんじゃないで、1973 年のピンボールを探しにいこうという話になって、それと、同じ気持ちで、「ハードボイルドワンダーランド」の中にも描かれているわけですが、影には、ついて行かない、という決心をする。腐ったものかもしれないけど、そこにとどまる。そこでは、世界の終わりにとどまる僕。っていうのが、書かれているっていうのが、ここでの謎解きだったと思います。ただ、それでは、解決が得られないので、やっぱり、人々は、不快に思うわけです。生きる意味がない。理想を追求してもいけないし、ピンボールばかり追いかけるのも、何かくだらなさそうだし、どちらかというと、麻原さんのように、私の身体は、あなたの身体みたいなことを、言ってくれと、そうかなって思って。そうやって、言っているだけで終わっているといいんだけど。私の身体、あなたの身体って言う時の麻原さんは、「貧病争」の理想主義的な感覚をもってしまっているんで、それは、外に向かったの攻撃になってしまったっていうのが、そこからあとの謎解きなんだと思うんですけど。でも、それは、麻原さんだけが、持っていた資質ではないという話にもそれは、なっていますね。で、たぶん、看護学教育上も重要だと思うんですが。ご質問を受けたまわろうと、思うのですが、渡辺さんのような質問であっても結構ですし、ご主張を直接していただくような形であっても結構です。何かありませんか。

全員：（2 分間沈黙）

阿部：図の矢印が返っているのが、反転でしょうか。

樫田：僕は外に出なかったっていう「世界の終わり」とハードボイルド・ワンダーランド」の中での終末です。影について行かない。

阿部：この人は出たのですか？

樫田：と、書いてあると思うんですよ。連合赤軍は、だから、反転せずに、理想に準じ

た。その理想に準じることの、その悲劇性を受けて、1973年のピンボールも、「世界の終わり」とハードボイルド・ワンダーランド」もえがかれている。このことが、その、時代としての、「理想の時代」から「虚構の時代」への反転を意味しているのだっていうストーリーだと思います。

阿部：僕にもとづいての方が、主体性があるのでしょうか。

檜田：ぼくにもとづくところにはねえ、主体はまったくないの。だって、微分されちゃうんだから、私の身体は。

阿部：影にも主体がなかったら、両方、主体がないということになるのでしょうか。

檜田：いや、影には主体がある。理想主義っていうのは、主体主義のことですから。だって、オタクって、主体主義的じゃないじゃない。なんか無意味な目標に向かって無駄に努力するわけでしょう。主体主義的なのは、理想主義の時代の生き方の理想のことですよ。で、そんなのは、殺し合いになるっていうのが虚構の時代のわたしたちの知恵だったわけですよ。

阿部：福祉国家のことですか。

檜田：いいえ、反帝国主義・反スターリン主義のことです。あるいは、何て言えば良いんですか。えー、あのう、永久革命論でも良いですよ。革命の成就など求めない。一応、対なんですよ。対。これ、対。対。これっ、対になってくるんですよ。反帝国主義、反スターリン主義。対になっているんですけど。つまり、かつて、アメリカは、理想に見えたけども、帝国主義って言って非難されるわけでしょう。つまり、理想の底が割れるわけですよ。で、ソ連の方は、スターリン主義的って、非難されるわけじゃない。つねに、60年代末に、理想主義は、非常に歪んだ形でしか、あり得なかったっていう話。そんなことは、テキストに書いていないけどさあ、かいてあるわけ。アメリカとソ連が、60年代の理想だったっていうのは書いてあるわけですよ。そんな素朴な理想主義は、60年末までには、すでに、信じることができなくて、最終的には、連合赤軍で、理想主義的な立場が破綻したっていうストーリーは書いてあるわけ。でも、ポル・ポトの話も出てくるから、どうなんだろう。ポル・ポトまで、いってもいいんだろうけど。80年代の。

阿部：新人類はどこに、あるのですか。

檜田：新人類は、オタクの一步手前ですよ。大澤さんの書き方は、僕、よくわかんないんだけど。ここに新人類がいる。だから、よくわかんないよね。でも、大澤さんの書き方だと、オタクの入り口として新人類を書いてますよね。つまり、今までの理想にとらわれない、今までの理想を受け入れない、オタクを準備するものとしての新人類という書き方だと思いますけど。

阿部：ベクトルの違いっていうのと、又違うのですか。

檜田：ベクトルの違いを図示したつもりなんですけど。というのは、私が読んだ大澤真幸によれば、連合赤軍事件では、閉域の中が世界の終わりなんです。ところが、オ

ウムにおいては、閉域の外が世界の終わりなんですよね。こう、書いてあると思うんですよ。つまり、いい？閉域の中の理想を外に現実化しようとしたのが、連合赤軍で、外の理想と呼んでいるものなんか、破壊してしまえっていうのがオウムだっていう。

阿部：サリン事件のことでしょうか。

榎田：うん。

阿部：内ゲバも。

榎田：こっちが内ゲバなんだけど。ううん。

うん。何で悩んでるかかっていうと、死んでる人はどこで死んでるんだろうという話ですよ。出ようとして死んだんじゃないかって。非常に危ないことを言えば、あれですよ、連合赤軍には可能性があったという話にもなるわけですよ。阿部さんのように言うと。内ゲバなんだからね。ちゃんと、出て行って、最終戦争に打ち勝てば、よかったかもしれない。おっしゃってるとおりだと思いますけど。

阿部：他にも未来がなかった。オウムも連合赤軍もいつかは。

榎田：だって、だって、こう書いてあるわけですよ。その、むしろ、とんでもない、ばかげたことを言っているのは、ボーヴォワールの方だって、書いてあるわけですよ。その、ボーヴォワールが、書いていることは、ほとんど、お笑いなわけですよ。人類は永遠に不滅なんだっていう、ところが、人類は永遠に不滅だというような仮構を立てることでは、今の理想っていうのは、現実社会っていうのは、その正当性を維持できないわけですよ。だとしたら、五分五分なわけですよ。そのう、ボーヴォワールが言っていることが、とんでもないでたらめだと考えてしまえば、オウムが言っていることが、荒唐無稽であって、他の人の言っていることが、意味のある現実主義的な対応だってもはや言えないわけですよ。そのくらいのことは、大澤さんだって、主張していると思うんですけど。で、もう一つ言えば、これがあるわけですよ。「手段目的連鎖」の話。この前提が「手段」になって、それが目的になるっていうこの手段目的連鎖が、永遠に続いていかなければいけないけれども。そんなことが、可能になるのは、世界の永続性。これが、前提になっているので。

こっちが、理想主義といわれてもいい。世界の永続性は、十分に疑わしいので、原理的にはオウムと、現実主義を訴える普通の人は、五分五分という話になっていると思いますけど。連合赤軍の可能性については、ちょっと、わかんないです。おっしゃるように。ま、大澤さんの弱点ですかね。そこらへん。たまたま、内ゲバで殺しあったからいけないっていうのは、論理的な結論じゃないってわけですよ、阿部さんに言わせれば。そういう面はあると思います。

#### ■ひとりひとことずつ（感想）

榎田：すみません、えっと、なかなか、あのう、一般的に質問を募っていても、困るっていうことですので、運がよければ、議論につながる感じで。そうでなくても、

感想を言ってもらう感じで、意見を聞いて、それで次回があるということで、終わりにしようと思います。あとから、いらっしゃってるから、中恵さん、トップバッターは難しいですか。

中恵：ちょっと、難しいです。すみません。

樫田：あっ、本当。はい。村瀬さんから。

村瀬：最初、読んだ時に、何となく感じたことですが、僕がオウムに所属していない、していなかったんですけど、それは、まあ、偶然というか、さっき、先生がおっしゃられたように、本当に五分五分だったのかなあ、たまたま、僕はオウムに所属していなかったし、していることはなかったけど、所属しようとしていた可能性 50% 位あるだろうなあと漠然と考えながら読んでいたんで、五分五分の可能性があるということが、自分の中に、オウムのものがあるとか、あり得るといことが、大澤さんの言いたいことなんじゃないのかなあと思いました。

樫田：それを、どう、肯定したらいいのですかねえ。

村瀬：ははは

樫田：えーと、オウムのものってのがですね。普通、世俗的にはですね。なにかしら、現実世界無視的とか、謀略的なるものっていう含意をもっちゃうけど、すでに、大澤さんを読んでしまった私たちにとっては、そういう含意はないわけですね。

むしろ、精神世界をちゃんと求めるとかですね、理想の危うさにちゃんと、気づいているとか、物質的なものを求めないとか、そういうものと結びついて、オウムのものものがあるとしたら、それは、私たちにありますよね。比喩でなく。ですけどね。別の言い方をすれば、それらは新新宗教全般の典型的なわけですから。新新宗教の人々が求めている、非・現世利益的な、魂の救済を求めるような志向性は、みんなが持っているんだから、当然、私がオウムでも、おかしくないという話になると思います。そこからどうかんがえていくか？。すみません。大日さん。お願いします。

大日：ぼくは、そのひょっとしたら、自分がオウムだったっていうこともわかるし、でも、自分がオウムに絶対入らないっていうのもわかるし、っていうその、この共感は、ここでは大澤さんが説明されているような、世代というか方向性というか、その、麻原は、そのう、あれですよ。

樫田：「貧病争」

大日：の時代なんだと。その世代の話かっていう、本当にその多様な世界。そういうことは、この本がどのくらい、面白い本なのかとか、例えば、連合赤軍、または、同じ世代、その人たちから見て、という感想を持ちました。

樫田：えっと、連合赤軍以降ですよ。当時は小学生六年とかで、あの、お家に帰ってずっと、私はみていましたが。

大日：世代の話なのか、それが、世代の話なのか、総合的な社会の話なのかっていうのか、そういう、

檜田：そのう、悪口風に改稿していいですか。その世代的には面白いかもしれないけども、ノスタルジーにすぎないって批判がある、っていうことですか？

大日：その「世代」で説明できるのかって話です。

檜田：えっと、今の新人類とか、オタクだけで、ちゃんと、オウムが構成されていたならば、あのう、危機なんか起きないのに、たまたま、旧世代的な松本智津夫が中核にいたから、オウムが危なかっただけで、もっと、人々は、オタク的なもので、安住できるように、今はなっているから、怖くはないよって主張ですか。

そうなんだとしたら、もはや、過去のものを、その、事大主義を、これは、大事件で大問題だっという風に取りあげている大澤さんを、笑えばいいわけですよ。それとも、そのう、これから、未来にも起こりうる何かしら重要な現象を大澤さんが分析しているって話にこれが読めるかって言う、そんな問いかけなのではないでしょうか。

大日：そういう説明にしたら、むずかしすぎる

たまたま、その世代だっという説明もありうるとは思いますが。

檜田：うん。つまり、「貧病争」をメインで扱う人は減ったけども、「貧病争」の問題は意味を失っていない。いまだに、創価学会会員は、1,000万人いるし、あのう、「貧病争」を扱う人は、いつでもいるって感じはありますよ。世代の特徴は、次の世代にゼロになるって訳じゃないということです。

前半の話は、そういう可能性はあると思いますよ。いささか、大澤さんも年をとって、ノスタルジックになっているのかなって、いう気はします。大澤さんにとっては、信州の松本出身だし、あのう、やっぱ、ねえ、オウムを扱わざるをえなかったんだと思いますよ、自分の問題として。松本サリン事件がありますから。でも、あのう、ぼくには、関係ないやっという態度もあり得ると思います。それから、オウム、かっこわるいってセンスもありうるわけですよ。私がオウムだったかもしれないって共感以外に。まじになりやがってっという。

阿部：まじになりやがってっというのは、革命を起こそうというような

檜田：なんてことを言うから、十分にオタクできていない、中途半端な、つまり、オウムをオタクとその、比喩で言う人たちに、不満な「新生オタク」っという立場がありうるわけですよ。そんなことないですか？何か、むりやりですか？

大日：大澤さんは・・・。

檜田：オウムっかっこわるい。それは、誤解だといいたいんだと思いますよ。そういう宣伝がされちゃっていたわけですよ。革命集団としての、オウムっという。

じゃあ、先に行っいいですか、必要ならばもどるということで。

じゃ、渡辺さん、お願いします。

渡辺：いろいろ、思うんですけど、とりあえず、こおー、何から言うか、迷った末に、さつき、口火をきらせてもらって、まあ、それなりになんか、わかりやすくなったんで、よかったなあと思います。はい、思いついたら後で言うので、とりあえず、先

に進んでほしいです。

樫田：はい。それでは、橋本さん、お願いします。

橋本：全然わからなくて。ちょっと、夕べ、たまたま、連合赤軍の番組を見ていたので。今も連合赤軍の元同志のコメントなどを見ると、いのちの重さとか、家族のこととか考えているんだといっていました。

私も連合赤軍の事件をテレビで見たのが、小学生の時だったし、思想も、よくわからないのですけども。この本も、まず、大澤が何を言おうとしているのかが、理解することができない。少しもわからない、この人の文章、いつも、こんなにむつかしく書くだらうかって思って読んでいたので、もう一度、説明してみいといわれたら、私、できないんですけど。わからないと言えないほど、わからない。レジュメ 5 ページの上の虚構の時代の反現実主義、えーと、文脈が良くわかっていないので、物語は虚構の集合であるとか。虚構の世界の方が、価値があるとか。そしたら、こういう話をいわゆる、構築主義、構成主義とかと、言われていることと、重ねて理解してよいのか？世の中は、いかようにも語れるし、どれが、真実かなんて言う、そういう視点では、わからないこともあるって、言えるのかと、思いました。何を言って良いのかが、ちょっと、わかりません。はい。

樫田：いいえ、どれも、重要な話で。すごく重要な。最後の話も関係あると思いますよ。つまり、社会科学の対象が、どのような世の中が、よい世の中かっていう、理想主義的研究スタイルから、人々がその、どんな虚構を生きるべき虚構として、生きているかというっていう探求のスタイルに変わってきているという話ですよ。そこは、大澤さんの言うように、時代が変わってきているからで、それは、構築主義的な見方でしか、発見できない訳ですよ。この世の中はよい世の中だって押しつけても、なんにもならないわけですから。橋本さんの感想は、本書ととても関係があると思いますよ。ところで、大澤さんは、この本は、丁寧に書いていると思いますよ。阿部さんが、注がないって言ったけど、注に相当するものを本文に書いているからと僕は、思うんですよ。そんなことないですかねえ。だって、偶有性についても、ちゃんと、解説していたし、それでも分かりにくいとすると、後はあれですよ。文化的なズレがやっぱりあって、「セーラームーン」は、私も見てないけど、やっぱ、「アキラ」は、読んでも、その、読んでものの違いがあるんじゃないかって思います。これは、世代の問題じゃなくて、あれですよ。なんだろう、文化圏の違い。文化圏というのは、地域じゃなくて、その、サブカルチャーに対する接近度の違いなんだと思いますよ。でも、「ナウシカ」くらい、みなさん、知っていらっしやるだろうし、でも、やっぱり、わかりにくいですかねえ。そうですねえ。「渋谷」とか言われても、困りますよねえ。ただ、我々の関係で言うと、見田宗介さんのものは、読んだわけですよ。書いてあることは見田宗介そのものですよ。実は、扱ってるのは。ボーヴォワール批判のどこなんていうのは、ずっと、社会理論の社会学で、見田さんが書



いてた話と同じで、あのう、手段—目的図式の終点がないっていう話で、そこを疑い出すと理想主義が破綻するっていう話ですから。これは、見田さんを読んでいけば、わかりやすいかと思えますけど。それでは、多田さん、お願いします。

多田：むずかしくて。何となくはわかるのですが、実際自分の中で（大澤さんが、書いてあることを理解するのは）難しいですね。理想への志向が、虚構へ反転することは、何となくわかるような気がします。私自身にも、自分の中に内在する理想と虚構というのに、感じるがあります。今までそのことを意識することもなかったけれども、このようにみなさんの意見を聞いていると、自分の中にも理想と虚構の境を実感していることがあるような感じがしました。

樫田：ありがとうございます。それでは、次、どうぞ。

阿部：時間をかけてレジュメを用意したつもりでも、全然理解ができていなかったのだなあと、反省しています。発表は、充分でなかったと思いますが、樫田先生やメンバーのみなさんのおかげで、議論が盛り上がってよかったなあと思いました。私も皆さんと一緒に、オウムと自分は全然違うって思っていたのですが、この本を読むと、自分は、自分自身が批判しているようなものであるかもしれないという怖さを感じました。それは、世の中のどんなことにでもいえるのではないかと思いました。発表の最初にこの本を読む姿勢として偉そうなことを言ってしまったのですが、全然読みこなせていませんでした。でも、自分の看護学教育に関連づけて読もうとしたところは、樫田先生のサポートもあって、良く理解できたように思います。宗教っていうのは、現代社会を映す鏡だと、以前から思っていたのですが、宗教社会学の講演を聴く機会があったり、こういう本を読んでみて、宗教に魅力を感じていく人の気持のメカニズムが少しでもわかったように思います。大澤さんの本は、大変難しかったです。私にとっては知的刺激をあたえてくれた本になりました。今日の『水曜読書会』では、樫田先生が、私たちによくわかるように解説してくださったおかげで、理解が進みました。今までは、オウム事件も、オウム真理教団の中や外で何が起こっていたのかというメカニズムがわからずにただ、闇雲に怖がっていた自分ですが、この本を樫田先生やメンバーの皆さんと一緒に読むことで、内部でどういうことが起こっており、こういう事件につながっていったのだということや連合赤軍の場合と比較しながら考えたので、より一層理解することができました。『水曜読書会』を通じて、「社会を読み解く」という作業を今、私たちが行っているのだということや、あらためて実感しました。世界が広がったような気がしております。前半は阿部が発表させていただきました。先生やメンバーの方に助けていただいて無事発表を終えることができました。ありがとうございます。後半は、来月、樫田先生のご発表なのでとても、楽しみです。以上です。

樫田：それでは、これもちまして終わりにします。お疲れさまでした。

全員：ありがとうございます。

資料 4 水曜読書会第 51 回目レジュメ (大澤真幸『虚構の時代の果て』前半)

2002 年度再開第 2 期 8 回目(第 51 回)水曜読書会

徳島大学行動科学図書室

**「虚構の時代の果て」オウムと世界最終戦争 大澤真幸  
ちくま新書 1996年を読む**

2002 年 12 月 25 日 18:30~20:30

阿部智恵子 (国際医療福祉大学)

CQW27615@nifty.com

阿部前半 (P1~P144)2002 年 12 月 25 日

樫田後半 (P145~P302)2003 年 1 月 22 日

※ 本を読むときの姿勢

1 われわれ個人個人にとってオウムとは何か。

2 社会理論としての宗教。

3 大学教育や医学教育や看護学教育との関連。

4 現代社会における宗教の親密性。

総評

★緻密に議論の展開がされているところと、そうでないところがある。これは、著者の主張の強弱によってそうなっているのだろう。著者の躊躇なども入っているのだろうか？

★前半は、章の終わりが疑問付で終わるやり方をしているが、必ずしも後の章につながっていないような感じも受ける。

★なかなか読み応えのある本であった。読者の関心によっていかようにも読むことができる。(例えば、階層論、アイデンティティ等)

★社会学的論考というよりも、心理学的傾向が強いのではないかと思う。

---

〈本文の要約〉

## 第一章 妄想の相互投射 (P7~P36)

### 【第一章の要約】

世界最終戦争とみなされるべき戦争で、日本が敗北してから、ちょうど半世紀を経た年に、すなわち、1995年に、その日本で二つの戦争が勃発した。そのひとつは兵庫県南部地震で、他の一つは「サリン事件」である。この二つは「戦争」とみなされた。

#### 1 半世紀後の二つの戦争

##### 半世紀後の戦争

- 1995年に二つの戦争が勃発。→1995年とは、世界最終戦争とみなされるべき戦争で、日本が敗北してから半世紀を経た年であった。
- 世界最終戦争＝第二次世界大戦
- 第二次世界大戦は、空間的規模と時間的展望の両方向からの特徴づけにおいて世界最終戦争であった。
- われわれは、最終戦争後の世界を生きているのだ。
- ①1995年1月17日 兵庫県南部地震  
②1995年3月20日 東京の地下鉄「サリン事件」
- これらの出来事が「戦争」であること理由  
→ 「戦争」として受け止めさせた経験の構造の追究。  
両者の同時性に偶然以上のものを認めることができることができる。
- 地震が一種の戦争として感覚。  
ex 地震への対処策としての「危機管理」が問題とされた。  
地震の被害が、空襲と比較された。
- 地震に「人為性」を見出そうとする言説のもっとも極端なものとして、端的に「地震兵器」によって地震が引き起こされたとする、妄想的な推論があった。
- 地震を戦争の一種と見なす無意識の感受性が広範に見出されたという事実は、次のような推論を促す。→地震が想起させたような極端な偶有性は、何らかの不確定で予期できない〈他者〉への感応という形態でのみ、実質化することができるのではないかと。
- 兵庫県南部地震は、資本の効率性にのみ志向していたインフラストラクチャが、予想外の激震による破壊に遭遇したとき、とてつもない非効率性をもたらさう、という事を明らかにした。

##### もう一つの戦争

- サリン事件は、地震と違って、あからさまに、自覚的に、犯行グループと警察（あるいは警察を支持している日本社会のマジョリティ）との間の「戦争」と了解された。
- サリン事件が戦争とみなされた理由。

①凶悪なテロ行為。社会体制そのものに対する攻撃として解釈されるほかない。

②オウム真理教団自身が、自らを「国家」に擬しており、そして国家観の戦争の一環としてテロ行為を決行しているように見えたからである。

- ・地下鉄でのテロは、神戸にしかけられた攻撃に対する反撃を一つの目的としていた、という可能性を否定しがたい。→兵庫県南部地震と地下鉄サリン事件の間の直接の因果関係。
- ・「半世紀後の二つの戦争」を並記させた理由。  
→ 地震を「戦争」として受容させてしまった心的な構造とオウム真理教団が自ら戦争をしかけようとするに至った心的な構造との間に同型性を認めることができるからである。

## 2 妄想の相互投射

### 妄想の相互投射

- ・サリン事件・・・マスコミが伝達し、また視聴者・読者が受容した情報が、事実に対して常に先行。

事件をめぐるとりわけ初期の言説が、事実の客観性よりも、われわれ自身の想像力の方により強く規定されてきた、ということの意味している。（まず最初に、このことを確認しておかなくてはならない。）

- ・オウム教団が『市民社会』や『国家』に対して『戦争』を仕掛けたのだとすれば、その戦争は、この陰謀史観によって正当化されていた可能性が高い。
- ・陰謀史観とは、社会に許容しがたい反秩序を見出したとき、その反秩序の原因を直接には見出しがたい外部の他者（の邪悪な意志）に投射する〔押しつける〕ことで、その社会の現状を歴史的に説明しようとする態度である。
- ・陰謀史観は、このように相互に投射しあうような関係の中で抱かれているときには、自己成就的な仕方でも充足されてしまうのである。
- ・陰謀史観が反秩序の原因を帰属させる攪乱的な他者は、必然的に、あらん限り（心理的に）遠方の他者、他者たちの中でももっとも遠くにいる他者として、措定される。

### あらん限り近い他者

- ・「出家信者のおよそ四割はスパイである。」・・・サリン事件の村井秀夫の弁。
- ・自分たちにとっての非常に基本的な規範にすら従わないもっとも遠い敵対的な他者が同時に、自分たち自身に内在しているということ。  
→自分（たち）自身こそが、その他者である、という恐ろしい逆転がまっている。
- ・遠くかつ近い《他者》への恐怖が、オウム真理教信者たちの陰謀史観を支え、戦争への衝動を駆り立てていたのだとすれば、探求すべきことは、このような《他者》がいかなる機制を通じて、彼らにとって現実的なものとして信憑されたのかということ

であろう。

- ・われわれの社会は一少なくとも現代の日本社会は、何らかの理由によって、「人間を食う」という事によって表象されるような極限的に敵対的な《他者》に自らが寄生されているという想像力に現実性を与えるような感覚を、醸成してきた。

#### 新新宗教者としてのオウム真理教

- ・ここまでの議論が示している事は、オウムとわれわれは完全にあわせ鏡の関係になっているという事、しかもその事は、オウムを攻撃し、否定するわれわれの態度のうちにもっとも明確に示されるということ、である。
- ・例外性と典型性の一致という事は、オウムを日本の宗教史の文脈に位置づけた場合にも当てはまる。
- ・新新宗教の特徴は、いずれもオウム真理教の特徴でもあり、オウム真理教は、新新宗教の典型なのである。
- ・日米のテロの呼応→オウム真理教の問題を、日本にのみ見出される表層的な要因から説明しようとする事に対する警鐘になっていると言える。ex「オウム」的なるものを、日本において他国よりも偏重されている「偏差値」による教育をもって説明し尽くす事はできない。

#### 【一章のコメント】

※地震を「戦争」として受容させてしまった心的な構造とオウム真理教団が自ら戦争をしかけようとするに至った心的な構造との間に同型性を認めることができるというところに、少し無理が感じられる。著者のオウム寄りの論考が垣間見られるのではないのだろうか？

## 第二章 理想の時代／虚構の時代 (P37～P88)

### 【第二章の要約】

最初の最終戦争からの五十年の流れの中で、オウム真理教がどのような位置をもつのかを概観してみる。オウム真理教は、虚構の時代の終焉を代表するような位置を担った。現代のある種の新新宗教は、またサブカルチャーは、一しばしば潜在的な無意識の欲望の水準に置いてではあるが、一未来の絶対的な断続を求めなくてはならなかったのだろうか？

### 1 理想の時代と虚構の時代

#### 二つの可能世界

- ・オウム真理教によるテロ→教祖麻原が予定していた世界最終戦争（の）前哨戦）として行われたという仮説に立つ。→最終戦争後の最終戦争、つまり2度目の最終戦争。
- ・【見田宗介】→「現実」がどのような形態の「反現実」に準拠することによって組織

されているかに応じて、戦後史を三つの段階に区分することができる、と論じている。日本社会の戦後史において、現実が照準している反現実の様相は、「理想→夢→虚構」の順に転換してきた。

- ・著者の考えではこの内、「夢」という語は「理想」と「虚構」の両方に引き裂かれるような二重性をもっている。三段階はさらに、「理想→虚構」の二段階に圧縮することができる。
- ・理想と虚構の相違→理想も虚構も現実世界ではないという点において、すなわちいわゆる可能世界であるという点において共通している。
- ・オウム真理教が戦後史で占める位置。・・・オウム真理教は、虚構の時代の終焉（あるいは）極限）を代表するような位置を担った。連合赤軍との照応関係。

#### 理想の時代の現実主義

- ・「アメリカ（自由と民主主義）」と「ソ連（ Kommunismus）」が、理想を表象する覇権国。→これらの理想を標榜する知識人は「進歩派」と呼ばれ、保守派の権力と対抗。
- ・進歩派知識人の代表的論客の一人丸山真男→「『現実』主義の陥穽」（1957）
- ・丸山の論は、理想への志向が、それ自身、現実への志向であることを、言いかえれば、理想は現実の一局面であることを示す。
- ・見田宗介の注目・・・社会心理調査の質問項目と日本近代の流行歌史上の変換点。
- ・理想の時代から虚構の時代への転換点は、旧新宗教から新新宗教への転換点と一致している。
- ・理想の時代とは、社会が全体として理想へと疎外されている時代である。→最大の不幸とは、理想から永続的に疎外されること、つまり理想との関係において二重に疎外されることである
- ・この時代の新興宗教は、理想の時代のスウィーパーとして働いていた。

#### 虚構の時代の反現実主義

- ・虚構の時代の黄金期は、1980年代である。
- ・ディズニーランドによる象徴。
- ・渋谷・・・虚構の時代に適合した盛り場。
- ・見田宗介・・・『家族ゲーム』に言及。最も生活的で実態的なものである家族でさえも、ゲーム＝虚構と化しつつある風景を、映像化。
- ・「虚構の」時代の若者風俗の上での対応物・・・『新人類」と「オタク」
- ・オタクが耽溺する領域は、多くの場合、物語＝虚構の集合である。・・・虚構の世界の方がより重要になっているように見える。
- ・新新宗教の要請・・・現世＝現実を離脱した志向性は、ある主の虚構(霊的世界)へと向けられ、その事によって、現実と虚構との価値配分が逆転し、虚構の方に圧倒的な重要性が置かれることになる。オウム真理教は、新新宗教の典型。

### オウムの虚構世界

- ・オウム教団が前提にしていた世界は、虚構的であると多くの論者によって指摘された。
- ・「コスモクリーナー」
- ・自らを国家に擬制している点にオウム真理教が依拠した顕著な特徴がある。
- ・オウム真理教は、出家という進行の形態にきわめて高い価値を置く。
- ・オウム真理教団と外部の社会との間の対立は、まずは、この拉致と監禁にかかわるものとして現れた。

### 2 両方向からの越境

#### 理想を否定する理想

- ・日本の戦後の半世紀・・・理想の時代から虚構の時代への転換として把握しうる事、そしてオウム真理教が虚構の時代の先端に登場するような宗教であった。
- ・問題は、虚構と現実との落差がいかにか埋められたのか、虚構がいかにかして現実としても機能しえたのか、にある。
- ・理想の時代の末期には、すでに理想の時代のうちに包摂するのが困難であるような現象が突出しつつあった。
- ・60 年安保の運動と 60 年代末期の学生運動。
- ・理想の時代の大衆的な表現こそが、高度成長であった。後に『公害』のような社会問題の出現。同時に 1970 年には理想の時代の最後の祭典が開催されていた。
- ・理想の時代の末期・・・理想の時代を否定する運動や感覚によって特徴づけられる。
- ・確認すべきことは、理想の時代は、その展開の過程で、むしろ自己否定に導かれていくらしい、ということである。

#### 虚構への反転

- ・『団塊の世代』に属する人々・・・(連合赤軍) までの人生が、ちょうど日本の『理想の時代』と重なっていた人々。
- ・団塊の世代に属する優れた思想家の抱えている共通の課題。・・・理想を否定しつつ、いかにかしてなお理想を維持するか、といったほとんど解答不能な問いに集約させることができる。
- ・思想家の代表的な例の一人としての竹田青嗣・・・井上陽水論。
- ・井上陽水論・・・陽水の曲は、解答不能な問いに直面している。幻想に固執する理想主義者でもなく、しかし一切の理想に対して冷笑的なだけの現実主義者でもない、緊張に満ちた中間的な立場を竹田は評価する。

- ・オウムは、連合赤軍とは、まったくの逆の理由から、つまり「影」ではなく「世界の終り」に止まる「僕」の気分を肯定する態度の方から、逆説的な反転を被って『世界の終り』に比せられる共同体の外へと出てきたように思える。
- ・オウムの悲劇は「世界の終り」の境界線を挟んで、連合赤軍の悲劇とはまったく反対側に位置しているのではないか。

### 哲学的レッスン

- ・主張しておきたいこと・・・
  - ①団塊の世代の最も良質な代表者たちが試みたことは、理想の理想としての有り様を単純に放棄したり拒否することではなく、まさに理想の理想性に固執し、それを徹底させることであったということ。
  - ②そのような徹底によって理想は自己否定へと導かれ、ほとんど虚構に近いものとして再生するということ。
- ・「理想への志向」が「虚構への志向」へと反転する。
- ・現実には、常に、必然的に虚構が張り付いている。
- ・廣松 渉・・・どのような現実も、必ず、意味を帯びたものとして現前する。
- ・現実の「虚構」が張りつくとき、それ自身としては、絶えず生成し・変化し、またどこまでも確定的な区別もなく広がる現象が、固定的で、周囲から一義的に区別された物体のように現れることになる。
- ・現実と虚構が差異を保ちつつ、不可分の関係にあることを確認する事ができた。

### 反対方向の反転

- ・連合赤軍は、理想から虚構への反転を象徴している。
- ・虚構の時代も、その内部に、自己自身を否定するような段階を含んでおる。
- ・教団のメンバー・・・熱心なメンバーの中心は、二〇歳代後半から三〇歳代の半ばの世代にあたる。この世代は、「新人類」とか「オタク」などと呼ばれる若者たちを輩出した年齢層にあたる。
- ・他方で、麻原のみは「理想の時代」に内属していると思ないうるような諸属性を有している。もう少し厳密に言い換えれば、理想の時代が不可避に孕まざるをえないような影の部分想起させる諸属性を、麻原は担っているように見えるのだ。
- ・虚構が徹底されたとき、メビウスの帯のような回路を通じて、理想＝現実へと際反転してくるのではないか、という仮説を提起してきた。
- ・終末として提起されたときに、虚構が理想として機能することができるのはなぜか？このことを解明しなくてはならない。



### 3 終末論という倒錯

#### 終末論の氾濫

- ・『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』
- ・虚構の時代の新新宗教は、破局的な終末への危機感を表明するものが圧倒的に増大している。
- ・確認しておきたいこと・・・世界の終末を想定していると言うことは、オウム真理教に固有の特徴ではない。
- ・『美少女戦士セーラームーン』

#### オウム真理教の終末論

- ・オウム真理教が予期している終末は、終末論を有する他の諸宗教の終末のヴィジョンと比較して、破滅的であり、要するに「暗い」。
- ・オウム真理教においては、無意識の内に真に欲望されているものは、まず第一に、世界を全的に否定する破局そのもの、つまり最終戦争ではないか、こう推測せざるをえない。
- ・虚構の時代の果てで、極端な否定のみが、理想たりえたのは、一体どうしてか？

#### 近代的な時間

- ・ボーヴォワール「・・・人類は死ぬべきではないことをわれわれは知っています。」
- ・真木悠介『時間の比較社会学』での分析。
- ・「理想」というものは、時間に対する近代的態度—つまり営みの価値をその未来における結果において評価する態度—の中で、機能する。
- ・近代社会は、決して終わらない時間を要請せざるをえない。
- ・新新宗教は、未来の絶対的な断絶を求めなくてはならなかったのか？

#### 【二章のコメント】

※直接的なコミュニケーションとか、家族の事に関しては、オウムだけのことでなく、現代社会の変化も背景に読みこむことができ興味深い。

※家族のことをすっぱり忘れられる人ばかりではなかったという点に注目したい。組織の意向と個人の意向の違いのすりあわせ。

### 第三章 サリンという身体 (89～144)

#### 第三章の要約

なぜ、彼らは、毒ガスサリンを生成し、使用しなければならなかったのか？

オウムの身体観、家族観、極限的なコミュニケーションについての特徴性、他の宗教と

の相違点について追究する。

## 1 毒ガスの恐怖

### サリンの恐怖

- ・サリンを教団は恐れていたが、同時に彼らは、攻撃の武器としても、サリンや VX 等の毒ガス兵器に必要以上に拘泥していたように見える。
- ・毒ガスへの不合理なまでの拘泥は、毒バスの内に彼らの内に彼らの宗教性の根幹に触れる何か表象されていた可能性を、示唆していなさじやろうか？

### 腐海を護るオウム

- ・宮崎駿の『風の谷のナウシカ』
- ・『ナウシカ』の世界観とオウムの「劇画」的なそれとの類似性は、オウムの「サブカルチャー」的な文脈を強調する何人かの論者によって、すでに指摘されている。
- ・ここで注目しておきたいことは、まさにその「腐海の秘密」である。

## 2 極限的な身体

### 浮揚する身体

- ・『風の谷のナウシカ』は、風によって飛翔することへの強烈なあこがれに貫かれている。』→オウム信者の超能力への願望に通じるものがある。
- ・オウムの超能力の原点が「空中浮揚」であった。」
- ・オウムに共感し参加する者立ちの原書的な欲望が、どこに向けられているのか、ということを示している。・・・身体がこの現実世界において有する局所性一身
- ・空中浮揚の完成度を上げる。・・・「体外離脱」「変化身」「ワープ」

### 身体の微分

- ・局所性を身に克服するためには、個体という身体の粗大なまとまりを解消しなくてはならない。・・・身体をどこまでも微分し、そのことによって、外界との協力を融解させてしまわなくてはならない。
- ・「ダウティ」という修行。
- ・身体を微分していく修行の徹底・・・ついには、自らの身体を、内外に開かれた流体や気体として、あるいはエネルギーの波動や光のようなものとして、実感しうるまでになるだろう。
- ・「クンダリーニー」・・・バイオコスミックなエネルギーである。
- ・「解脱」・・・クンダリーニーの境位を実感しうる程に、自己の身体を融解させるな

らば、やがて、当然、固体の内に閉じこめられていた「自我」は粉碎されることになるだろう。

- ・麻原の「最終解脱」
- ・石井久子の「光の体験」

### 身体の「ここ」性と「そこ」性

- ・周囲から遮断された、窓のない真っ暗な部屋で長時間こもりっきりになって瞑想する修行を、解脱へのステップに取り入れたところは、オウム真理教の完全にユニークな特徴だと指摘されている。
- ・ミシェル・フーコー
- ・パノプティコン
- ・オウムの修行は、身体を流体や気体、あるいはエネルギーの波動のようなものに変容させることを志向している。・・・身体の局所性の、つまり身体の「ここ」性の克服を核におくものだった。＝身体が「ここ」にあり、かつ「そこ」にあるとでも表現するほかないような状態を可能にする。 ※体外離脱の場合。
- ・次の諸点の指摘①〈他者〉は、共同体のどのような共同主観化された規範によっても、決して、妥当なものとして承認されることがない経験となるはずだ。
- ②我々が他者（他人）が存在しているという事実を自明の事として生きているのだとすれば、我々自身も皆、その〈他者〉という境位（自己性と他者性の圧縮）を、そうと自覚することなく実践の上では前提にしているはずである。

### 極限的に直接的なコミュニケーション

- ・身体をクダリニーの境位まで変容させるならば、自己でありつつ他者に内在していることを、つまり〈他者〉を実感できるに違いない。あるいは、自己であることと他者であることの圧縮を技術的に触発することによって、「解脱」への歩みが促進されていたように見えるのである。・・・自己の他者への内在は、通常のコミュニケーションを否定する、極限的に直接的なコミュニケーションの様相を呈するだろう。
- ・「極限的に直接的なコミュニケーション」
- ・絶対的に信頼しうる他者がいるならば、一切の判断をその他者に委ねることが可能ならば、さしあたって、比較的容易に、「自我」を空虚化することができるに違いない。

### シャクティ・パット

- ・麻原の身体との極限的に直接的なコミュニケーションを技法化したものが、彼らのいうイニシエーションである。そしてあらゆるイニシエーションの原型は、シャクティ・パットという技術である。
- ・シャクティ・パットは、永沢哲 が論じているように、第三者の目から見れば、波動と化した身体との共鳴現象の一種であると解することができる。
- ・シャクティ・パットの代替物の中で最も顕著なものが、信者達によって PSI (Perfect Salvation Initiation) と呼ばれていたヘッドギアである。
- ・「波動」としての身体との「共鳴」として客観的には記述しうる、極限的に直接的なコミュニケーションは、他者との最も原初的な関係性に属するものである。

## 3 家族の無化

### イエスの方舟

- ・「イエスの方舟」千石剛賢が、オウム真理教を厳しく批判した。井上嘉浩の言葉を主に批判。「尊師の命令であれば、たとえ親であっても殺すことができる」
- ・方舟とオウムでは、自己と他者を設定するときのベクトルが逆になっている。方舟・・・還元不可能な最小限の内容を持った自己の同一性が与えられていることがまず前提になっており、そこからの類推や拡張として、他者に到達しようとする。オウム・・・起点は、他者のほうにある。自己がそのまま他者化しなくてはならない。そのためには、原理的には、自己のあらゆる同一性の内実が、例えばごく素朴な欲求とか利害関心すらもが否定されなくてはならず、そのことを通じて自己が過激に空無化されなくてはならない。

### 家族性の肯定

- ・方舟にもオウムにも、信者がそれまで内属してきた家族的な関係性を否定する潜勢力がある。
- ・方舟・・・家族の否定は根源的なものではない。

- ・千石イエスは、家族的な関係を否定するのではなく、良い関係の究極のモデルとして肯定している。
- ・家族とは何か？
- ・家族への態度の一般化
- ・イエスの方舟と連合赤軍との比較・・・オウム真理教のポジションを理解するための参照軸をも与えてくれる。  
方舟→身体に直接に現象するような性質に関しては、これを自然なもの（必然）として受動的に受け入れる傾向が支配的である。
- ・連合赤軍→この種の性質を、革命の「理想＝大義」を準拠にして、偶有的なもののみなし、能動的＝選択的＝人為的に克服しようとする。

### 家族の根源的否定

- ・オウムの家族否定は、イエスの方舟の場合と異なり、根源的なものである。
- ・家族否定に対するオウムの過激さ
- ・オウムが家族を拒否する理由・・・この教団の信仰世界の中では、「極限的に直接的なコミュニケーション」のみが、本質的なものと見なされるからである。
- ・オウムと連合赤軍は、まったく反対の位置に立っていて、家族を否定していることがわかる。
- ・連合赤軍の「身体の否定」が一方の端に有り、中間に、方舟の「身体の消極的な肯定（受容）」があって、他方の端に、オウムの「身体の過激な肯定」がある、という布置を得ることができる。

### 家族否定の歴史的文脈

- ・家族をまったく偶有的なものとして受け取るオウム真理教の態度は、もう少し広い文脈の中で、例えば「日本の家族の戦後史」や、更に「家族の近代史」の中で、理解しておく必要がある。
- ・戦後史の中で一貫して擁護され、強化されてきたのは、穏やかな意味における「個人主義」的な価値観である。
- ・宗教史に反映。・・・図式化→現実の親子関係の尊重や祖先崇拜を教義の核に置く宗教→イエスの方舟のような、現実の親子関係ではなく、理念化された親子関係を規範化する宗教を間に挟み、オウムに代表される親子関係や家族を否定する宗教へと展開してきた、と整理することができる。
- ・教団の内的な組織のあり方の推移「親子モデル」→「なかま－官僚制連結モデル」→「業務遂行組織－消費者接合モデル」が現れた。
- ・家族を含む伝統的な自生的集団に対する徹底した否定の身振りに類似したもの。  
ポル・ポトの民主カンプチア

- ・ポル・ポトの不安＝オウムの〈他者〉への恐怖と同じ種類のもの。

#### 4 クンダリニー＝サリン

##### クンダリニー＝サリン

- ・オウムは、家族を、最も原初的な関係性の方へと向けて、解体する。
- ・オウムが修行を通じて獲得しようとした身体は、相互に関係する二つの契機によって特徴づけることができる。
- ・オウムが修行を通じて獲得しようとした身体。※サリンとの関係
- ・仮説
- ・二重性
- ・秋山論文 オウム真理教を参与観察し、それに基づいて書かれたもの。
- ・「水中エア－タイト・サマディ」
- ・修行によって得られる身体と毒ガスとの結びつきは、信者たちによっても、わずかながら、しかし反転した形で自覚されてもいる。

##### サイバーパンクの想像力

- ・「サリン」への恐怖を糸口にして導出した身体と同じ形式の分裂を、電子メディアや電磁波に対する彼らの想像力を手がかりにして摘出することもできる。
- ・ESP 研究所
- ・電子メディアやマスコミは、拒否すべき否定性の代表とも見なされている。
- ・麻原とオウム真理教の思想と実践の困難
- ・同じ身体が敵対的な二つの相に引き裂かれざるをえなかったということにある。
- ・彼らが分離した二つの相－クンダリニーとサリン－は、本当は、身体と同じ水準に属しているのではないか？
- ・身体と同じ状態が、敵対的なものへと分極化していったのは、なぜだろうか？

##### 【三章のコメント】

※身体の手扱われ方が、斬新であった。

※家族の手扱われ方について、オウムの家族観が現代の人々の家族観にもつうじるものとして受け止められるのではないだろうか？ 緩やかな「個人主義」の延長として……。」

【本の全体をとおしての問題関心とコメント】

※注があったら、もっと読みやすかったのではないかと思うが意図的につけなかったのだろうか？

※あとがきにも書かれていたが、オウムの人たちにある親近感をもっている著者は、そのことも視野に入れて書いていたに違いないと思うが・・・。

※どこが冒険的論考なのか？一般の社会学にみられない新しい視点ということなのか？あるいは、少し無理な点もあるということなのだろうか？それをを用いることによるメリット・デメリットは？

※宗教論というよりも、自我論的な要素の強い本では、なかったかと思う。

※大変難しい本であったが、自分の中のオウムなるものを見つけだすことはまだ、難しい。ある種の恐ろしさは十分感じることはできたが・・・。

※オウムを通して、自分や現代社会を改めて見ることはできたのではないかと思う。

※オウムに特徴なるものが、果たして本当に特徴的なものであるのかという視点を持つことも必要なのではないだろうか。

〈参考文献と要約〉

高橋 英利 1996 『オウムからの帰還』 草思社

元出家社の若者の書いた手記である。オウムの実態を内部から知ることができると同時に、現代の若者像も垣間見ることができる。

島 進 1996 『消費される〈宗教〉』 春秋社

オウム真理教は、情報化社会に現れるべくして現れた教団だと説く。オウム真理教をめぐる報道のあり方もまた、情報社会において生じた事件を象徴するもの。

日本社会の高度情報化が、まもなくやってくる確かな未来であるならば、日本の宗教文化と社会の現状を性格に把握することは、避けることのできない通過点であるという主張をしている。

大谷 栄一 2000 『構築される信念—宗教社会学のアクチュアリティを求めて—』

我々は、今、どのように宗教を語ることができるのだろうか？これが、この本のテーマである。若手研究者による、生きた宗教現象との格闘の記録と言える。

時代、社会という鏡に様々な姿で映し出される宗教を、言葉で語るための力を手に入

れようと説く。

野田宣雄他 1999 「宗教戦争としての現代」『大航海』





『虚構の時代の果て—オウムと世界最終戦争—』

1960

アメリカ  
ソ連

理想

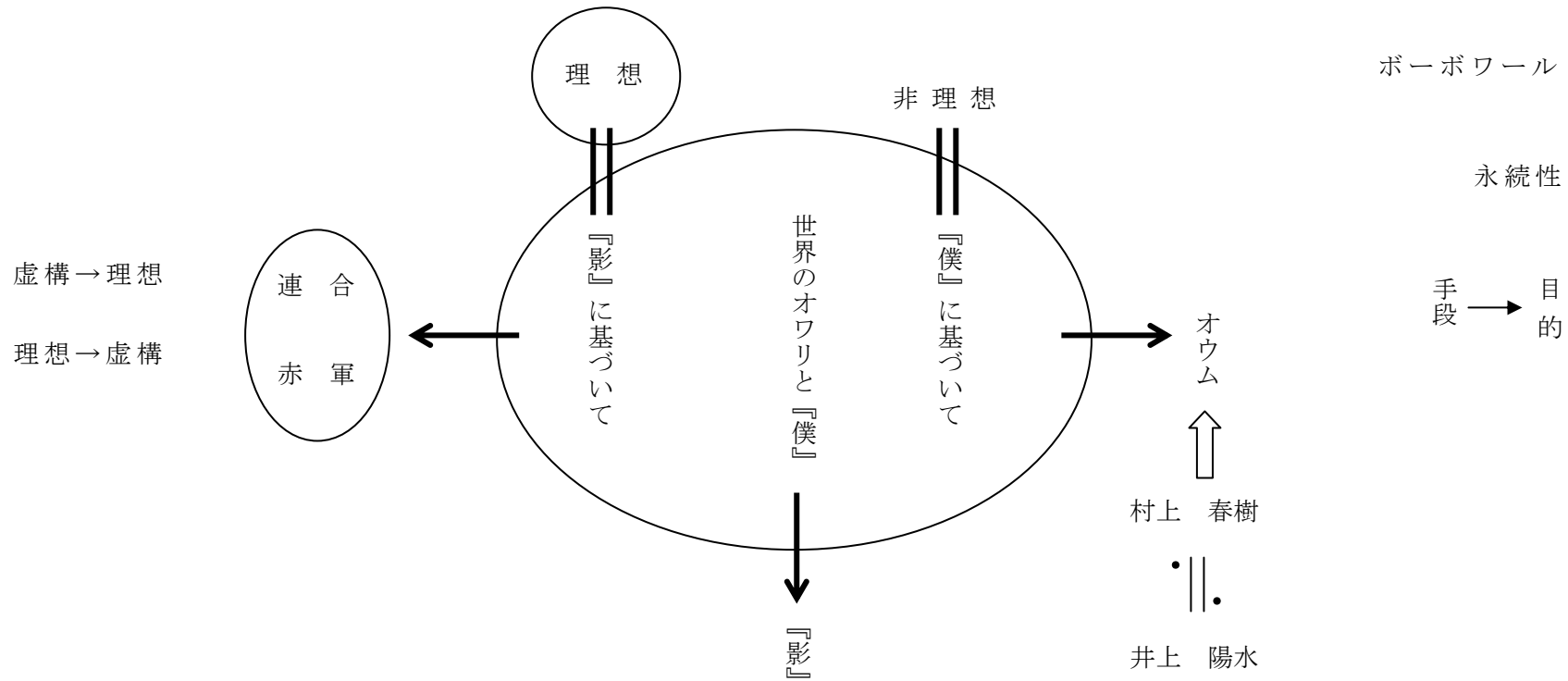
理想から虚構へ  
オウムの先行形



1960年代末

自己否定

「反帝・反スタ」という理想





**資料 6 水曜読書会第 52 回目レジュメ（大澤真幸『虚構の時代の果て』後半）**

社会学水曜読書会（2003 年 1 月 22 日）

**【大澤真幸『虚構の時代の果て—オウムと世界最終戦争—』  
ちくま書房（後半：145～300 頁）】**

檜田美雄（かしだ よしお）

徳島大学総合科学部

070-5681-4143 (PHS)

(kashida.yoshio@nifty.ne.jp)

**【今後の社会学水曜読書会の予定について】**

★2002 年 4 月から、つぎの 1 年の予定。

日程は、従来通り、第四水曜日。

ただし時間は 18 時半～。場所はとりあえず社会調査室。

★テキスト希望のある方は、お申し出（あるいは、次回持参）下さい。

+++++

**《総評》**

①違和感（例：多くの宗教は、そもそも「家族」を超越したものだっただけではないか。

戦争状態という認定は、（国際）法の範囲内という認定とこそ、親和的なのであって、オウムに関して、「戦争当事者」と「法の外」という認定の両方を実施することは論理的混乱ではないのか等々）もあるが、重要な論考 & 社会学的論考として評価できる。

②結論（代替策）には、納得できない。許容、は、伝統の尊重や、伝統への回帰、とどう違うのか。そのようなものがもはやないのが、「現代」ではないのか。

③9. 11 以後、という問いより、オウムの現代、の方が、重要だろう。たまさか、「9. 11（廃墟の現出）」は、「アメリカ」に「（一瞬の）やり直し」 & 「（自らの似姿としての）敵」攻撃を可能にしたが、たかだかその程度だ、ということがいえよう。

④近代的時間論、を説明原理に持ってくる必要はなかったのではないか。むしろ、3 章までのように「理想」の永続性の困難、からときおこしてくれれば、その方が納得しやすかったのではないか。「何ものかに手段的に従属することのない、究極の目的」という「理想」の困難、というはなしなら、「不倫のみが愛」というリアリ

ティが成立する話として、たとえば、解説することが可能になる。とすれば、大澤のラストのような、よくわからない「妥協」（寛容のすすめ＝伝統の無批判的な受け入れ：しかし、どの「伝統」が我々のうけいれるべき「伝統」なのか？＝）ではなく、ルーマンのような、諸コミュニケーション・メディアの棲み分けの共存、という解決イメージも検討課題としやすくなる。

---

## 《要旨》

第四章 終末という理想 145[小見出しのあとの数字は、頁を表す。以下同じ]

### ■1■二つの終末論

★「オウム真理教が提起してきたような破局的な終末論は、近代的な時間に対する完全な反措定である」→「近代的な時間の存立を可能にしている仕組みを概観しておく」

#### ★近代の時間意識

①時間は不可弱的な流れである

②時間の流れは無限である

vs.

古代の時間：反復や循環（c f。見田宗介）

（終末論はあってもおわりがはじめにつながっている）

↓

古代ユダヤ教が、直線・線分化した＝はじめと終わりが区別される神聖な終末論

||

肯定的終末論：救済にこそ関心の中心がある

c f。苦難の信義論が背景（現在の苦難は、未来の救済への希望によって補償）

＝苦難そのものの聖化

vs.

否定的終末論：破局の過程に、つまり世界を否定することに関心の焦点（オウム）

#### ★有限の時間

（終了しない時間観念にどのようにしてなったか。宗教の話というより理想の話）

「永続性」という観念の中間性≡媒介者・天使の視点

c f。時間（可滅性） vs. 永遠（無限性&超越性）

### ■2■決して終わらない時間

#### ★「不可能な教義」としての予定説

c f。修道院批判→生活全体の宗教化（原理主義としての宗教改革）

結果: 予定説 = 神の決定に人間は接近できない & 時間の無限性の確保 → 不可能さの処理

||

天使の視点の確保 = ( 目前の ) 千年王国論 ( キリストの来臨等 )

( あらかじめ選ばれたもののように生きる、ことの実践 )

l i k e 麻原。

千年王国論とは終末の先取り : 真の終末ははるかな彼方に展望されている

そのいっぽうで

先取りされた終末は非常にさしせまっている

( 迫っていないと、先取りとしての価値がない )

★ 追いつかないことと追い越すこと

★ 目的 = 理想を追求する活動が意味をもつためには、当然のことながら、目的 = 理想に未だに到達していない、ということが必要条件になる。

しかし、もし、そうなら、逆に、目的や理想を追求することが無意味なものになってしまう。

にもかかわらず、「予定説」が可能になるのはなぜか？

→ 視点の二重性の活用 ( p 172 の図 )

「おいこしてしまった視点」を活用。

必要になるのは、

おいこしてしまった地点を、未だに追いつかない地点へと格下げするすることの連続

★ 予定説的な終末論 ( 積分 ) と千年王国論 ( 微分 ) が互いに互いを支え合う ( 167 )

★ 地平線への旅、という比喻

### ■ 3 ■ 資本の背理

★ ( 広義 ) の資本こそが、( 不断に普遍化・抽象化していく ) < 超越性 > の最終的で集約的な形態である。

★ 剰余価値のふしぎと、172 頁の図。

||

等価交換のはずなのに、価値が生まれる不思議

★ < 超越性 > の消耗

c f 。ハイパーインフレーション、あるいは、

戦後史 ( 「理想の時代」 から 「虚構の時代」 への転換 )

#### ■4■ 破壊する神

★近代の時間のなかでは、「理想」は、実効的に人々を魅惑する力をうしなっていく

★「任意の理想が、排除し、否定せざるをえないことのみを内容とするような理想を設定する場合だけは、生の意味の空虚化に対抗することができる」185頁

||

絶対的破局の待望＝否定的終末論の価値

①現実が虚構に依存して秩序化されている

+

②虚構は、否定的な形式において、現実依存する他はない（194頁）

### 第五章 虚構＝現実 195

#### ■1■ アイロニカルな没入

★オウム選挙

なぜ、オウム教団は、「本気」で選挙に没入していたのか？

★ホーリーネーム

これらの名前は、……使用者同士の相互承認の機能に特化され……空虚な言葉がその空虚さのゆえに選好されているということ 206頁

★『天皇ごっこ』三沢知廉著。一水会。

天皇への真実の崇拝とそれを虚構として受け取る感覚とが矛盾するものではない  
暫定的に天皇を支持している≡内面的な根拠をもたずに、純粹に支持している  
(vs. 内面的な根拠をもって、何か理由をもって天皇を支持している)

#### ■2■ 「ごっこ」の存立構造

★三里塚での「反天皇」での高揚

★他者の想定

その虚構を現実として認知しているような他者の存在を想定することができるから

アイロニカルな距離を取って、かつ、虚構に内属できる 219頁

c f。貨幣（理論上ではなく、实际的に、物神崇拝者）

「任意の他者」は「個別の他者」とは別なので、

「反例」は、想定された事態を覆さない。

#### ■3■ <内在>と<超越>

★科学的合理性とオカルト的神秘主義との混融

||

★事実確認文 と 行為執行文

(真／偽) (適切／不適切)

偶有性の感覚 (242 頁) と整合するような

因果的必然でもなく、確率的でもない選択があることが前提

↑

因果論的に無根拠な否定生に実効性を与えるようなく超越的審級が必要

f r o m 神 …… f r o m 自由意志 (人間の主体性)

(この二重性の維持が必要。そうでなければ、神秘主義に科学は陥る)

||

オウムでおきたこと

★俗物ということ

横山弁護士にみる、麻原の俗物性→それこそは、麻原の<超越性>の根拠

「極限的に直接的」なコミュニケーション

■4■ 真我の理論

★不可能性の実体化

ある逆説。

モードの話。未来の他者達 (未来の第三者の審級) が承認するはずのものを現在において提起すること。

||

そのことによって、規範的に適切なものとそうでないものとの際だった区別を浸食していく

要するに、第三者の審級の普遍化の不可能性を表現するような、新しい第三者の審級が、つまり、承認されていないということを承認するようなあらたな第三者の審級が、志向の対象として結実する。

↓

自らの完全な普遍化の不可能性を表現する第三者の審級は、必然的に、具象的な実体として対象化されなければならない、経験的な領野に内属する事物でなければならない

(ここがミソ)

↓

信徒にとっては、癒されない苦痛 259 頁



(原因が説明されない苦痛、不足ではない苦痛)  
苦しみ自身の快樂化

★真我の理論

解脱＝選択しない私

同一性からの離脱の必要→その空虚に入り込む麻原のみは、空虚ではない。

オウム真理教の挫折の究極の原因 (264 頁)

■5■虚構＝現実

★他者として生きる

これがなぞとき

★ホロコーストとの類似

<他者>の過激な排除の必要性 (←<他者性>とは、自己であるということが他者であるということと両立してしまうような体験の水準、なので、<自己＝他者>とでも標記しうる体験を、再び強引に「自己／他者」と分節し、身体の自己同一性を回復しようとするから)

終章 ポアの思想を越えて 285

★総括 、と、 ポア

|| ||

善の絶対主義はそれ自体悪 悪の相対主義が、絶対の最高善の輝きへと転化

★オウムの思想と実践は、決して相対主義によっては乗り越えられない

相対主義の時代としての我々の時代では、これは我々の問題。

★権力構造の転換

もはやフリーコー的主体主義的権力があてはまらない

承認をへない権力が、過激に作動することを警察側にも見ることができる

★共存の技術

我々の内に進入してくる他者に対する徹底した寛容が不可欠の条件

例：『寄生獣』、『ナウシカ』、極限の寛容

相対主義であることの絶対化はオウムへの道、

第Ⅱ部

2007年度 徳島大学榎田ゼミ論集



### 第3章 家事をめぐる夫婦の互酬性の達成 ——「専業主婦家庭で夫が家事をする論理」のエスノメソドロジー解釈

中恵 真理子

#### 1. はじめに

高度成長時代に日本における近代家族の完成をみたことは、家族社会学においてはほぼ共通理解になっているといってもよいだろう（山田〔1994：165〕）。近代家族とは公共領域から家族を分離したことによって成立したとするなら、専業主婦とは近代家族が作り出したものである。日本では高度成長時代、都市労働者の賃金の上昇によって「専業主婦になる」ことを可能にした。その後、バブル経済とその崩壊によって、そもそも結婚すること自体が困難になった。が、正確には「結婚すること」が困難であるというよりは、近代家族を経て獲得した「上昇婚すること」が困難になったといった方が適切である。現在は格差社会の進行の中でセレブという特殊な階級のイメージが作り出されるようになった。そうした中で、今時の若者の専業主婦像の中には、「専業主婦であるが家事をするのは夫である」という意識を可能にするような論理が作られている。しかしそれは夫婦間の互酬性観念を取り払うことによって可能になっているのではなく、互酬性観念にあくまでも依拠しつつ、夫婦間の互酬性を捨てることによってその結果妻の愛情を達成するような、互酬性の否定による、究極的な互酬性の達成をしているのである。本論ではエスノメソドロジー会話分析を用い、この現象を解釈するのが目的である。

#### 2. 互酬性——エスノメソドロジーの課題

互酬性とは贈与の一形態であり少なくとも二人の社会関係を前提としてなりたつ。弘文堂の社会学事典によれば、次のように定義される。「互酬とは制度化された双方向性の贈与である。互酬では、交換と異なり、通常フローの向きによって贈与可能な材の種類が特定されており、かつ等価交換ではなく非対称的な贈与をその本質としており、常に競争的な性格がみられる」（佐藤俊樹〔1998：301〕）。つまり互酬性は二人以上の関係を前提にすることによって、二者間の非対称的な贈与を可能にしている。つまり子の親への介護を可能にしているのは<親—子>というカテゴリー対があるからこそ、親に養育を子に介護という行為を了解可能なものにしてしている。エスノメソドロジーの成員カテゴリー化装置では人をカテゴリー化することで規範を可能にし、そして規範をどのように用いて行為をし、また理解しているか、そのやり方自体を研究する。先ほどの<親—子>の対に存在する互酬性をギデنزは、今日以下のような性格を持っているものであるといっている。「今日、多くの親は、生物学的な母親なり父親であるだけでなく、継親にもなっている。継親は、通例、子供にたいして何らかの責務や権利を負っているが、こうした責務や権利は、今日で

は大人の側からはもとより子供の側からみても、一般にフィンチのいう意味での「互いに取り決めた自己投入」なのである。あるいは、成人した子供が高齢の親にたいして負っている義務の場合はどうであろうか？親が自分の子供に物質的社会的援助を期待できることを、多少とも当然視している社会や文化は一部にある。しかし、最近の明らかな趨勢は、構築された関係の質がこうした支援のあり方を決めているのである」（Giddens [1992=1995 : 147]）。

つまり＜親一子＞の互酬性は、決まったものではなくそのつど、例えば親がどれだけ養育に自己投入したかによって子が介護の義務を可能にも不可能にもするような実践を、＜親一子＞というカテゴリー対を用いることによって、理解可能にしている。

このように成員カテゴリー化装置によって、以下で＜夫一妻＞の互酬性を分析したい。それにより人々がどのように了解可能なカテゴリー装置を用い、それにどのような条件をつけているか、誰がどんな納得の仕方をしているかが見えてくる。と同時に人々があたりまえとして見ているものが見えてくる。

### 3. 専業主婦の夫が家事をすべきだと主張する現象——「ほうやけん、ま、旦那がしたらいいんじゃない？」

最初にデータについて若干説明しておく。2007年6月9日、家族社会学研究（徳島大学総合科学部人間社会学科、樫田担当）の一環として、杉浦郁子氏をゲストスピーカーに招いて、「パートナーシップに関するワークショップ」が開かれた。このワークショップの目的は「結婚する」という選択の意味を知ることを通して、未来の自分の暮らしについて考えるというものである。

ディスカッションは、自分の10年後の生活は以下のいずれかだと仮定し、四つの班に分かれて行われた。1, 異性のパートナーと暮らしている（既婚、専業主婦世帯）、2, 異性のパートナーと暮らしている（既婚、共働き世帯）、3, 一人暮らし（未婚）、4, 親と暮らしている（未婚）、である。つまり、ワークショップという場での想像上の暮らしを前提にした会話である。データは第四班、既婚、専業主婦世帯のものである。

4班 10:02:05 「ほうやけん、ま、旦那がしたらいいんじゃない？」 AVO6132007

- 01 B: はい。じゃあ。家事は？
- 02 C: 家事？ 出来たらしたくないな。
- 03 A: う ふふふふ
- 04 E: えっ、てことは旦那まかせってこと
- 05 B: えっ、なんか雇うん？

- 06 E: それとも親任せってこと？  
07 C: あっ、自分の両親？  
08 E: そ、うん。  
09 C: それはしたくないな。  
10 E: じゃあ、どうするん？  
11 C: ほうやけん、ま、旦那がしたらいいんじゃない？  
12 A: ふふふふふ  
13 B: ははははは  
14 E: 全部？  
15 B: どんな家庭だ。お前

データを見ていく。まず、問題にしている発話「ほうやけん、ま、旦那がしたらいいんじゃない？」は、Cの発話であることを確認し、それを中心に見ていくとこのように状況が理解できるだろう。Bはこのとき司会の役目をしており、Cが10年後の将来像について、質問に答えている。それ以外のA、D（ここでは、ホワイトボードに発言を記述していた）、E、Fは、Cにいろいろとつっこみを入れてくるという参与の仕方である。付言すると全員、女性であった。

01でBが家事は誰がするのかを質問すると、Cは、「家事？」と質問を復唱し、「出来たらしたくないな」と、答える。「出来たら」とは本来なら私がすべきだろうが、可能ならしたくないといっているようである。ここでCは、家事について、〈夫—妻〉というカテゴリー対のもとに、妻が家事をするべきだという通常の規範を理解していることを表示した上で、「したくないな」と、いっているのである。03の、Aの「う、ふふふふ」は、この構図を、自分も共有しているということを表示している。これに対してB、Eは04、05、06と矢継ぎ早に質問しているが、Cは自分の発話の反響に対して、06、Eの「それとも親任せってこと？」に反応を示す（07「あっ、自分の両親？」）。この「あっ」は英語の「OH」と対応するものであり、それが知識状態の変化を表す標識であるという（西阪〔1999: 79〕）。つまり、06、Eの「親任せ」の親は、自分の両親を指すことに、「今気付いた」と、表示しているのである。通常親とは、夫側の親と、妻側の親と両方を指すことが出来るが、妻側の親を指しているのだなという理解は、家事が〈夫—妻〉というカテゴリー対から〈夫側—妻側〉というカテゴリー対へと拡大した上で、妻側の両親が家事をするという理解に使われている。

08、Eの「そ。うん」はCの理解に対して納得の表示したものである。09でCが（それでも）「それはしたくないな」というと、Eは「じゃあ、どうするん？」と、なかば責め口調で問いただしている。ここで、11「ほうやけん、ま、旦那がしたらいいんじゃない？」と、切り返すのである。

「ほうやけん」は阿波弁で「そうだから」にほぼ対応する。家事は<夫一妻>では妻が、<夫側一妻側>では、妻側が、すべきだという規範に対して、私は、したくないと、思っている、だから、「旦那がすればいいんじゃない？」と主張してくる、そういう流れである。ここで、「ま」という、躊躇、限定付けが表示された上で主張がなされたことに注目したい。主張も少し声を低めにしてなされ、最後に語尾が上がっている。この語尾の上がりには質問ではなく、周囲に対して、賛同を求める「媚び」を感じさせる。実際、12、13で笑いとともにそれは達成されたことが、明示されている。では、この賛同は、何を根拠に達成されたと推測できるだろうか？

#### 4 「専業主婦の夫が家事をすべきだと主張すること」に対する女同士の納得の仕方

この、ディスカッションがなされる前、4班にこの日のゲストスピーカーである杉浦氏が、「できるだけ夢のある将来像を描いてね」と指示していた。Cはこの指示のもとに発言を構築していったのである。家事の話題に入る前、どんな家に住みたいか？という質問については、「デザイナーズマンションに住みたい」とこたえている。それに対して、「テレビにできるような？」と周囲が理解を表示している。またこの会話の後の、夫の年収については「わりとたくさん」、余暇は、「美術館めぐり」をし、社会関係は、「気軽にしゃべれる友達がいる、向こう（夫の両親）ともうまくやっていきたい」と、答えている。

こうした場中でなされた家事は、夫がしたらいいという発言は、専業主婦世帯では、<夫一妻>の妻がすべきだという規範を了解したうえで、なされている。つまり夫が妻の扶養を妻が家事を、という互酬性に乗った上で、それを否定することでなされている。それでは、夫が家事をしたらと主張する妻は、何を贈与しているのだろうか。それは主婦である私が、「美術館巡り」をし、「気軽にしゃべれる友達がいる、夫の両親とうまくやっている」この暮らし自体が夫への贈与だとしているのである。それは、<夫一妻>という互酬性に基づいているからこそ女同士の了解が得られるのだと推測できる。なぜなら専業主婦世帯では互酬性、与えあう関係であることに、実は妻の自立があるのであり、しかし、それをとっぴらってみせたことに、専業主婦という存在の仕方を、究極の形で白日の下にさらし、同時にしかもそれが夫への愛だと周囲に媚びてみせることで、無害なものとしている。これが女同士の納得をとりつけているのである。

#### 参考文献

- Giddens, Anthony, 1992, *The Transformation of Intimacy: Sexuality, Love and Eroticism*, Cambridge: Polity Press. (=1995、松尾精文・松川昭子訳、『親密性の変容 近代社会におけるセクシュアリティ、愛情、エロティシズム』而立書房)。
- 前田泰樹、2007、「規範があるとは、どのようなことか」前田泰樹他編『エスノメソドロジー』新曜社、99-120。

見田宗介他編、1988、『社会学事典』弘文堂。

西阪仰、1999、「会話分析の練習 相互行為の資源としての言いよどみ」好井裕明他編 『会話分析への招待』世界思想社、71-100。

落合恵美子、1989、『近代家族とフェミニズム』勁草書房。

佐藤俊樹、1988、「互酬」 in [見田宗介他編、1988] 300-301。

山田昌弘、1994、『近代家族のゆくえ 家族と愛情のパラドックス』新曜社。

1996、『結婚の社会学 未婚化・晩婚化はつづくのか』丸善。





## 第4章 グループディスカッションにおける参加の組織化 -ことば・うなずき・視線が参加の道具となること-

村中淑子

### 1. 本稿の目的

筆者は、2007年度前期、徳島大学総合科学部人間社会学科榎田ゼミに非公式メンバーとして参加した。ゼミのテキストは串田秀也 2006『相互行為秩序と会話分析』であった。本稿ではゼミ活動のまとめとして、串田秀也 2006の枠組みを用いてのビデオデータ分析を試みる。

串田の提示する「先取り完了」「投射可能性」「行為スペース」などが実際の会話データにどのように適用できるのかを検討しながら、串田の主張する「参加の組織化」の具体的様相を観察し、「ことばはメディアを整えるものとしての働きもあること」「ことばはともに居合わせる状況での参加を組織化する道具であること」を検証する。言語的リソースと合わせて、非言語的リソース（うなずきと視線）にも注目する。

### 2. データについて

ゼミ教官である榎田美雄氏担当授業「家族社会学研究」（徳島大学総合科学部人間社会学科）の一環として、2007年6月9日（土）午前9時から午後4時30分まで、「パートナーシップに関するワークショップ」（杉浦郁子氏担当）が開かれた。24名の受講生は4つの班に分けられ、それぞれに課題が与えられて討論を行なった。本稿で用いるのはそのうちの1つの班の録画データである（注1）。この班に与えられた討論のテーマは、「10年後、もし未婚で一人暮らしであった場合、どのような暮らしをしているか、具体的なイメージを描き、そのライフスタイルのメリットとデメリットを挙げよ」というものであった。班単位で討論したあと、受講生全員の前での発表と質疑応答が義務づけられていた。班は6名で構成され、司会者と書記が一人ずつ決められていた。

ビデオ録画から文字起こしした断片を材料に、検討を進める（注2）。

### 3. グループ討論における「参加の組織化」

#### 3-1. 発話のタイミングの計り合い

次に挙げる【断片1】を材料とする。この直前の部分では、一人暮らしのデメリットとしてどのようなことがありうるか、アイデアを出すべく話し合っている。一人暮らしの場合は自己管理ができてにくいという観点から、一人暮らしで困ることの具体的事例を挙げている。「借金、ギャンブル、自己破産」ということばが挙げられ、ホワイトボードにキーワードとして書かれる。それを見ながら司会役であるBが発言するのが、01Bである。

【断片1】 データ番号 vol.23 14:46:29～

01B：ここらへんの管理は確かにな，一人やったら難しいな.

02 (8.0)

03A：夜逃げとかは？

04B：それは：ちょっと. ((ホワイトボードを見る))

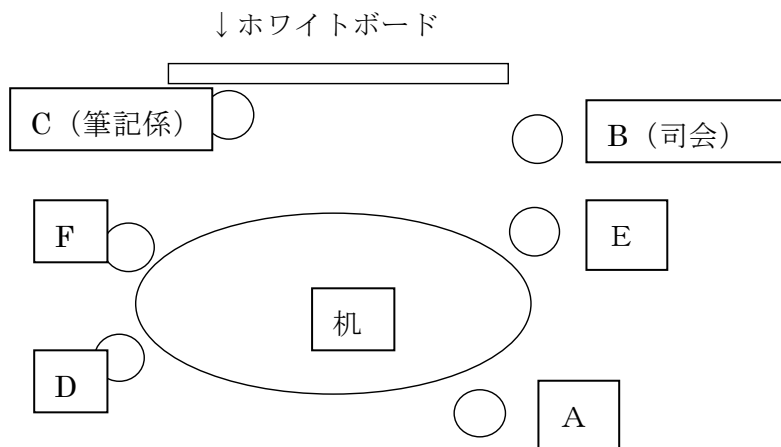
05C：ちょっとちがうな：. ((Aを見る))

06A：((Cを見てうなずく))

07B：手段：：手段ていうかまあ次の話や. ((Aを見て左手でボードを指す))



【画像データ1：ビデオカメラ撮影範囲】



【図1：ディスカッションメンバー配置図】

01Bの「ここらへん」が「借金、ギャンブル、自己破産」を指していることと、Bが司会であることから、01Bの発言はそれまでの話の流れをまとめたものであるとみられる。「確かに、一人やったら難しいな」と言うことによって、これらのことばがキーワードとしてあげられたことの妥当性を確認している。02は、筆記係であるCがこれらのキーワードをホワイトボードに書いており、C以外の5人はボードを見ながら黙っている部分である。01Bのまとめ発言の直後に誰も発言せず、8秒間の沈黙が起きていること、その間、全員がボードを見ていることから、01Bの内容が他のメンバーによって承認されていることがわかる。

しかし、このあと話がずっと当然の如く続けられることから見ても、まだ討論が終わっておらず、一人暮らしのデメリットについての意見を出し合い続けなければならないことは明らかである。つまり、ずっと沈黙しているわけにはいかず、誰かが発言しなくてはならない。02の沈黙は、Cが書き終わるまでは次の発話をしないで待っておこう、という共通理解による沈黙であるが、皆が互いに次の発話のタイミングを計っている時間でもある。

Cが書き終わってボードから少し離れ、司会であるBがごく小さく「うん」と聞こえるような声を発したすぐあとに、03Aの発言が起こる。やや長い沈黙の後のCの身体の動きとBのごく小さな声とも言えないくらいの声が、待ち時間の終わりを示し、それに応じて、Aが最も早く、話し手として自己選択を行なった。会話参加者の沈黙と動きと声によって、互いにタイミングを細かく計りながら発言機会を捉えていることがわかる。

### 3-2. 提案に対する否定がどのようにおこなわれたか

引き続き、【断片1】をみる。03Aでは、Aが提案をおこなっている。「とか」が例示を表し、「へは？」が他のメンバーへの問いかけを表している。それを受けてBが「それはちょっと」と言う。

日本語で誰かが何かを提案した直後に「それはちょっと」と言えば、否定の意味を持つ。「ダメ」「違う」などの明示的否定のことばがなくても、否定の意図を持つことは明瞭である。したがって、次の05Cは、04Bの先取り完了ではなく、04Bと同じ意見を述べたのである。Bと二人でAの提案を否定しているのである。

日常会話において、面前の相手の提案を即座に否定するというのは、緊張感を伴うことである。しばしば、否定の意図を持つ発話は「うーん」という言いよどみのフィラーで始まる（注3）。このフィラーは、一見そのことがらを真剣に検討中であるかのようにみせかけるものであるが実はその検討はうまくいかないと最初から考えていることが明らかであるようなフィラーである（言いよどみのフィラーに関するこのような解釈については、定延 2005 を参照した）。しかしこの【断片1】では、そのような言いよどみは無く、Bは即座に、しかもやや大きめの声で「それはー」と否定発話を開始している。なぜか。1つには、Bが司会者であり、話の流れを作る責任とある程度の権限を持っていることから許容される行動かと思われる。もう1つは、この場面が、授業で教師によって設定されたディスカッション場面であり、

意見をまとめた後に他のグループも含めた全員の前で結論を発表することが義務づけられているため、発表するに足る結論を導き出さねばならないという課題意識が参加者に共有されている。その結論に至る過程では、相手に対する明確な否定も許容されるのであろう。

それでもなおかつ、面前の相手の提案を否定するには、それなりの手続きを踏まねばならない。断片1でも、BとCがそれぞれに手続きを踏んでいるのが観察される。Cは「ちょっとちがうな」と言った後、Aに視線を向けている。それを受けて、Aははっきりとうなずいている。つまり一方的に否定して終わっているのではなく、Cは否定した後に相手の様子をうかがい、否定された側であるAもそれを受け入れている。CはAの受け入れを確認したあと、視線を外してホワイトボードに向かっている。つまりAC間の否定と承認は、次のような手順で行われている。

A：意見を言う

(B：Aの意見を否定する)

C：Aの意見を否定した後、Aへ視線を向ける

A：Cに視線を向けてうなずく

C：Aのうなずきを確認した後、視線を他へ向ける

一方、Bは、07Bで否定の理由を説明している。「夜逃げ」は「次の話」であるので現時点で出すべきキーワードとしては当てはまらないと言っているのである。つまり「夜逃げ」がまるきり不適切で見当違いな無効発言というわけではなく、「次の話」としては有効である可能性を示すことによって、否定を和らげているとも取れる。07Bの中には「ていうか」ということばも含まれており、これは自分の発話の内容の明瞭度を下げることばであると考えられるので、やはり和らげの意図を持つと解釈できる。さらにこの07Bの発話の終わり頃に、BはAを見て左手でボードを指している。ボードをさす動作と同時に、上半身をボードの方に僅かに傾けている。このことも、直立不動で話すのに比べて、和らげの効果を持つものであろう。Bによる否定は次のような手順である。

A：意見

B：Aの意見を否定する

(CとAとの連鎖)

B：否定の理由の説明（全否定ではないこと＋明瞭度の下げ）。和らげの身振り。

行為スペースという観点から見ると、次のようになる。03Aは他メンバーへの問いかけであり、問いかけというものは満たされる必要性をその場に投げかける。つまり03Aによって、行為スペースが投射され、04Bから07Bまでがそのスペースを埋める連鎖である。スペースを埋めているのはB・Cによる否定およびAによる承認とその他のメンバーの沈黙であり、言語形式だけでなく視線やうなずきまでが巧妙に配置されている。

### 3-3. 提案に対する肯定がどのようにおこなわれたか

次は【断片2】をもちいる。これは、断片1のすぐ後の部分である。やや長いが、一続きの内容を持つので、まとめて挙げたのち、部分的に検討していく。

【断片2】 データ番号 vol.23 14:46:48～

01B : なんか(.)Dくんとか(.)ない? ((Dを見ながら))

02D : なんか(.)事故とかで、とつぜん車椅子生活とか。

03B : あ : . .

04C : あ : , [そっか : .]

05B : [すごい(.)] リアルな言い方。

06C : 事故で : , 障害を持つとか。 ((ボードに書き込む))

07B : うん。

08 (18.0)

09B : 障害を持ってまうとか(.)な : るほどね : . ((ボードを見たりレジユメを見たりする))

10 ((Dを見て首を前に出し、左手でDをさす))

11D : う : : ん(.)て、それで : , もしたおれたら : , 発見してくれる人が

12C : = 孤独死。

13D : = いないから、

14B : それはまあ、あの、ろ老人であるけど(.)けど

15C : でもきいたことある、なんか大学生でも : ,

16B : うん。

17C : 風邪引いて : , もう寝込んでしまって : ,

18B : うん。

19C : なんじゃできんくて : , 栄養がとれんくて : , 孤独死したっていう。

20B : こ(.)こ(.)それはそれでかわいそうやけど(.)けど、ある、あるな : .

21A : ある hh.

22B : あるな : .

23E : でもなんか脳梗塞とか(.)いきなりいったらさ : .

24B : うんうんうん。 ((ことばに合わせて3回うなずく))

25E : あれやん、発見遅れたら。

26B : そう。

27C : 倒れたら、倒れたらって書いとこ。

28A : 誰も発見してくれへんし。

29B : そう。

30 ((EとAが視線を合わせてうなずき合う))

31B : 急に倒れたら hh.

32C : ((ホワイトボードに書き始めながら)) 急に倒れたとき.

33B : うん.

34 (3.0)

35B : ん嫁さんがおったら絶対助けてくれるけど.

上記のやりとりをごく大まかにまとめてしまえば、Dの提案に他のメンバーが賛成して、キーワードが決定される、ということである。

Dの提案に対して、他のメンバーがどのように肯定したか、みていく。

まず01でBがDに意見を出すように促す。02ではそれに応じてDが話し出す。断片1の01Aと同様、02Dでは「とか」が使われて、控えめな形で提案がなされる。BとCは「あー」と納得の声をあげ、「そっか」「リアル」と同意を示す。06Cは、02Dの「車椅子生活」を「障害を持つ」とパラフレーズしてみせながらボードに書き込んでいる。Bはそれについて「うん」と承認し、18秒間の沈黙が生じる。ここまでは、Dの提案についてBとCの二人が明示的に同意を示し、他のメンバーも沈黙によって承認している。

#### 3-4. 先取り完了かどうかについての検討

【断片2】を用いた分析を続ける。08の沈黙からみていく。

この沈黙を破るのは誰でもよかったはずであり、次は何らかの新しい提案があってもよかったはずであるが、実際は、司会者のBが09BでDの提案を繰り返して口に出し、あらためて「なるほど」と納得を示す。次の話の流れを積極的に作り出すのではなく、時間稼ぎともとれる行動である。09の前後に、Bがボードを見たりレジュメを何度も見たり、伸びをするような動きをしていることから、次にどの方向へ話を進めるか迷っているような様子がかがえる。その後Bは、ボードから参加者に視線を移す。Dと視線が合い、発話はしないまま、Dに向かってどうぞというような身振りを示す。Bは、長い沈黙の後、積極的ではない形で、Dを次話者として選択したのである。

ここで、次話者選択の次のやりとりを短く再掲する。

【断片2(1)】

11D : う : : ん(.)て, それで : , もしたおれたら : , 発見してくれる人が

12C : = 孤独死.

13D : = いないから,

Dは11Dで最初に「うーん」と言いよどみを置きつつも話し出す。「それでー」とつないでいることから、02Dの続きであるとわかる。Dが発話を完了させないうちに(発話が終了していないことは音調からも明らかである)、Cが「孤独死!」と叫ぶ。Dはそのまま発話を続け、11Dで開始されたターンが13Dに接続してとりあえずの完了をみる。「遅れた完了」である。

11Dの「それで」が受けている内容は、02Dの「事故とかで車椅子生活とか」であり、11D

の「もしたおれたら」の倒れる主体は、車椅子生活になった一人暮らしの人である。つまり、11Dの「発見してくれる人が」と13Dの「いないから」がつながって、「倒れたときに発見してくれる人が居ない」ことが討論のテーマである「一人暮らしのデメリット」であるという、ひとまとまりの意味を持つ。すなわち、少し前の自身の提案発話が承認されたことを受けて11Dの内容があり、11Dと13Dは、12Cをまたいで、12Cとはかかわらずに、一続きのセットになって1つの命題を構成している。

ここで問題となるのが12Cである。12Cは、直前の11Dとは統語的につながらない。「可能な統語的続き」（串田 2006 の 160 頁）ではないので、「先取り完了」の定義には当てはまらない。しかし、先取り完了でないとしたら、12Cはいったい何なのか。

12Cは、名詞が1つだけ、大きめの音量で勢いよく発せられた発話である。C自身の先行発話としては04Cと06Cがあるが、これらは12Cとは直接的な継続性が認められない。しかし12Cが、他のメンバーによって行なわれている前後の発話となんの関係も無く発せられているとは考えられない。とつぜん関係ないことを口にする場合、「あっ」というフィラーが入る可能性が高いであろうことから、「あっ」無しで名詞1つのみを叫ぶ場合は、関連性のある可能性が高い。どの部分とどう関連があると解釈するのが最も妥当だろうか。

結論としては、12Cは、やや変則的ではあるがやはり先取り完了である、と考える。Cは、11Dを聞いた時点で、13Dの文言がほぼ正確に予測できたのであると思われる。その上で瞬間的に13Dに接続しうる12Cを発した。つまり、「倒れたら発見してくれる人がいないから」までのまとまりが頭に思い浮かんだ上で、内容的帰結でありかつ統語的にも接続可能な「孤独死！」という語を発した。これはさほど不自然な解釈ではないだろう。「倒れたら」のタラは仮定条件を表す。仮定的な状況の設定である。後ろにはその状況下で起こりそうな結果を表すことばが配置されるのが通常である。仮定条件の「～たら」は、その条件下で起こる結果を投射するわけである。ただし、結果の内容を表す具体的文言は、ここまで聞いた時点では予測可能ではない。投射の一部を埋めるものとして、Dが「発見してくれる人が」までを発話した時点で、「人が」を受ける述部が「いない」という文言であることが、D以外のその場の参加者にも予測可能になる。そして「一人暮らしの場合、倒れたら発見してくれる人が居ない」→次はどうなるか→「孤独死」するという結論付けがCによって瞬時になされ、音声化された。浮かんだアイデアを急いで発するため、勢いのよい発音で名詞1つだけを発した。次のような連鎖になっている。

11D：ターンの開始

12C：(11Dを聞いて13Dをほぼ正確に予測した上での)先取り完了

13D：自らが開始したターンの完了(12Cについては「介入扱い」)

時間軸上では、11D→12C→13Dという配置であるが、命題内容的には11D(→13D)→12Cとなる。このように時間軸上の配置と命題内容上の配置にズレがあるのは例外的な現象のようにもみえるが、実際の会話では、人は必ずしも相手の発話に文法的につながるように気をつ



けて慎重に話しているわけではなく、予測や連想に基づいて思いついたことを急いで発話するということも見られる。改まった場面でない場合には、むしろよくある現象なのではなかろうか。単なる先取りではなく、推測を含めたやや飛躍した先取りであり、「超」先取り完了とも呼べそうな現象である。

### 3-5. 「でも」と「そう」と「うん」がいかに使われているか

【断片2】を用いた分析を続ける。11D・12C・13Dの連鎖を受けて、司会のBが、反論をしかける。「それはまあ」で譲歩の態度を示しているが、「老人であるけど」と言う。老人ならばありうるが自分たち（20歳前後の若者）の10年後には関係ないのではないかと、という反論である。

それに対してCが「でも」で主張を始める。15から19までで、老人ではなく大学生が孤独死した例を示して、反論に対抗している。20Bでは、Bは「かわいそうやけど」までは反論モードであったが、「けど、ある、あるなー」と途中から納得モードに切り替わる。話しながら頭の中で反芻して納得したような様子である。

そのあとAも「ある」と賛同し、Bも「あるなー」とあらためて同意を示す。

その次のひとまとまりを再掲する。

#### 【断片2(2)】

23E：でもなんか脳梗塞とか(.)いきなりいったらさ：.

24B：うんうんうん. ((ことばに合わせて3回うなずく))

25E：あれやん，発見遅れたら.

26B：そう.

27C：倒れたら，倒れたらって書いとこ.

28A：誰も発見してくれへんし.

29B：そう.

30 ((EとAが視線を合わせてうなずき合う))

23Eは、「でも」で始まっている。15Cの「でも」が直前の14Bへの反論のマーカ―として使われているのに対して、この23Eの「でも」は、直前の22Bへの反論としては成り立たない。23Eの発話内容を見ると、Cの主張への賛同、Cへの応援のような内容である。

【断片2】を通して、参加者の意見対立を取り出すならば、「14B・20B 対 それ以外」とみてよいだろう。つまり、23Eの「でも」が反論のマーカ―として成立しうるのは、14B・20Bに対する反論なのである。「でも」は直前ではなく少し離れた先行発話への反論マーカ―としても使えるということであろう。そして次の24BではBが大きく何度もうなずきしているのであるが、Bは既に承認したので自分は反論される側ではなくなった、ということをも主張するために同意を強く表明しているのであろう。つまりBはEの「でも」という反論マーカ―を受けて、強いうなずきを行なっているわけである。【断片2(2)】は次のように書き変えることが

できる（Bの発話のみ、具体的文言をカッコに入れて示す。）

23 E : B への反論 = C への賛同

24 B : 「うんうんうん」

25 E : 23 E の続き

26 B : 「そう」

(27 C : ボードを書こうとしつつ、ひとりごと)

28 A : 23 E に賛同し、25 E の訂正

29 B : 「そう」

30 E と A が相互に承認

この B による「うん」と「そう」について考察する。

26 B・27 B の「そう」はともに直前発話にのみ焦点が当たっており、直前発話を承認しているものである。串田は、「「そう」は、自分の開始した活動の途上で行われた相手の発話が、その活動を自分に代わって促進したことを認定するために用いられうる」と述べている（串田 2006 ; 189 頁）。このことを上記の会話に应用すると、26 B は 25 E を、29 B は 28 A を、B 自身が開始した活動を代わって促進したものとして認定しているのである。では、「B が開始した活動」とは何か。司会として、意見をまとめることである。つまり、意見をまとめる活動を自分に代わってしてくれたものとして認めるために「そう」を用いているのである。司会者という役割を果たすための「そう」の使い方である。

24 B の「うん」は相手の発話を承認するために用いられている。「うん」を 3 回繰り返して、強く何度もうなずいている。ただ単に 23 E を承認するだけでこのような繰り返しや強さが表出されるのは不自然である。これは、先行発話における C の意見をも含めて承認したのであると思われる。串田 2006 によれば、「「うん」は、自分の開始した活動の途上で行われた相手の発話が、その活動を自分に代わって促進してはいないときに、それが行われたことを承認するために用いられうる」。上記の「そう」と対比すると、24 B の「うん」は意見まとめで自分に代わってしてくれたものとして扱っているのではなく、あくまでも他者の意見である E や C の意見に対して、同意したという自分のスタンスを明らかにしているものである。

司会者 B は「うん」で他者に同意したのち、「そう」で自分がまとめるべき方向に進んでいることを確認しているのである。

#### 4. まとめ

以上、大学生によるグループディスカッション談話の一部をみてきた。グループで意見をまとめていく過程で、参加者の発話開始に司会者がどのように行われたか、参加者が互いの意見を否定したり肯定したりする方法がどのようなものであるか、参加者による「でも」や司会者による「そう」「うん」がどのように使われるか、等を観察した。「先取り完了」「投射可能性」「行為スペース」等の分析装置を用いた。先取り完了の興味深い変種が発見された。ディスカッショ

ン参加者は、言語的リソースと非言語的リソースを駆使して、参加を組織化していることがみてとれた。

本稿はゼミ活動のまとめとしての試論である。今後、さらに深める必要があろう。

注1 筆者は、このワークショップにおいては、受講者ではなくビデオ係として同席した。

注2 本稿のトランスクリプトの記号は串田 2006 に従っている。ただし、コンマとピリオドに関しては問題があるかもしれないと感じた。コンマについては「直前部分が継続を示す抑揚で発話されていると見なせることを示す。たとえば下降＋上昇の抑揚など。」とされているのをそのまま踏襲したが、「継続を示す抑揚」は、網羅的に示しておいたほうがよいのではないか。本稿では、「下降＋上昇」だけでなく、「上昇＋下降」（終助詞ナーによくある音調）や「下降しきらない短い下降」のような音調も、継続を感じさせるものとして含めてある。ピリオドについては「直前が下降調の抑揚で発話されていることを示す」とされているが、ひとくちに下降といっても、急激な下降や緩やかな下降、短い下降や長い下降がある。本稿では「下降調」かつ「文の終了を感じさせるもの」をピリオドとした。

注3 フィラーとは「うーん」「えーと」「あー」のようなことばを指す。発話の前後に挟み込まれる短いことばで、実質的意味は持たないが談話的機能をもつことばである。

追記：本稿の内容は、2007年9月12日の榎田ゼミにおいて発表した内容に、大幅な加筆を行ったものである。ゼミでご意見をいただいたおかげで、トランスクリプトの不明部分を補足し分析を深めることができた。感謝します。

#### 参考文献

蓮沼昭子・有田節子・前田直子、2001、『条件表現』くろしお出版

串田秀也、2006、『相互行為秩序と会話分析』世界思想社

西阪仰、1999、「会話分析の練習 -相互行為の資源としての言いよどみ」、好井裕明・山田富秋・西阪仰編 1999『会話分析への招待』世界思想社

定延利之、2005、『ささやく恋人、りきむレポーター 口の中の文化』岩波書店

## 『社会学とともに』添付DVD収録データ一覧

=調査実習報告書、ゼミ論集並びにディスカッションペーパー等関連データ=

### 0：収録データの目次一覧

#### 1：エスノメソドロジーとその周辺

－平成9年度徳島大学総合科学部榎田ゼミナール ゼミ論集－

1998年3月発行

#### 2：ラジオスタジオの相互行為分析

－平成9年度徳島大学総合科学部社会調査実習報告書（第二版）－

1998年10月発行

#### 3：エスノメソドロジーと福祉・医療・性

－平成10年度徳島大学総合科学部榎田ゼミナール ゼミ論集－

1999年2月発行

#### 4：障害者スポーツにおける相互行為分析

－平成11年度徳島大学総合科学部社会調査実習報告書（第一版）－

2000年2月発行

#### 5：日常生活の諸相

－平成11年度徳島大学総合科学部榎田ゼミナール ゼミ論集－

2000年2月発行

#### 6：現代社会の探究

－平成12年度徳島大学総合科学部榎田ゼミナール ゼミ論集－

2001年2月発行

#### 7：インタビューと対話の相互行為分析－気配りと配慮の社会学

－平成14年度徳島大学総合科学部社会調査実習報告書（第一版）－

2003年2月発行

\*本文データは第二版とほぼ同内容のため、未掲載

\*調査実習報告会関連資料 ・7-補 a（調査実習報告書添付DVD収録データ）

・7-補 b（調査実習報告書添付DVD未収録データ）

#### 8：インタビューと対話の相互行為分析－気配りと配慮の社会学

－平成14年度徳島大学総合科学部社会調査実習報告書（第二版）－

2003年9月発行

#### 9：社会学の窓－ドラマティックな日常生活－

－平成15年度徳島大学総合科学部榎田ゼミナール ゼミ論集－

2004年2月発行

#### 10：義肢・装具のエスノメソドロジー

－平成16年度徳島大学総合科学部地域調査実習報告書－

2005年2月発行

11：生活の中の相互行為

ー平成17年度徳島大学総合科学部榎田ゼミナール ゼミ論集ー

2006年2月発行

12：鍼灸のエスノメソドロロジー

ー2006年度実習報告書&大学院人間・自然環境研究科地域社会論Ⅲ

・社会組織論レポート集ー

2007年2月発行

・12ー補 a (平成18年度6月9日\_MP3データ)

13：『医学教育のエスノメソドロロジー』本体データ (総合版 PDF) 2007年3月発行

13ー補：『医学教育のエスノメソドロロジー』付録 DVD 収録データ

(119X 消防データ重複分を除く)

14：榎田 美雄

ある戦争遺跡にみる追悼の重層性と相互反映性

ー地域づくり資源・学習資源・観光資源としての陸軍病院壕ー

in 副田義也 (編) 『死の社会学的研究：平成17年度～平成19年度科学研究費補助金 (基盤(A)) 研究成果報告書』掲載頁 P.146～P.154

2008年3月発行

15：中恵 真理子・榎田 美雄・吉沢 毅・山本 明子・佐藤 和喜雄

<聴声 (ヒアリング・ヴォイシズ) >というアプローチが紡ぎ出す世界

ーインタビュー記録と若干の覚え書きー

in 『Discussion Paper in Social Sciences』第4号 P.1～P.23

2008年5月発行

## 目次一覧表

<p>1 : エスノメソドロジーとその周辺          ー平成9年度徳島大学総合科学部榎田ゼミナールゼミ論集ー</p> <p>執筆者一覧          まえがき 榎田 美雄・・・1</p> <p><b>第I部 論文</b></p> <p>虐待と試練の間ー『巨人の星』に見るー          出口 陽子・・・3</p> <p>問われる人工妊娠中絶の是非          李 裕美・・・15</p> <p>セクシュアリティ再認装置としてのアダルトビデオ          奥田 さやか・・・25</p> <p>「愛」と「性」          ービデオ「シルバーエイジの性生活」を通してー          津村 知世・・・35</p> <p><b>第II部 研究ノート</b></p> <p>失語症患者のコミュニケーション          ーC. Goodwinの論文をもとにー          寺尾 香名子・・・49</p> <p>書評“ゴッフマン『スティグマの社会学』を読む”ースティグマのある人と常人の相互による受け入れー          杉野 ふき・・・65</p> <p>ガーフィンケル・シュッツ・パーソンズの関係          ーヘリテイジを参考にしてー          高木 竜輔・・・73</p> <p>近代家族と結婚についての考察          荒木 絹子・・・83</p> <p>信頼論研究ノート 中恵 真理子・・・93          奥付</p>	<p>2 : ラジオスタジオの相互行為分析          ー平成9年度徳島大学総合科学部社会調査実習報告書(第二版)ー</p> <p>まえがき 榎田 美雄・・・1</p> <p><b>第I部 本を読む前に</b></p> <p>トランスクリプト記号一覧・配置          空間班・人間班・・・5</p> <p>Qシート 人間班・・・9</p> <p><b>第II部 本文</b></p> <p>研究概要 榎田 美雄・・・13</p> <p>第1章 ラジオスタジオ空間におけるカテゴリー化          空間班・・・15</p> <p>第2章 ラジオスタジオ内における相互行為分析          ーチーフアナウンサーの二重性を中心としてー          人間班・・・31</p> <p>第3章 ラジオ番組内のコーナー終了部分における相互行為分析          インタビュー班・・・45</p> <p>第4章 オープン・スタジオにおける番組参加者の志向性ー参与フレーム・マイク・リスナーー          FMやまのは班・・・57</p> <p><b>第III部 付録</b></p> <p>第1章 トランスクリプト例          学生全員・・・71</p> <p>第2章 インタビュー報告          インタビュー班・・・97</p> <p>第3章 放送人においてレリバントなこと          ー放送関係者養成専門学校を訪ねてー          榎田 美雄 ・ 森川弘章・・・161</p> <p>執筆者一覧          信頼論研究ノート 中恵 真理子・・・93          奥付</p>
---	---

3：エスノメソロジーと福祉・医療・性  
－平成10年度徳島大学総合科学部榎田  
ゼミナール ゼミ論集－

執筆者一覧

まえがき 榎田 美雄・・・1

**第I部 エスノメソロジー**

書道教室のインストラクション場面におけるビデオ分析 津村 知世・・・3

盲人卓球に見るスポーツのおもしろさ 奥田 さやか・・・15

居酒屋厨房における相互行為分析 荒木 絹子・・・27

演芸場にみる笑いの協同的達成 寺尾 香名子・・・39

**第II部 福祉・医療・性**

老いを生きる－シニアボランティア研究－ 李 裕美・・・51

インタビューを通しての地域的偉人の評伝研究 杉野 ふき・・・63

在宅介護におけるワークプレイス研究  
－ある人の在宅介護での生活について－ 阿波 三奈加・・・75

空間の社会的認識  
－動物病院における診察室の相互行為分析－ 出口 陽子・・・85

「トラスト」論文から「アグネス」論文へ  
－ガーフィンケル〈信頼〉概念の系譜－ 早崎 一修・・・97

女性障害者とセクシュアリティの近代 岡田 叔子・・・105

対象としての〈もの〉と〈ひと〉 根矢 三千代・・・111

ジンメルとフェミニズム 市原 初美・・・117

書評“アリエス『〈子供〉の誕生－アンシャン・レジム期の子供と家族生活－』” 高橋 孝枝・・・123

**第III部 コメンタール アメリカ社会学会倫理規約 1997**

早崎 一修・高橋 孝枝・阿波 三奈加

市原 初美・根矢 三千代・岡田 叔子・・・131

奥付

4：障害者スポーツにおける相互行為分析  
－平成11年度徳島大学総合科学部社会  
調査実習報告書（第一版）－

まえがき 榎田 美雄・・・1

**第I部 本を読む前に**

トランスクリプト記号一覧・配置 車椅子バスケットボール班・・・3

日程表 各班・・・4

調査依頼文例 盲人卓球班・・・5

**第II部 本文**

第1章 ルールの運用からみる盲人卓球 盲人卓球班・・・7

第2章 車椅子バスケットボールとは  
どのようなスポーツか？  
－「相互反映性」と「文脈依存性」－  
車椅子バスケットボール班・・・25

**第III部 付録**

第1章 トランスクリプト例 ろう者バレーボール班・・・45

第2章 障害者スポーツと人生  
－障害者水泳選手へのインタビューの記録－ 阿部 智恵子・・・53

執筆者一覧・・・79

奥付

## 5：日常生活の諸相

－平成 11 年度徳島大学総合科学部榎田ゼミナール ゼミ論集－

### 執筆者一覧

まえがき 榎田 美雄・・・1

家屋の近代化と家族の近代化

－日本の住居空間の使われ方を一例として－

市原 初美・・・3

在宅介護における相互行為分析

岡田叔子・・・27

介護の世界における性の位置

－老人福祉施設における男女の性別・その取り

扱われ方－

阿波 三奈加・・・55

同性愛者のカテゴリー化実践

早崎 一修・・・79

おかまバーにおける相互行為分析

根矢 三千代・・・101

奥付

## 6：現代社会の探究

－平成 12 年度徳島大学総合科学部榎田ゼミナール ゼミ論集－

### 執筆者一覧

まえがき 榎田 美雄・・・1

### 第Ⅰ部 制度に生きる

選挙討論及び開票速報の秩序分析

－第 42 回衆議院選挙報道をもとにして－

石村 典子・・・3

特別養護老人ホームにおける高齢者とスタッフの相互行為分析

幸田 裕紀・・・23

車椅子テニス場面に見るスポーツ実践の研究

坂井 理恵・・・43

美容院における相互行為分析

小濱 智子・・・63

陶芸教室のビデオ分析

小林 美保・・・75

「障害学」を越えて－理論的考察－

阿部 智恵子・・・87

### 第Ⅱ部 地域に生きる

段階的撤退－阿川（仮名）町防災集団移転事業を事例として－

浜松 真理子・・・97

自治体における一般廃棄物排出量の決定要因－

香川県を題材として－

梯 恭一・・・113

奥付



7：インタビューと対話の相互行為分析－  
気配りと配慮の社会学

－平成14年度徳島大学総合科学部社会  
調査実習報告書（第一版）－

第I部 本文を読む前に

執筆者一覧	山尾・・・2
まえがき	樫田 美雄・・・3
トランスクリプト記号一覧	3班・・・5

第II部 本文

第1章 福祉関係事務所内における共同的業務  
処理－促される「自発性」あるいは課題達成の  
ためになされていること－

1班・・・7

第2章 公的場面における電話と協同的業務処  
理－「携帯電話」と「印鑑」めぐって－

1班・・・33

第3章 会話における秩序－インタビューはい  
かにして可能になるか－

2班・・・57

第4章 インタビュー場面における相互行為分  
析－ある高齢女性に対するビデオ分析結果か  
ら－

3班・・・91

第III部 付録

第1パート

インタビュー記録	各班・・・105
・社会福祉協議会事務局長	(1班)
・ボランティア協力者	(2班)
・被サポート者	(3班)

第2パート

調査の実際

各班・・・187

A. 6月5日 後山さんインタビューでの失  
敗とその分析 (1班：漆原、黒田)

B. 撮影機器の準備と配線の苦勞  
(2班：小野)

C. 調査における失敗と苦勞－その分析と  
対策の検討－ (2班：師橋)

実習日程表 (調査スケジュールを含む)

3班・・・205

収集データ一覧と調査依頼文例

3班・・・207

奥付

樫田 美雄・・・212

8：インタビューと対話の相互行為分析－  
気配りと配慮の社会学

－平成14年度徳島大学総合科学部社会  
調査実習報告書（第二版）－

執筆者一覧

山尾・・・1

第I部 本文を読む前に

まえがき	樫田 美雄・・・3
トランスクリプト記号一覧	3班・・・5

第II部 本文

第1章 福祉関係事務所内における共同的業務  
処理－促される「自発性」あるいは課題達成の  
ためになされていること－

1班・・・7

第2章 公的場面における電話と協同的業務処  
理－「携帯電話」と「印鑑」めぐって－

1班・・・33

第3章 会話における秩序－インタビューはい  
かにして可能になるか－

2班・・・57

第4章 インタビュー場面における相互行為分  
析－ある高齢女性に対するビデオ分析結果か  
ら－

3班・・・91

第III部 付録

第1パート

インタビュー記録	各班・・・105
・社会福祉協議会事務局長	(1班)
・ボランティア協力者	(2班)
・被サポート者	(3班)

第2パート

調査の実際

各班・・・187

A. 6月5日 後山さんインタビューでの失  
敗とその分析 (1班：漆原、黒田)

B. 撮影機器の準備と配線の苦勞  
(2班：小野)

C. 調査における失敗と苦勞－その分析と  
対策の検討－ (2班：師橋)

実習日程表 (調査スケジュールを含む)

3班・・・205

収集データ一覧と調査依頼文例

3班・・・207

奥付

樫田 美雄・・・212

9：社会学の窓ードラマティックな日常生活ー

ー平成15年度徳島大学総合科学部榎田ゼミナール ゼミ論集ー

執筆者一覧

まえがき 榎田 美雄・・・1

結婚式の着付けにおけるエスノメソドロジーー

控室空間の社会的達成ー

師橋 奈見・・・3

ダンス教室のインストラクション場面における相互行為分析

西下 文恵・・・29

身体障害者施設における相互行為分析

ーリハビリ訓練場面からー

西寄 亜希・・・55

語りによる20代未婚女子の幸福の物語

ー同居という生き方が選択されたわけー

山尾 美奈・・・81

不安や心配のコントロール

ー乳がん患者のインタビューからー

田中 文恵・・・107

地域住民参加型の新しい子育て組織の研究

ーファミリー・サポート・センターで何が起きているかー

木野 綾子・・・113

奥付

10：義肢・装具のエスノメソドロジーー

ー平成16年度徳島大学総合科学部地域調査実習報告書ー

執筆者一覧 原田 越代・・・2

第I部 本文を読む前に

まえがき 榎田 美雄・・・3

トランスクリプト記号一覧

原田 越代・・・6

第II部 本文

第1章 食堂の中の交差点ー車いすのエスノメソドロジーー

林 佑香・・・7

第2章 道具の非道具的利用ーことばやものが実際に使われている様子の研究ー

原田 越代・正島 祐子・榎田 美雄・・・17

第3章 職場のエスノメソドロジーー

正島 祐子・・・29

第4章 ある入所者の一日の活動を追って

田中 文恵・・・39

第5章 戸を閉めることのアフォーダンス

佐々木 実花・・・49

第III部 卒論報告

音を取り巻く相互行為分析ーギター教授演奏場面を事例としてー

吉野 秀紀・・・69

第IV部 付録

第1章 インタビュー記録

渡辺 広一さん(仮名)インタビュー記録1

佐々木 実花・・・81

辺 広一さん(仮名)インタビュー記録2

正島 祐子・・・91

大見 敏一さん(仮名)インタビュー記録

原田 越代・・・97

加勢 賢一さん(仮名)インタビュー記録

林 佑香・・・103

北川 信一さん(仮名)インタビュー記録

田中 文恵・・・109

第2章 調査の実際

A. 調査用具と収集データ一覧

佐々木 実花・・・113

B. 調査依頼状例と礼文例

原田 越代・佐々木 実花・・・115

C. Y 義肢工場訪問報告 林 佑香・・・117

D. インタビュー記録作成の苦勞

原田 越代・・・121

E. 撮影の苦勞

正島祐子・・・125

F. 報告書作成の苦勞 田中 文恵・・・127

G. オブザーバーとして 田村 直樹・・・129

奥つ 榎田 美雄・・・132

## 11：生活の中の相互行為

－平成 17 年度徳島大学総合科学部榎田  
ゼミナール ゼミ論集－

執筆者一覧

まえがき 榎田 美雄・・・1

施設内コミュニケーションの相互行為分析－身  
体の意義に注目して－

林 祐香・・・3

「自己コントロール」の成功としての嗜癖\*

－理論的考察および若干の経験的例証－

佐々木 実花・・・23

就職支援室における相互行為分析

田中 文恵・・・49

あるセルフ・ヘルプ・グループを運営すること

－ある心身障害者家族の会を例にして－

正島 祐子・・・63

貧困問題の現在の位相

中恵 真理子・・・83

付録 50 音社会学 ・・・89

奥付

## 12：鍼灸のエスノメソドロロジー

－2006 年度実習報告書&大学院人間・  
自然環境研究科地域社会論Ⅲ・社会組織論  
レポート集－

執筆者一覧 榎田 美雄・・・1

### 第Ⅰ部 本文を読む前に

まえがき 榎田 美雄・・・2

トランスクリプト記号一覧

榎田 美雄・・・4

### 第Ⅱ部 本文

第1章 「鍼灸エスノメソドロロジー」のために

榎田 美雄・谷井 楨佑子・齋藤 雅彦  
・・・5

第2章 東洋医学としての鍼灸－大崎一葉氏イ  
ンタビュー（2006年6月9日）のトランスクリ  
プト－

齋藤 雅彦・・・7

### 第Ⅲ部 大学院人間・自然環境研究科 地域社会論 Ⅲ・社会組織論レポート集

第1章 インタビュー実践のフィールドワーク

－阿波おどり有名連の女性連長と副連長へのイ  
ンタビューを素材として－

藤代 滋・・・32

第2章 インタビュー論－対話的構築主義という  
立場に示唆をうけて－

中恵 真理子・・・42

### 第Ⅳ部 付録

添付 DVD 収録データ一覧

志村 裕子・・・48

奥付

13:『医学教育のエスノメソドロジー』本  
体データ (総合版 PDF)

まえがき 榎田 美雄・・・1

第I部 D.メイナード講演記録

(a)メイナード博士連続講演 (全5回) の概要  
榎田 美雄・・・9

(b)講演記録:悪いニュースと良いニュース:  
ニュースをどう伝えるか (2004年3/6)  
南 保輔訳・・・11

・D.メイナード著『医療現場の会話分析』書評

(a)筑波大学 年報筑波社会学第16号より (転  
載)

五十嵐 素子・・・37

(b)明治学院大学社会学部附属研究所研究所年  
報35号より (転載)

田中 剛太・・・43

(c)新規書き下ろし 相野田 紀子・・・45

(d)日本保健医療社会学会保健医療社会学論集  
第15巻1号 (2004年/p.54-55) より (転載)

平 英美・・・49

(e)『医療現場の会話分析』を教科書として利用  
してー学生の感想を中心にー

阿部 智恵子・・・(1)

・ジャミックジャーナル2004年7月号より (転載)  
「医療現場の会話分析から」

榎田 美雄・仁科 典子・・・51

第II部

週刊医学界新聞「マレーシア国際医学大学視察  
報告記」より (転載)

寺嶋 吉保・・・55

(a)紙面版 (前編・後編)

(b)Web版 (前編・後編)

立教大学社会学部研究紀要 応用社会学研究第  
47号より (転載) 「医学教育のための応用エス  
ノメソドロジー研究」

岡田 光弘・・・65

訪問看護師インタビュー

榎田 美雄・阿部 智恵子・・・81

119データトランスクリプト(X消防、一部)

制度的場面研究会・・・113

添付DVD収録データ一覧

志村 裕子・・・115

奥付

14: 榎田 美雄

ある戦争遺跡にみる追悼の重層性と相  
互反映性

ー地域づくり資源・学習資源・観光資源と  
しての陸軍病院壕ー

in 副田義也 (編)『死の社会学的研究:平成  
17年度~平成19年度科学研究費補助金(基  
盤(A)) 研究成果報告書』

掲載頁P.146~P.154

15: 中恵 真理子・檜田 美雄・吉沢 毅・  
山本 明子・佐藤 和喜雄

＜聴声（ヒアリング・ヴォイシズ）＞  
というアプローチが紡ぎ出す世界  
—インタビュー記録と若干の覚え書き—  
in 『Discussion Paper in Social  
Sciences』第4号 P.1～P.23

紹介	・・・1
まえがき	・・・2
インタビュー録	
1) 一部	・・・3
2) 二部	・・・11
インタビューを終えての若干の覚え書き	・・・22
引用・参考文献	・・・23

## 編集後記

企画から1年半がかりで『社会学とともに—水曜読書会 100 回記念誌&2007 年度徳島大学榎田ゼミ論集—』を公表することができました。企画から脱稿まで徳島大学榎田美雄先生、石川県立看護大学阿部智恵子先生には多大なるご尽力をいただきました。お二人のお力なくして発行することはできなかったと思います。ここに改めて感謝申し上げます。

水曜読書会は、主宰者である榎田先生のリーダーシップと参加者のメンバーシップの相互作用により、今日まで継続されています。参加者は興味を抱いた本を読みこみ、発表とディスカッションをとおして、その折々の自らのテーマについて考える糸口を見つけたり自らの思考を洗練させたりしてきました。読書会に参加された方々の一人一人の氏名を記すことはいたしません、この場をお借りして読書会を支えていただいていることに感謝申し上げます。

また、榎田先生は、一貫して、学生に社会調査実習等のゼミ経験を通して、研究したことを活字にして残す意義と研究の醍醐味を浸透させてこられました。実践していることは、必ずまとめて公表するということを継続されています。その結実として、この報告書があります。過去のゼミ論集を読み返していますと、内容のおもしろさに時間がたつのも忘れるほどでした。と同時に活字に残す意義を再認識しました。

この『社会学とともに—水曜読書会 100 回記念誌&2007 年度徳島大学榎田ゼミ論集—』をご一読頂いた方々には、社会学にどのようなイメージを抱かれましたか？とつきにくいイメージでしょうか？「社会」の本体は人間であり、社会学は人間学であると言われていいます。どのようなテーマや内容であっても社会学は扱うことが可能な間口の広い学問です。「今まで当たり前だと思っていたことを本当にそうなのか？と疑って考えてみる」ことは思考のトレーニングにもなります。この報告書に少しでも興味や関心をお持ちいただいた方には、是非気軽に水曜読書会にご参加いただきたく願っております。もちろん学生・社会人などの所属や参加頻度等は一切問いません。

編集委員会を代表し、水曜読書会とつながってきたメンバーの一人として、水曜読書会の継続とさらなる発展を心から祈っております。

2008 年 8 月 『社会学とともに』編集委員長 橋本文子



**徳島大学総合科学部社会学研究室報告 既刊 (国立国会図書館等所蔵)**

- |    |  |            |
|----|--|------------|
| 1  | エスノメソドロジーとその周辺<br>ー平成9年度徳島大学総合科学部榎田ゼミナール ゼミ論集ー                       | 1998年3月発行  |
| 2  | ラジオスタジオの相互行為分析<br>ー平成9年度徳島大学総合科学部社会調査実習報告書(第二版)ー                     | 1998年10月発行 |
| 3  | エスノメソドロジーと福祉・医療・性<br>ー平成10年度徳島大学総合科学部榎田ゼミナール ゼミ論集ー                   | 1999年2月発行  |
| 4  | 障害者スポーツにおける相互行為分析<br>ー平成11年度徳島大学総合科学部社会調査実習報告書(第一版)ー                 | 2000年2月発行  |
| 5  | 日常生活の諸相<br>ー平成11年度徳島大学総合科学部榎田ゼミナール ゼミ論集ー                             | 2000年2月発行  |
| 6  | 現代社会の探究<br>ー平成12年度徳島大学総合科学部榎田ゼミナール ゼミ論集ー                             | 2001年2月発行  |
| 7  | インタビューと対話の相互行為分析ー気配りと配慮の社会学ー<br>平成14年度徳島大学総合科学部社会調査実習報告書(第一版)        | 2003年2月発行  |
| 8  | インタビューと対話の相互行為分析ー気配りと配慮の社会学ー<br>平成14年度徳島大学総合科学部社会調査実習報告書(第二版)        | 2003年9月発行  |
| 9  | 社会学の窓ードラマティックな日常生活ー<br>ー平成15年度徳島大学総合科学部榎田ゼミナール ゼミ論集ー                 | 2004年2月発行  |
| 10 | 義肢・装具のエスノメソドロジー<br>ー平成16年度徳島大学総合科学部地域調査実習報告書ー                        | 2005年2月発行  |
| 11 | 生活の中の相互行為<br>ー平成17年度徳島大学総合科学部榎田ゼミナール ゼミ論集ー                           | 2006年2月発行  |
| 12 | 鍼灸のエスノメソドロジー<br>ー平成18年度地域調査実習報告書&<br>大学院人間・自然環境研究科地域社会論Ⅲ・社会組織論レポート集ー | 2007年2月発行  |

---

**社会学とともに**

(水曜読書会 100 回記念誌 & 2007 年度徳島大学榎田ゼミ論集)

発行日 2008 年 9 月 18 日

編集 『社会学とともに』編集委員会

〒770-8502 徳島県徳島市南常三島町 1-1 徳島大学総合科学部 榎田研究室気付

TEL : (088) 656-9308、E-mail : kashida.yoshio@nifty.ne.jp

<http://www.ias.tokushima-u.ac.jp/social/index.html>

印刷・製本 株式会社 インダ測機

〒770-0853 徳島県徳島市中徳島町 2 丁目 82 番地

TEL (088) 625-0720 FAX (088) 625-0740

E-mail : info@isds.co.jp

---

本報告書は、徳島大学総合科学部学部長裁量経費による助成を受けて発行された。



